

天壽百歳會長丈あつて今一口食はむと欲するものを控へるならば人は自から百歳まで生きることが出来るとの意を寓したのであらう是は序でに記して置くのである。

二宮翁の弟に三郎左衛門といふ人がある其人から三代目の孫に當る二宮兵三郎といふ人が栢山村に居る、余は此人と懇意になり屢々翁のことにつきて質したことがある、此人は余の知る人の中で最も多く翁が幼時のこと及び未だ世に知られないことを知つて居る人の一人であるが、其家に翁の遺物として古びたる「大學」實語教」有名なる「家財諸道具賣拂帳」など、いろいろの珍品がある、其中に古びたる一冊の俳句帳もある、其俳句の中で最も余の感じたのは、

長閑かさや大磐石の人こゝろ
といふ句である、俳句の中には、二宮山雪と記してあるのが四五句もあるが、此句にも亦山雪としてある、そこで段々研究して見た所が山雪といふのは翁の俳號であつて、此句は翁が二十歳前後の時に詠まれたものと思はれる、斯ういふ落つき拂つた、山が崩れても動かないやうな安心立命の出来た腹の底を現はすことこの出来る俳句は兎ても凡人の企て及ばない所で、體にこれは翁の詠まれた句に相違ないと思はれる、余は文學者でないから翁の俳句に就て文字の排列や言廻はしを大膽に評するの資格はないが、叙上の句の如きは腹のある人でなければ到底言ふことこの出来ない句であると思ふ、此句と同じく、

天地や無言の經を繰りかへす

といふ一句がある、是又腹あり頭ある人でなければ詠めない句である、又、

並木より七八丁は潮干かな

といふ句がある、此句は想ふに翁が屢々酒匂川の堤防傳ひに川下に沿ふて相摸灘に接する所まで行かれた時に其景色を詠まれたものであらう、又、

暮るゝとも思はず花の山路かな

是は「報徳記」にもある如く翁が「鷄鳴に起て遠山に至り或は柴を刈り或は薪を伐りて之を鬻ぎ、夜は繩を索ひ草鞋を作り寸陰を惜み身を勞し心を盡し母の心を安んじ二弟を養ふことにのみ苦勞せり、而して採薪の往返にも尙は大學の書を懐ろにして途中歩みながら之

を誦し少しも怠らず」云々とあるやうに、此歌も遠山に出入した時の途すがらなごのことと思ひ合せると洵に興味の盡きざるものがあるやうに覺へる。

此句に似寄つた劔持廣吉の歌に、

降る雪をちりしく花と踏ゆけば

暮るゝも惜しき足柄の山

と云ふのがある、これは言ふまでもなく足柄山は曾比村に近く、二宮翁の居村栢山村に程遠からぬ所にある、是等を地理上より、考へ合はせる時は此二つの句の中には何となく慕はしい奥ゆかしい所があるやうに思はれる、尙は翁の句に、

雉鳴くや七里並木の右左り

笠取つて行くもよし春の雨

落角や枯いたどりの五六尺
 春の暮扇子の風の立つ日かな
 と云ふのがあるが、是等は翁の幼時より壯年
 時期に達せらるゝまで勤勞せられたる草鞋の
 跡や斧を打込みし跡を印象する所の句であつ
 て、翁が未だ家を成さざりし前に於て風雪に
 曝らされたる艱難の跡が偲ばれて何となく奥
 床しいのである。

それから文か詩か歌か何かサツパリ分らな
 いが、翁の性格を窺ふ一端にもなると思ふか
 ら序に掲げて置く、それは、
 「東西南北四本の柱青天井を我部屋として」
 と、云ふ句であるが磊落奇偉の一端が尙ほそ
 の中に現はれて面白い。

逸話 不動尊の畫像

二宮尊徳、床の傍に不動尊の像をかける
 山内董正曰く、卿は不動を信するか、翁曰く
 予壯年小田原侯の命を受けて野州物井に来る
 人民離散土地荒蕪、如何ともすべからず、仍
 て功の成否に關せず生涯こゝを動かじと決心
 す、たとひ事故出来し背に火の燃へ付くが如
 きに立至ることも決して動かじと死を以て誓ふ
 然るに不動尊は動かざれば尊しと訓す、予其
 名義と猛火背を焚くといへども動かざるの像
 形を信じ、此像をかけて其意を妻子に示す、
 不動尊に何等の功驗あるを知らずといへども
 予が今日に至るは不動心堅固一つにあるので
 ある云々。

逸話 二宮翁の度量

二宮尊徳翁が、下野の櫻町にをつたとき、

一日のことであつたが、下男が要事で物井村
 に赴く途中、急に下痢を催したので、路傍の
 廁に入つて用をたした、ところがその廁は、
 柱が非常に損じ、簷が傾いたのを、竹竿でヤ
 ット支へて居つたのであるから、下男が誤つ
 て其竿に觸れると、忽ち覆へつたのである、
 廁の持主は大酒を呑み、博打をやる無頼漢で
 あつたので、此の有様を見て、大に怒つた、
 下男は平身低頭して謝つたが中々聞入れると
 ころではない、棒を把つて、打たうとしたの
 である、ソコで下男もコレハ堪らぬと、早速
 走つて、尊徳の門に歸つた、すると尊徳はこ
 の事を聞いて其人に向ひ「廁が倒れる程なら
 其廁ばかりでなく、大方本屋も破壊れて居る
 であらう、廁はもとより修理するが、序に本

屋も改築してやつたら、内の下男に遺恨はな
 いであらう」といつて、大工に命じて其家屋
 を改造した、ところが其人も大に愧ぢ入り、
 後には酒や博奕をやめて、正業に基き良民と
 なつたとある。

逸話 二宮翁の斷食祈誓

我邦にて、實業獎勵の爲に誠を盡くせし人
 は、二宮尊徳翁である、翁の一代記中には、
 後人の龜鑑とすべきことが、澤山あるが、其
 一例は、翁が成田山へ祈願をかけたる一事で
 ある、聞く所によれば、翁は文政年中、小田
 原侯の命によりて、野州櫻町に至り、舊領地
 の荒廢せるものを恢復することに取り掛つた
 ことがある、其住民皆極貧に陥り、衣食足ら
 ざるに、耕作を力めず、私欲に耽り、酒食を

貪り、博奕を事とし、日夜唯他を苦め、己れひとりを利用せんことを謀り、公事訴訟の止む時なき有様なれば、小田原侯屢々吏員を派して、之に制裁を加へんとするも、人民中に奸物ありて、其命に應せず、手を下すこと出来ず、土地は益々荒廢し、人氣は益々奸惡に陥り、其窮乏目もあてられぬほどになつたと申すことぢや、然るに翁は、此難局を引受け、銳意熱心に計畫を定め、朝は鶏鳴より夜は星を戴くまで、領内を巡視し、戸毎に立ち入りて住民の寒苦、農事の勤惰を調べ、迅雷烈風の日と雖も、一日も休まず、斯くして計畫を定めたる後、勸農の道を教へ、悪人を諭し、貧民を撫し、用水を堀り、荒地を拓き、勤儉を説き、萬事を一身に引受け、殆んど至らざる所なく、盡くさいる所なきほどであつた、而して其一身は、衣は綿衣を用ひ、食は一汁を限り、民家を巡視するときは、冷飯に水をそそぎ、味噌を嘗むるの外餘菜を用ひず、村民の進む食品は、一も受取らずして諭していふには、汝等は懶惰の爲に、此の如き貧困に苦めらるゝに至れり、予は汝等に代り、千辛萬苦して汝等を安んせんぞとす、他日汝等の衣食に富める時を待ちて、予も亦安んじて衣食せんと申して、終日暫時も休息することなく、夜も僅に二時間位眠りて、鶏鳴に先ちて起き、其日になすべきことを考へなごして、到底常人の爲し能はざる事を爲したりとの事ぢや、其至誠は、天地も爲に動き、鬼神も爲に感ずる程なれば、村民も感服せざるはなき

筈なるに、村中の倭奸邪智の輩、ひそかに翁の計畫を妨げんと欲し、色々の故障を申立て或は愚民を煽動して、何事にも手を下さんとすれば、百方邪魔を働くものありて、意の如くならず、中には翁を讒訴するものもありて、如何に説諭を加ふるも、其非を悔ゆることをなさざる有様なれば、翁は大に嘆息して此上は人力の及ぶ所にあらず、神佛の力を假るの外に道なしと思ひ、總州成田山に至り、三七二十一日間の斷食をして祈誓を立て、灌水を行ふて身を清淨にし、一心を籠めて、上君意を安んじ、下農民を救はんことを願ふたと申すことぢや、村民此事を聞き、頑愚のものまで、深く其至誠に感動して、前非を悔い訓言に服し、日ならず興復の道其緒に就き

遊民迹を絶つに至れりとの事、是れ全く至誠の感化と申すものぢや。斷食祈誓の事は、稍、迷信に類する様なれども其當時の事情に就きて考ふるに、翁が至誠の一心より起り、天に訴へ地に祈りても、興復の道を立てんとすの熱誠が、翁をして此に至らしめたるものにして、凡常の迷信と同一視することは出来ぬ、即ち死生を賭し、萬苦を嘗めて、村民を救護したいとの、滿腔の熱心より出でたる斷食祈誓にして、世人の、一身一家の福壽の爲の斷食祈誓とは、天地雲泥の相違である、翁の傳記を讀むものは、斷食の末を見るよりも、熱心の本を考へねばならぬ、多くの人の中には、一身の利害の爲に斷食するものもあるも、他人の爲、社會の爲に、

よく之を爲し得る人はなからうと思ふ、故に此點は、實に翁の至誠の度の、如何計り深いかを測量するここが出来る。

雜錄 大學の料理

二宮翁が浦賀の人、宮原瀛州、外數人に宛て、送つた手紙は随分長文であるが、其追書がなかく面白、其意味は大學の棚晒しで人々が讀まない、又大學其ものは骨も大きく肉も澤山であるから世人が之を咀嚼するのに餘程困るのであるから、余は世の人々が之を咀嚼し得るやうにしてやるといつて大學の難解い意義を三十一文字にして讀まれたのが即ち左に掲げる歌である、歌を紹介する前にその歌について居る書翰の一部を示さう、追て申展候近代世上一統華美柔弱に相流れ

古人の金言杯のかたき物を能くかみしめ深く味ふもの鮮なし、情其元を案するに今眼前其表前後の海底より釣出し候大魚は勿論小魚といへども、切り刻み煮炙致し候て日用食物人命の助とも相成可申候、況や千歳の昔し異國より來り候大學論語杯は天下國家を治るの大徳備り居候得とも肉も多身も多し定て大なる骨の可有之候に付中々以、諸人もてはやすのみにして、丸呑には相成兼、年久しく店ざらし同様に相成居候古もの、一兩句見付こけをふき、皮をはぎ筋も骨もごり、平生日用に人々相用候平假名にて賤の女賤の男が、白挽歌一同様或は老人又は小兒にも吞込み仕安く仕立爲御試一少々差遣し申候に付御賞味可被下候、

其外神儒佛の三昧、悟道、即席料理杯も是亦數年天地の間に借地、仕り人様の厚き御世話を蒙り渡世仕居候間、右爲二報徳一御望次第案外御安く差上可申候に付、早々御越御求御施し被下候は、御地三崎邊此節不漁の由窮民の一助にも相成可申候、以上

別紙

在リ明ニスルニ明德ヲ

豊あしのふか野が原を田となして米を作りてくらふ樂しさ

在リ親ニスルニ民ヲ

田を開き米を作りて施せば命あるもの皆ふくすらん

在リ止ニ至善ニ

田を作り食を求めて譲りなば

ニノミヤソントク

いく代ふるともこれに止まる

學而時習之ヲ亦説カラサヤ乎 有朋自遠

方來ル不ニヤ亦樂一乎

詩うゑて時々芸に耕せは

したいくにたのしかるらん

人不ズ知而シテ不ズ温ラ 不ニヤ亦君子ヲ乎

委こそ深山かくれに苦むせど

谷うち越へて見ゆる櫻木

至誠之道、可ニシテ前知、國家、將トスルヲ興

必ニ有ニ禎祥、見ニハレ乎著龜ニ 動ニ乎四體ニ

故ニ至誠ハ如レ神ノ

北山は冬氣にとちて雪降れど

ほころひにけり前の川柳

湯ノ之盤、銘ニ曰ク 苟モ日ニ新ニテ 日ニ日ニ新ナリ

又タ日ニ新ナリ

いにしゑの白きをおもひ洗濯の

かへすくも返すくも

温故ヲ而シテ知新ヲ

故道に積る木の葉をかきわけて

天照神の足跡を見ん

色不異空 空不異色 色即是空 空

即是色 受相行識 亦復如是

春は花秋は紅葉と夢うつゝ

寝ても覺てもあり明の月

天何ヲ言哉 四時行ヘ焉 百物生ヲ天

何ヲ言ヤン哉

音もなく臭もなく常に天地は

書かざる經をくり返しつゝ

雖非正直 一旦依怙終蒙日月之憐

丹誠は誰しらすともおのづから

秋の實法のまさるかすく

如保赤子 心誠求之 雖不中不遠矣

未下有學 養子而后嫁者上也

巳が子をめぐむ心を法とせば

學ばずとも道に至らん

兔に角、翁の胃の腑は恐ろしい消化力で、孔

子であれ、釋迦であれ、翁の胃袋の中に這入

るところごとくく消化して出るのである、學問

を丸呑みにする學者とは同日に論せられない

二宮翁の教訓

二宮尊徳翁は窮貧なる小農に身を起し、勤

儉を以て天地の徳に報ひんと欲し、分度法を

設けて荒蕪を拓き窮乏を賑はし功を収むるこ

と少からず、小田原相馬等の諸侯、その法を

奉じて財政を回復せり、報徳會と稱するもの

現今猶各地に行はる、其教訓に曰く、

父母、根元、在天地、令命

身體、根元、在父母、生育

子孫、相續、在夫婦、丹精

父母、富貴、在祖先、勤功

吾身、富貴、在父母、積善

子孫、富貴、在自已、勤勞

身命、長養、在衣食住、三

衣食住、三、在田畑山林

田畑山林、在人民、勤耕

今年、衣食、在昨年、産業

來年、衣食、在今年、艱難

年々歳々不可忘 報徳

雜錄

二宮翁の談片

二宮翁金治郎生先曰く、

貧と富とは、元と遠く隔つものにあらず

二ノミヤソントク

只一の心得あり、貧者は昨日の爲めに今

日つとめ、昨年の爲めに今年勤む、故に

終身苦んで其効なし富者は明日の爲めに

今日勤め、來年の爲めに今年勤む、故に

安樂自在にして事成就せずと云ふことな

し、然るに世の人、今日飲む酒なき時は

借りて飲み 今日食ふ米なき時は又借り

て食ふ、これ貧窮すべき原因なり、今日

薪をとりて明朝飯を炊き今夜繩を縛ふて

明日繩を結は、安心にして差支なし、然

るに貧者の仕方は、明日取る薪にて今夕

の飯を炊かんとし、明夜絢ふ繩を以て今

日繩を結はんとするが如し、故に苦んで

効ならず。

實に金言と云ふべし、深く之を思へ。

雑録 貧富常住なし

二宮翁夜話に曰く、

咲けば散り散れば又咲き年毎に

ながめつきせぬ花の色々

困窮に陥り如何ともすべきやうなくて、

買り出す物品を安いものだと悦んで買ひ

又不運極り 據なく家を賣て裏店へ引込

めば表店へ出て目出度いと悦ぶもの絶へ

ずある世の中なり、

増減は器 傾く水を見よ

こちらに増せばあちらにはへる

物價の騰貴に大利を得るものあれば大損の者

あり、損をして悲しむものあれば利を得て悦

ぶものあり、苦樂存亡榮辱得失、こちらが増

すとあちらが減るとの外になし、これ自他を

見ること能はざる半人足の寄合仕事なり、

喰へばへり減れば又喰ひいそがしや

永き保ちのあらぬ此身ぞ

屋根は銅板で葺き藏は石で築くべけれども、

三度の飯を一度に喰ひおくことは出来ず、や

がて寒さが来ると着物を先に着ておくこと云

ふことも出来ぬ人身なり、されば長く生きら

れぬ天命なり。

雑録 船の喩

又曰く、

家をば船と心得べし、之を船とする時は

主人は船頭なり、家のものは皆乗合なり

世の中は大海なり、然る時は此家船に事

あるも、又世の大海に事あるも皆通れざ

る事にして、船頭は勿論此船に乗合ひた

るものは一心協力此家船を維持すべし。

さて此家船を維持するは楫の取りやうと、

船に穴のあかぬやうにするとの二つが専務な

り、此二つに能く氣をつければ家船の維持疑

ひなし、然るに楫のとりやうにも心を用いず

家船の底に穴があきても之を寒がんどもせず

主人は働すして酒を呑み妻は遊藝をたのし

み、悴は碁將碁にふけり、二男は詩をつくり

歌を詠み、安閑として歳月を送り、終に家船

をして沈没するに至らしむ、歎息の至りなら

ずや、たとひ大穴ならずとも少しにても穴が

あきたらば、速かに乗合一同力を盡して穴を

ふせぎ、朝夕どもに穴のあかざるやうによく

心を用ゆべし、これ乗合の者の肝要の事なり

然るに既に大穴あきて猶之を塞がんともせず

各々己が心の儘に安閑と暮して居て誰か寒い

で呉れそうなものだと待て居て濟むべきや、

助け船をのみたのみにして居て濟むべきや、

船中の乗合ひ一同、身命をばげうちて動かさ

ずんばあるべからざる時なり。

ニヤクフシヨウジャ 若不生者

衆佛にならずは我も正覺を取らずと云ふ法藏比丘の

誓約なり、大無量壽經に「一ノ一不取正覺」とあり、

【醫論】 保証人と借用證書

世間でも金を借る時には、抵當入れて證書

をかき親類や組合を保証人に立て、まだ其上

に登記を経るは、貸手の方にかへせばよいが

の疑があるからちや、然るにしかとした證

書に保証人が印を捺し、登記まですんだなら

もう返そうかの疑なく安心して金を貸す様に

なる、今も丁度その如く、本願の御目當のわ
れ／＼が疑ひの心ふかくして、一度や二度の
御誓ひでたのむ心が起らぬゆへ、大悲の親は
不取正覺と正覺の命を書入れたまひ、助けそ
こないがあらうなら、極樂浄土も野原になり
落ちる女人の魁して、地獄の釜敷になるぞよ
と御誓ひあらせられ、六方恒沙の諸佛方は、
舌を質入れにしての御請合、間違ふ氣づかい
のない様に、南無阿彌陀佛の證書をかいて、
アサ悪人我たのめ女人本願が信せよと、聲は
り上て喚かけ玉ふ、たしかな本願がきこへ
るなり、もう疑ふに疑はれぬ、いかな氣強い
凡夫でも、はやく小言の手がつきて、御助け
候へとたのみ奉る。

因縁 王陵の母

したれば、王陵は悲歎の涙にくれけるが、其
後餘念なく高祖に使へて功名を天下にあらは
したと云ふことがある、これ母親が身をすて
た故、王陵の心が定まりたのぢや、今阿彌陀
如来は若不生者と誓ひ玉ひて、我等が爲めに
御身をすてられ、恒沙の諸佛も御舌を三千大
千界にのべられ、此舌が壞爛してやぶれた
るゝとも、往生ばかりは疑ひないぞと、これ
亦御身にかへて御すゝめ下された。

ニヨニンジヨウツツ 女人成佛 【衡語】

佛法の非器たる女人をして佛果を開かしむるは彌陀の
本願力なり、四十八願の中、第三十五の願を指す、

歌 こと浦に朽ちて捨てたる海士小舟
我が方にひく波もありけり

これは女人往生のこゝろを詠みたるもので

前漢の王陵と云ふ人、漢楚の戦のみぎり
大勢の麾下を引きつれて漢の高祖に従ふた、
楚の項羽大に腹を立て、かの王陵の母親を捕
へおいたが、折柄王陵用事があつて項羽の方
へ使を越した時、これ幸の折なりとて、王
陵が母を引出し使者の目の前へ引きすへ、汝
ち歸つて王陵にかたれ、急ぎ漢王に背いて我
に従はずば、汝が母は釜いりにするぞ、此旨
ねんごろに申せ」とあつた時、王陵が母ひそ
かに使者にさゝやひて申すやう、「其方歸つた
ならば王陵に傳へて下され、必ず／＼母に引
かれて二心を懐くな、漢王は長者なり、随分
抽んで、忠義をせよ、我れ死を以て使者にお
くらん」とて、刀を以て喉を貫き、使者の目
前で自害をせられた、使者歸りて此趣を申

ある、歌の意はこと浦にとは外の浦と云ふこ
とである、朽ちて用いたゝぬ海士の舟とは、
濱邊にすて、見かへる人もなければついに沖
中へも出す、空しく汐に朽ちはつべきものな
るに、其朽ちたる捨小舟をさそひつれてゆく
波の力にて沖中へ浮び出る時節もありこの意
である、十方諸佛の御手にもれたる女人の身
は用にたゝぬ朽舟の濱邊にすてられたるが如
くである、彌陀の誓願にたすけられ奉る身
は波にすくひ出されて沖中へ浮び出たるが如
しと喩へたのである、第十八願に男子と女人
と共に誓ひを立て玉ふさへ難有きに、あまつ
さへ女人ばかりの爲めに第三十五の願を誓ひ
玉ふこそ、喜びの中の喜びである、すでに男
子は一の願に乗するに女人は重ねて二の願に

乗ずれば、他力いよく強くなりて、往生何のあやふみかあらん、女人の身はとりわけ此佛の御誓をたのみ奉らずば、百千萬劫を経こも女身を轉する期はないのである。

因縁 苧藻姫の發心

中納言時盛の女に苧藻姫と云ふ美人あり、源平の合戦に思ふ君は戦死せしにより發心難髮して六角堂の觀音へ參籠し、末代の女人成佛の道あらば示し玉へと祈誓す、時に芳齡正に十九歳でありた、其満願の夜は宛も五月六日に當る、乃ち苧藻姫一首の和歌を詠じて觀音に捧ぐ、其歌に

いかにせん今日の六日のあやめ草

と、この六日のあやめ草と云ふは末代濁世を

指す、ひく人もなきとは三世諸佛にすてられたこと……、然るに其夜五更の頃、觀音菩薩、妙なる御聲にて告げ玉はく、

ひく人のなきこそよけれあやめ草

五月五日はあやめ草といへども、六日のあやめは祝儀の入用もすむ、あとの祭でそんな役に立たぬ、それでも花もさいておればよけれど、葉ばかりのあやめは祝儀の時にはづれたれば引いてくれてもなる、しつ引く人のなるが却て幸ひ、葉がさかへて露が夜なくおこり月影が宿りて、さてく奇麗なと云ふころ、成佛の縁なき我等、煩惱の露に本願の月を宿して、往生淨土の素懷をこげるはア、慶ばしきかな、多生の強縁のしからしむ

る處である。

因縁 逆蓮華の由來

昔、京都に一人の尼があつた、春日明神に祈願をこめて、女人成佛の道を教へ玉へと祈りました、七日満する曉に夢中の告あり女人成佛の法はこの木像を念せよとの事、而して覺めてみれば何にもない、然るに翌日、或人材木を寄進しました、ほどなく一僧來て曰ふやう、我れこれにて佛像をつくるべしとて、一夜の間に佛像を造りて彼の僧は消え失せた、そこで尼僧は大に喜んで居た、然るに此佛像に蓮臺のなきゆへ、之を新調して乗せ奉るに、忽ち砕けてしまふ、再三すれども同じ、如何なる譯なりやと、七日の間斷食して如來に問ひ奉るに、蓮華をさかさまにせよ

この玉ふ、其如くすれば砕けずして今にあるこれに大なる譯のあることで、人間の心臓は蓮華に似たり、それが男子のは上を向き、女人のは下を向く、それゆへ一切の佛が蓮臺に座し玉ふは、男子は佛にならるゝも女人は佛法の器に非ずと嫌ひ玉ふころちや、然るに阿彌陀如來には、第十八願の上に重ねて三五の願を成就し、女人成佛の誓あることを知らせん爲めに、蓮臺をさかさまにして御満足あらせらるゝのである、これ現に京都新京極蛸薬師下る處に安置してある逆蓮華の由來であります。

仁慈 術語

廣く生あるものをあはれみ、いつくしむを云ふ、大無量壽經に「一ト博愛」さあり、

佛と鬼

或町に軒を列ねた商店があつた、甲の主人は慈悲ふかくして人に恵みを施すことを好み乙の主人は強慾一方で、我が懐をこやすことのみで、慈悲同情の心は露ほごもなかつたので、佛の憐に鬼が住むと世間の人に云はれて居た、或時大風吹きに、近所より出火して二軒とも火の粉の雨をかぶりしが、甲の家には數多の人かけつけて力かぎり能く防いだので危き中に家藏を全ふじたが、乙の家にはよりつくものなくて、何もかも全焼になつたところ、人を愛し人を利するものは必ず其身に福あり、人を惡し人を賊ふものは必ず其身に禍がある、禍福相承身自當之無誰代者ありて禍も福も皆自分々々の蒔き種のあらはれ

てあると思ふてみれば、なるだけ仁慈の心をはなさぬやうにせねばなりません。

マグドナール將軍の仁慈

彼のナポレオンが大軍を率いて、世豈我を妨ぐるアルプスあらんや、とて、世界第一の嶮山と云はれしアルプスを越えて伊太利に攻め入らしめた時、其一枝隊に將として此嶮山を攀ち上つたマグドナール將軍の麾下にピールと呼ぶ十三四歳の少年鼓手があつた、けなげにも他の兵士と立ち交つて少しも屈する色なく、時しも冬の半ばにて山は悉く雪に埋められ竿を以て雪の深さを計りつゝ進むの外なき難路を事ともせず進みゆくに、全軍の兵士の少年の勇氣に獎まされて山又山と進みゆく、忽ち百雷の一時に落つるが如き響して

山上の雪は轟然として下り來るに、幾十の兵士は避くる間もなく、幾丈とも知り難き谷底に落下し、或は雪に埋められ、或は岩に碎かれて生死の程も知り難きに至つた、先きの程まで勇み進みし少年鼓手もこの雪崩の爲めに失はれて其姿も見へざるに至りしが、遠き谷底にて太鼓の響の聞ゆるに兵士等は、さてはピールは未だ死せざると覺へたり、如何して助けまほしと、口々に語り合ひしかど、幾百丈とも知れ難き谷底に、雪や氷を以て鎖されたれば、下りゆく術もなし、かゝる程に打ち鳴らす太鼓の音は次第に弱く、ピールは凍へ死ぬにやあらんと思はれ、皆々心を勞する時しも、マグドナールは、我れ下つて彼を救はんといふに、兵士等は、將軍の一命は我等が

百千にも優れり止りたまへ、我等往きて助けんといへど、將軍は斷乎として「兵士は我が子なり、子を救ふは父の任なり」と、叱るが如くに云ひて大砲の綱を以て其身を縛し、上より釣り下さしめて太鼓を打つ力もなく、既に絶息せんとするピールを自分の身に括りつけ引き上げしめしに、兵士等はこの將軍の仁慈に感じて歡喜の聲はアルプスの谷々に響いたといふ。

紀伊中納言治貞夜番をなす

紀伊中納言治貞が、一夜寢所を出て、獨り藩邸を巡視し、夜番の者が斃れた衣服を着け、既足で、柏子木を憂々と撃つて夜警してをるのを見て、「汝は暫く休憩するがよからう」といはれると、夜番は主君であることを知ら

ないものであるから、辭退して「夜警には法があつて、若し違ふと罪に處せられます」と答へると、治貞がいられるには「吾は充分其の法を存じてをる、汝は心配するに及ばぬ」と、遂に柏子木を撃つて、大に夜警を呼び、邸内を一週したのである、それから明日になつて、國老を呼んで曰はれるには、「夜番の者は、風雨霜雪を冒して勤仕を怠らない、其勞眞に憐むべきである、これから恩惠を加へてやらう」と毎月二百文を増加された云ふことである。

ニンドウ、人道 【術語】

人の踐み行ふべき道を云ふ、儒道に談する五常、大無量壽經に説ける五善の如きこれなり、

歌

神佛名は異れども玉ばこの

道の外には道とてはなし
 神道あり、佛道あり、儒道あり、現今では基督の道なごもありませんが、畢竟する所は人の道を教へるまでの事で、人の道を離れて神の道も佛の道もある筈はない、農農たり、商商たり、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、夫夫たり、妻妻たり、官吏官吏たり、人民人民たり、少しも六つかしい事はない、極めて手近い所にある道で、何人もはなるべからざる道であります、古人が「道は邇きにあり」と申したのは此處であります、

無名の指

無名の指とて小指の隣の指は、何の用にもたぬ指なれども、この指がゆかんで居て人並にのびなると片輪ちやとて之を耻ぢ、之を

療治する醫者があるといへば千里を遠しとせずして療治をたのみにゆくが、心の不仁にしてゆがみたるは耻けしいとは思はぬかその御訓誡は孟子に出ております、體の片輪を耻づれども心の片輪を耻づることをせぬが人情の常なれど、心の片輪は體の片輪よりは恐ろしいもので、體だの片輪は人に傳染らねども、心の片輪はいやなもので、友達が悪ければ正直者までが悪を働く様になる、夫の心が曲んでおれば、妻や子供の心までが曲る、又妻の心が慳貪ちやと親孝行と云はれた息までが不孝者と云ふ片輪になる、依て大經悲化段に説いてある處の五善を守り、人道をふみあやまらぬ様、心の片輪とならぬやうに心がけねばならぬ、蓮如上人は「片目つぶれ腰を引き

候様なる者なりとも、信あらん人をばたのもしく思ふべきなり」と仰せられた。
 紳士と愛妾
 一人の老ひたる紳士が別荘を二ヶ所に持つて、其所には妾を一人づゝ蓄へて居りました或日年若い妾の所へ行きますと、彼の女の云ふには、妾は年が若いに貴方は老人ですから一向樂みがありません、ですから彼方のお妾さんの所へ行つて居りなすつたら宜しからうそこで紳士は白髪を抜き顔を若く作りて老妾の所へ行きました、すると老妾が言ふには、「妾は年老ひて頭が白くなつて居るのに貴方の頭が黒くていけない」と申して黒い髪をすつかりぬいて仕舞ました、黒い髪も白い髪もぬかれて頭は禿になりましたから、二妾とも

之を嫌ひまして近づけませぬ、紳士は愁に沈んで遂に死んでしまいました、紳士の本領は主義と信仰との二つであるが、主義もなく信仰もなく、あまつさへ女の爲めに一身を誤るが如きは、男子として最も耻づべきことであると云ふの教訓であります。

説書 八右衛門の裁判

有名なる熊澤蕃山の弟に泉仲愛と云ふ人がありた、その通稱を八右衛門と云ひ、備前岡山の池田侯に仕へて評判のよい役人でありました、或時領内に兄弟田を争ふものがあつて、双方とも尻押しの人多くして中々代官の命に従ひませなんだ、そこで侯は八右衛門に命じて裁断をさせられました、八右衛門は命をうけて兄弟の争ひを治めようと思ひ、自宅

に於て訴訟を聞くこととしました、さて八右衛門は加擔人の申すことは一切斥けてきかず兄弟二人を狭き一室に入れおき、今俄に用事出来たり暫く待たれよとて終日出會せず、食事を與へ酒を出し、又寒ければ入浴せられよとて非常に懇ろに待遇せられた、夕暮になると、御用未だ終らず夜更くるも今夜中に訴訟をきくべしとて二人の間に火鉢一個をおき、夜半に及べども出會はず、兄弟のもの晝顔の合はせ夜のふげゆくに隨ひ、二人いつとなく居寄りて、いづれも竹馬の鞭の振分髪なりし親を思ふ昔しの慕はしく覺へて兄の云ふやう、「此度の事件は自分が強いて云ひつものしゆへ事の起りたるなれば、今より争ひをや

めて共に耕作してはごうぢや」と云へば、弟も大に喜び、「左様にしてさへ下さらば何も申すことはござりませぬ」とて、兩人より其趣を申上りましたら、八右衛門も大に喜び「ア、斯くありてこそ兄弟の情もあるべし」とて、これより諄々人倫の道を説き聞かせましたら、兩人とも感涙を催して歸り、それより以後兄弟むつまじくなつたとある。

ニントクテンオウ仁 徳天皇 【人名】

人皇第十六代なり、名は大鷦鷯、應神天皇の第四子なり、寛仁慈惠、心を政治に盡すを以て名著はる、八十

説書 仁徳天皇の仁政

仁徳天皇、或時高臺へ上りて四方の景色を御覽になりましたが、人家より烟りの立ちのぼるのが誠に少い、これは定めて民百姓が貧

ニントクテンオウ

苦なからのことであらうと云ふので、三年の間年貢を納めることを免されました、それから三年目に又もこの高臺へのぼつて御覽になると云ふと、民家より烟の立ちのぼるありさまは、中々にぎはしくなつた、仁徳天皇は之を見たまひて、朕は既に富めりと仰せられたれば、皇后様は「陛下は宮室、御服皆粗末であるに何故に富めりと仰せ給ふや」とのたまふた、其時天皇の御答に「民の富めるは即ち朕の富めるなり」と仰せられたとある、又彼の名高き、

高きやにのぼりて見れば烟立つ

民のかまごはにきはひにけりの歌は、仁徳天皇が再度高臺へのぼりたまふての御製であるとも云ひ、又、後人が仁徳天

皇の御心を詠せしものであるとも云ふ。

ニシニク 忍辱

忍は耐なり、人より辱めを加ふとも忍んで怒らざるを云ふ、六波羅密の隨一なり、

譬喩 雪は豊年の兆

世間では雪を豊年の兆と云ふて、農家の人たちは大に之を喜びますが、其實は雪が五穀の肥料になる譯でもなく、又草木を繁殖させる直接の厚因でもない、しかし雪は豊年の兆と云ふのは、雪が降つた爲めに地中の陽氣を閉ぢこめて、少しも發散せぬやうにする、それであるから非常に多量なる陽氣は已むを得ず、地中に閉ぢこめられて、雪の消へ去るまでは潜勢力となつて地中に潛んで居る、それが一月二月となつて雪がとけ寒氣が去ると共

に、今まで地中に閉ぢこめられて居た陽氣が非常に猛烈なる勢力を以て一時に發生して來るから、此陽氣に助けられて五穀が非常に繁榮に向ふ、そこで雪の降つた明くる年は必ず豊年になると云ふ事である、滿州の土地を旅行した人の話によると、四五月時分以後になると滿洲の野は一面に青々たる原野となつて、其五穀や草木類の繁茂の有様は到底日本の内地で見ることの出來ぬ程である、かやうに滿洲の野が四五月時分より沃野千里の樂園になるのは、冬から春の初期にかけて非常なる雪が滿洲の原野を埋めるからである、其雪に埋められた結果として地中に非常に多量の陽氣を貯へ、此陽氣が原因となつて四五月時分以後に沃野千里の樂園を開いたのである

これは忍辱多力の例話として大に味ふべきことであらうと思ふ、

辱を忍ぶもの力多し、惡心を懷かざるが故に兼ねて安健を加ふ、忍ぶものは惡なし、必ず人の爲めに尊ばる、

とは釋尊の教へである、辱しめられても、猥りに怒りを發せず、靜に辱を忍ぶ人ならば、身内の勢力を費さず、心の中に怨憎の念を懷ぬから、心に至つて輕快になつて、何事をなすにも非常に偉大なる力を持つやうになります

歌

踏まれても根つよく忍べ福壽草

やがて花さく春を待ちけり

我國では「堪忍五兩」とか「短氣は損氣」などと申しまして、堪忍の大切なる事を教へてありますが、この思想は世界各國通じて教

ゆるどころであります、英國の俚諺には、
忍耐は凡ての戸を開く

と云ひ、露國では、
忍耐せよ、兵士よ、聽て大將と爲らん

獨逸では、
忍耐は快樂の門

又、
忍耐惡魔を食ふ

和蘭では、
忍耐は學問に優れり

伊太利では、
忍耐と時間とは金錢と萬事に勝つ

羅甸では、
忍耐は勝利なり

と云ふてあるのは、皆この忍耐の思想を鼓吹したる教訓であります。

又之部

又マダユキヨシ

沼田順義

人名

字は通意、樂天堂と號す、上野國群馬郡の人なり、嘉永二年十二月十七日病歿す、年五十八、

沼田順義の抱負

順義は壯年の頃に明を失ひましたれど、誠に記憶のよい人で一たび聞たことは決して忘れませぬ、廣く和漢の書を研究して思ひを國學に盡されました、加茂真淵の國意考や、本居宣長の直毘靈葛花等の書を讀みて、深く其道を罔ひ聖を誣ゆるの甚しきを憤り、級長戸の風を著はして宣長を撃ち、國意考辨妄を作りて真淵を排斥し、且つ言はるゝやう、二子の論ずる所、率ね其好む所に僻す、聖を無みし道は無みし忌憚あることなし其陋甚

し豈辨せざるべけんや」と、其自ら任ずる所斯の如くでありました、それゆへ師匠の林述齋先生も深く其説に服し、一書成る毎に必ず其巻頭に序して、「世上有眼の人多く瞽にして、瞽者反つて具眼を有する」の語あり、名聲大に著はれ、其門に集まりて講話をきくもの多く出來たとある。

子之部

子ハシエ 涅槃會

行事

二月十五日、釋尊入滅の日に佛事を行ふ儀式を云ふ、涅槃會を修せられた時に、様々の供物をこしらへ、其供物の上に花をさして供養せられた

が、其時に西恩法師といふ人が今の歌を短冊に書いて差出されたとある、二月の中の五日の夜半の月とは、釋尊入滅のころ、入りにしあとの闇を悲しきとは、父におくれて生る遺腹の子は成人の後、父のない事を悲んでしらの容貌を戀ひ慕ふ如く、釋迦如來は衆生の爲の慈悲の御父にましますとも、末の世に生れた我等は尊容を拜し奉ることがかなはぬ程に、

釋迦如來かくれましゝて二千餘年になりたまふ正像の二時は終りにき、如來の遺弟悲泣せよ、

後生とも菩提とも辨へなきものはいざしらす如何にも出離に志す程の身は、佛の御在世におくれたは悲しみの至り、さりながら父が

御存生の間に讓狀を認め、この家督は我が遺腹の子にゆづると、體に遺書をのこしておけば、親がなくとも家督の相續に違ひはない、大聖慈尊の父上は三千年の昔、御入滅あらせられたれども、末の世に生るゝ我等が爲めには、三部經のゆづり狀を遺させられ、我爲慈悲哀感獨留斯經止住百歲、一爲未來世一切衆生爲煩惱賊之所害者、三部經に説きおいた通りは、智惠才覺のある智者聖人の爲めではない我が末法の時の億々衆生煩惱の財の爲めに功德の財をぬすまれて、住み處もないものゝ爲めに殘しおく程に、この通り守りて極樂へまいれど、懇ろに御書置なし下されたればこそかたじけないは御座の我等、慈悲の御父にはおくれたれども、今は三部經を云ふ讓

状の爲めに、此回は往生淨土の家督を受け取りたのである。

キンプツ 念佛

【術語】

行願品疏鈔に、兩名念佛、觀像念佛、觀想念佛、實想念佛の四種を擧ぐる中、今は第一の兩名念佛にして、口に佛名を稱ふることを云ふなり、

念佛は野にも山にも申しおけ

盗人こらす鼠かららず

これは一休和尚の歌であると申傳へます、實にこの歌の通り、念佛は鼠のかちる心配もなく、火事に逢ふと云ふ憂もない、又盜賊につけらるゝと云ふ心配もない、蓮如上人も、「當流眞實の實は南無阿彌陀佛これ即ち他力の一心なり」と仰せられて、眞に六字の御名によつて如來の廣大なる眞實おまことの解し得られた身の上は、これこそ眞に無價の寶を

得たる身の上である、家は焼けても田畑は流れても資本は損亡しても、その時私共に慰めを與へ、云ふに云はれぬ喜びを得させて下さるゝは唯この六字である、もしも名譽が汚れて社會から擯斥された時、又は父母妻子に先立たれて悲歎の淵に沈んだ時、その時に人の知らぬ慰みと光明とを與へて下さるのは、唯如來の御まことの籠つた六字にあるのです、況んや今にも沙婆の縁つきで、妻子も財産も名譽も地位も打ちすて、行かねばならぬ時、末期の水の一滴さへ喉を通らぬ臨終に當つて私共の心の底に盡きぬ慰安を與くるものは何であるか輝ける希望を與へるものは何であるか、云ふにや及ぶ、此六字の外はあるまい。

歌 聲たへすなげや 鶯ひとせに

再びとだに來べき春かは

年に一度の春にもし鳴かずして過さうならば、もう其年に鳴くべき時節はない、但し習ひのない鶯、よき鶯につけなんだ鶯は、鳴くは鳴いても面白くない、どうで念佛するならば淨土眞宗の教へをうけて、金剛不壞の眞心を求念する、堅固の信心にもとづいた上に本願醍醐の妙藥を執持すべしで、南無阿彌陀佛々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々勝徳は云ふに及ばず、佛恩報謝師德報謝の經營これにすぎないのである。

歌 行やらて山路くらしつ時鳥

今一聲のきかまほしさよ

用あつて他所へ往くとして、山中を通りしに思ひがけなふ、杜鵑か啼た、今のは杜鵑、さ

待かねて怨むとつけよみな人の

南無阿彌陀佛の聲のをそきを
阿彌陀如來は我等か爲の慈悲の父母、御目を

見まはし御耳を傾けて、念佛申すか嘉號を唱ふるかと常住不斷我等を憶念し玉ふに、稱名の聲のおそきを御覽なされては、偕もいふ甲斐なきもの共哉と、御うらみも断りちやか、

「南無阿彌陀佛の聲を聞しめしつけられたる喜び又置き所なく思召すべし」と、向阿上人示しおかれた、かほご待ちかね聞かまほしく思召すに、宿善漸く時至つて、御助け候へと信せられ、やれうれしや南無阿彌陀佛と稱名の聲をきこしめされては、大悲の親様はいかばかりか御満足に思召すであらう。

句 煤拂やよこれぬものは聲ばかり
煤拂をすれば、顔も着物もよこれて、眞黒になれど、聲ばかりは煤拂にもよこれぬと云ふ句の意、これは「妄念の中より申す念佛は

濁りにしまぬ蓮の如く」とある御法語の如く五尺の身體は妄念煩惱の入れ物ゆへ、見るに付け聞くに付け、ほしやおしやでよこれてもよこれぬものは念佛相續の聲ばかりであります。

句 火を消すも火をおこすのも口のいき
洋燈の火をふき消のも、火鉢へ炭をついて小さき火を入れ、それをふきおこすのも、共に口のいき一つちや、いきに異はなれども消すとおこすとの大きな差違がある、念佛の聲にかわりはなれども、自力と他力の大違ひがある、稱へた力でまいろうと稱へる處に力を入れるが自力の念佛、信の一念の立處にハヤ往生一定の身となり、うれしや〜と相續するが他力の念佛

句 雪月花一度に來たか南無阿彌陀

花は春の陽氣に催されて爛熳たる錦を飾るもの月は秋の空に澄んで、玲瓏萬里を照すもの、雪は冬の景色を増すものにて、一夜の中に不夜城を現出するもの、ケ様に春と秋と冬と、季節が別々ゆへ一度に雪月花を見ることはならぬとも、この南無阿彌陀佛の一名號は萬善萬行の惣體なれば、雪月花を一時に見る如く一聲の念佛にも萬善萬行を具足するこゝとが出来ると云ふ句の意である。

醫論 卵の研究

卵を研究した生物學者は、二十年も三十年も研究の効を積んだ上で、卵の中から親雞と同じ羽色の子雞の出るのは、唯不思議と云ふより外はないと自白して居る、しかし私共は

其不思議の卵をば不思議なりに受用して居る今往生の正定業たる念佛も不思議なりに受用すればよいのです、それを研究せねば信受することが出来ぬと云ふのは本末輕重を知らぬものと云はねばならぬ、不思議なりでよいのです、唯義なきを義とすと信するばかりである。

醫論 唐箕

唐箕と云ふものは農家には誠に重寶なもので、米と糠と糖とを一時にくり分ける様になりて居る、昔は一人が箕に米を入れて上からそろ〜とおろせば、一人は大きな團扇にてあおぎて糠糖を去りて居たものちや、然るに唐箕に米を入れてくる〜とまわせば、米は米、糠は糠、糖は糖と三方へ分かれる、昔二

人かゝりてせし仕事を一人にて埒があき而も手早く出来るのである、ナントよき細工ではありませんが、今も其如く、阿彌陀如來の五劫の御工夫にて、こしらへ玉ひし他方本願の唐箕は、我れの爲めか人の爲めか、行者の方より兎や角の思慮分別はいらぬ、只一心に念佛の車の柄に信心の手をかけて、南無阿彌陀佛々々々と繰り出せば、地獄へも餓鬼へも、それ々の遣り口くへ如來より分てつかわさるゝことなり。

醫論 水

渴を覺へる時に一杯の水を呑んで蘇生の幸福を受けることがある、しかし其水が如何にして成立つておるかには更に知る所がない、勿論其水は酸素水素の化合から成立つて居る位

は知つて居ても、其根本の第一原理をば知つておらぬ、されど水を呑みさへすれば渴を醫し蘇生の思ひをなすのに違ひはない、今往生の正定業たる念佛も其如くで、研究せねば之を信受することが出来ぬと云ふのではない、たい不思議なりと信じ、義なきを義とすと眞受けにするばかりである。

醫論 萬歳

萬歳と云ふ聲は一つなれど、敵の陣所へ突貫する時の聲と、敵を撃退して目出度く凱旋する時の聲とは天地雲泥の差がある、敵の陣所へ突貫する時には、所謂「義は山岳よりも重く死は鴻毛よりも輕し」と云ふ思ひより、一生懸命に負けまいと云ふ命がけで萬歳を唱へつゝ奮戦するのちや、自力念佛が丁度

この通りで、起り来る煩惱の敵にまけてはならぬ、稱へた念佛を以て、首尾よく淨土まいりが致したいと、案じく稱へるのちや、又第十八願の念佛はそんな案じ煩らひのある念佛ではなひ、例せば、敵を十二分に撃退して再び立つことを得ざるの悲境に陥れ、目出度く大勝利を得て引き上げる時、即ち凱旋の時に萬歳を唱ふる如き味ひぢや、煩惱の敵は大願業力で撃ち破り、大善大功德の償金を得て、勇み進んで、喜びく稱へるが他力念佛である。

因縁 荒木又六と念佛

越前國福井侯の臣に荒木又六と云ふ人がありました、當流の勸化を聴聞して無二の信者となり行住座臥稱名たゆることなかりたと

ある、役所へ出勤して朋輩と列座して居ても常に念佛申さるゝゆへに、若き士などは指して武士に似合はぬ振舞ひと嘲り笑ふけれども、又六はすこしも憂へず、「我念佛すればとて君へ不忠はせず、別に咎にはなるべからずとて人の謗りを顧みず常に稱名しておられた、其父が他人の評判をきゝて又六を不憚に思ひ、有縁の僧に請ふて諫めてもらはれた、僧は牛盗人の祖誠を示し他人の中をはいからざるは不可なりと、懇ろに意見したまへば謹んで領承せられたれど、本願の尊とき自然と口にあらはれて、如何にやめんとしてもやめられぬゆへ、師に請ふて、此上は力およばず我一人には念佛を心のまゝにゆるさせ玉へとて、

忍ぶれど聲に出にけり我が念佛
 ちとたしなめど人の云ふまで
 今にはや破れかぶれの我が念佛
 もゑたつ火には水もたまらず
 と、二首の狂歌をよまれましたら、初めそし
 りた人も其至誠心に感服して、後には笑ふも
 のもなくなりたとある。

因縁 五通菩薩

五通菩薩と云ふが常に念佛を稱へて念佛三
 昧で御座りたが、或時睡眠の煩惱が起りしゆ
 へこれではならぬと、川で手水をつかひ、口
 を漱きなされた時、水を吐き出すに念佛もろ
 とも吐き出させられて我家にかへり、彌増に
 念佛を稱へて御座ると、奇麗な天人が菩薩の
 前へ顯はれて、天に踊り地に伏して敬ひ申す

ゆへに、五通菩薩、彼の天人に向ふて、我に
 何の因縁ありて斯くの如く敬ふやと尋られた
 れば、答ふる様、私はこの川下に住んだ大蛇
 でござるか、これまで永々の間三熱の苦し
 むを受けて難義を致しましたが、只今あなた
 の口へ入れ玉ひたる水を吐き出し玉ふたとき、
 念佛もろとも吐き出し玉ひたが、其水を一滴
 飲み込んだばかりで、蛇道をのがれ、天上に
 生れました、これ全く貴方の御蔭ゆへに、只
 今御禮にまいりましたと云ふ事が、百因縁經
 の中に御演説なされてある、實に廣大な念佛
 の功德ではありませんか。

子ンフツイホン 念佛爲本

【術語】 諸行往生を本とする宗門に對して「子ンフツイホン」と勸め玉ふ

法然聖人なり、選擇集に「往生之業」あり

醫論 饅頭とアッコ餅

饅頭はあんを中へ包み、アッコ餅はあんを
 外につける、あんを中へ包むと外につけると
 の違ひはあれども其體は同じことである、食
 ふた味は甘ひと云ふより外はなひ、法然聖人
 の念佛爲本は饅頭の如く、信心のあんを中
 包んで教へ玉ふ、其饅頭をひつくりかへして
 信心爲本のあんころにして教へ玉ふが我が親
 鸞聖人である、稱ふるものを助けふの仰せを
 聞いても、信するものを助けふの仰せを聞い
 ても、行者の聞へごころは、後生御助け候へ
 のおもいより外はない。

ノ之部

ノナカケンサン 野中兼山

【人名】 土佐藩の重臣なり、名は止、字良繼、通稱傳右衛門、
 土佐侯に仕へて六千石を食む、寛文三年病没す、年四
 十九、

野中兼山の公益

野中兼山は土佐の人である、或時江戸より
 郷里に書をよせて云ふやう、土佐は大低
 かなるものでもあれど、蛤蜊がないと思ふ
 から、歸國の節には一艘積んでかへると云ふ
 て通信したので、人々大に喜んで其歸國を待
 つて居た、すると兼山は約束の如く蛤蜊を船
 に積みかへり、土佐の城下へつくと、其蛤

鯛を残らず海中へ沈めてしまつた、人々驚いて其故を問ふと、兼山の答ふるやう、「かねて約束した蛤蜊は御身たちばかりでなく、御身達の子孫にまで、差上やうと思ふのたご云ふたごある、果して數年の後に數多の蛤蜊が蕃殖して、遂に土佐の名産となつたごある、こればかりでなく、兼山はいろ／＼の、公益をはかりました但其經營せし事業は、曾に土佐ばかりでなく、日本帝國の利益となつておる又土佐の室戸の灣は巖礁極めて多く、船舶の往來困難であつたので、兼山はこれを破砕せうとするご、土地の人民はこの灣の中に神様がござるから手を下すものには祟があるご云ふておし止めたれご、兼山は左様なる迷信を打破して、決して左様なる道理なき旨を懇

ろに諭して遂に工事をおこし、數月の後に埃功したので、それから以後、たると難船の患なく良き港となつたごある。
以上二個の事實の如きは國家的公益の最も顯著なるものであります。
ノミノスケ子 野見宿禰 【人名】
出雲の人、天穗日命十四世の孫なり、武勇を以て聞ゆ、
角力の始まり
野見宿禰は非常なる勇者であつた、其時に當麻蹶速と云ふ人があつて勇悍多力を以て自慢し、世間に乃公に敵するものなしとて大に氣餒 吐いて居た、そこで或人が野見宿禰と力をくらべて雌雄を決しては如何と申上たので、天皇は使を立て、野見宿禰を呼びよせ角力を命せられた、兩人各足を擧げて相蹴り

ましたが、野見は敵の肋骨及び腰を蹴つて之を折りましたので、蹶速終に死した、そこで蹶速が領して居た土地を悉く野見に賜はりたごある、これが本朝角力の始まりであるごうです。

ハ之部

バイサヲウ 賣茶翁 【人名】

肥前蓮池の人なり、姓は柴山、名は元昭、月海と號す
寶曆十三年七月寂す、壽八十九、

賣茶翁の風流

賣茶翁は肥前の人にて出家して元昭と稱し苦學遊方、筏海梯山、萬里を遠しとせずして

バイサヲウ

臨濟曹洞の名匠を訪ひ造詣する所深かりしも自ら足れりとせず、後に肥後にかへり其師化霖和尚に侍すること十四載、化霖入寂の後、飄然去つて京都に來り、小亭をかまへて通仙と名け、爐を開き茶を煎じて往來の人に嚮きて餘生をおくる、それより春花秋月を伴として或は蓮華王院松樹の下に茗を煎じ、或は法住寺翠竹の陰に爐を開き、東福寺松籟の下、鴨河の邊等に晏座して茶を賣り、以て人間妄想の眼を覺ました、翁が自警の句に、

夢幻生涯夢幻居了知 幻化絶親疎
貪ハ榮ヲ萬乘無足 退ラバ歩ヲ一瓢還テ有餘
無ニ事心頭情自寂 無ニ心事上境都テ如
吾儕苟得ハ體ニハ新ニ意ヲ廓落胸襟同ニ大虚
とある、又、茶籠に左の如き詩と狂句が記し

てあつたが、なか／＼おもしろい、
 莫レ道ヲ賣茶價甚々貴シト、伊將ニ紅葉一牛文ノ錢
 茶錢は黄金百鎰より半文錢まで呉れ次第只
 呑み勝手、只よりはまけ申さず、
 達磨さへおあしで渡る難波江の
 流れをくめる老の我が身ぞ

ハイリウ 廢立 (一傳話)

雜行をすて、正行に歸するを云ふ、

瘡瘡の病兒

或處に瘡瘡子がありて、癢がりて瘡瘡をか
 いたりむしつたりしたがる、そこへ一人の者
 が見舞に來た、其人が菊石でみられぬ顔付ぢ
 や、そこで母親が其人に向ふて「これはマア
 よく來て下された、先々こちらへ」と奥座敷
 へ通して、菓子を出すやら酒を出すやら様々

と馳走をする、此方は氣の毒がりて暇乞ひを
 すれども、そう云はずに折角にて下されたの
 ぢやで、病人の側に居て慰めてやりて下され
 ば、色々に云ふて病間へつれてゆいて、先づ
 この子の瘡瘡を見て下されと云ふ、そこで其
 人が病人の側へ行いたれば、親が云ふには、
 「コリヤ能く聞け、かりたりむしつたりする
 と、此伯父様の顔の様になるぞよ」といふて
 聞かせて「これは大きに御手間をとりました
 サア御歸り下され」と云ふたと云ふ話がある
 こゝが廢の爲めに説くので、折角寝間までつ
 れて來たのが、捨てるために我子に見せるの
 ぢや、今も其如くで、一代の經説、華嚴經の
 如來藏緣起の法門も、涅槃の畢竟寂滅の法
 門も、みな廢の爲めにこくと云ふて、すてさ

せん爲めに、難行苦行をこいて、御開かせ下
 されたのぢや、而して其半面には自力ではど
 ても佛にはならぬ程に如來の仰せに順ふて
 他方の船にのれよとすゝめられたものである

千丈の谷底

其椽側を飛んで見よと云はれた處で、二尺
 や三尺の所なら懐手しても飛ばるゝ何も用意
 もいらぬが、百丈も千丈もある山の上から谷
 底へ落ちると云ふ場合には懐手しては居られ
 ぬ、木の根巖角でも藤蔓でも手に觸れた程の
 ものに縫つて力にする氣になる、今も死にゆ
 く後生の一大事を二尺や三尺の椽から飛下り
 る様な心でおるゆへに、これでも御助け／＼
 と雜行も雜修も修する心もおこらねど、いよ
 く此度の後生を取り損じたら、もう取りか

へしはならぬ一大事と、千丈の谷底に墮ちる
 より、まだ恐ろしい大事と向ふてみれば、御
 經を讀むか戒を持もつか、御淨土へまいりた
 いの心掛から、自然と精出して折る心が出
 て來る、これ後生が大事となれば何かにつか
 まらねばならぬ故ぢや、今谷底へ落ちんとし
 て、やつと木の根や巖角につかまつておるも
 のに、それではとても助からぬ程に手を離せ
 と云ふたさて、これを離せば眞逆さまと思へ
 ばなか／＼離すものではない、其手を離すに
 は唯ははなされぬ、そこへ大方の男が來て、
 其方何程其様につかまつて居たさて、迎も上
 へは上られぬ、やがて其手がつかれて落ねば
 ならぬ、サア乃公が助けてくれる、サア抱か
 れよと、其大方で抱へてくれた時、今が今ま

で力にして居た木の根も藤蔓も皆なれて仕舞ふ、今がそれと同じことで、如何に雑行雑修自力を捨てよと仰せられたとて、後生が大事になればなる程、何か善根に心をかけ、少しの功德にでもつかまらずにはおられぬ、それを離せよ捨てよと仰せられても、中々捨てるものではない、然るに大願業力の如來の大悲で、逆も汝の力でつかまり通せる者ではない、臨終には自力のちからが盡きはて、三悪の底へ落ねばならぬ、サア此彌陀が抱へる程に、光明に攝め取つて助ける程にある、如來大悲の御呼聲を聞いて、やれうれしやかゝるものも御助はあなたばかり、助け玉へど大悲の光明に攝め取らるゝ時、これは捨てよう、あれは離そうとは思はねども、

雑行雑修自力のおもいはおのづからすたつてしまひ、手が離れる、依て先輩は、機○の○深信は自力をすてるすがた法の深信は他力をたのむころと仰せられた。

ハキン 馬琴

江戸有名の小説家なり、姓は瀧澤、曲亭馬琴と號す、八犬傳を初め百四十二種の著述あり、嘉永元年十一月歿す、年八十二、

馬琴の堪忍の箴

怒るものは内むなし河豚に臆すくなきが如し、寺に勝たる太鼓は如何、鳴わめくのみこれを腹なし、それ闘雀は人を怕れず、蟻螂は車を避けず、一朝の怒に身を忘るゝは、これ小丈夫の所爲にして世に馬鹿者と云はれんのみ、盜妬孔子を罵れども孔子の聖たるに害

藏倉孟軻を捨てても誰か孟軻を賢なら

すどせん、已れ是にして人の非なるを知らば争ふ所なかるべく、彼が是にして我が非なるを悟らば、負けて過を改むるに如かず、柳に雪折れなく鋭き刃は缺くることあり、堪忍五兩の廉なるは古人の算盤ちかひなるを、多く買まく欲せずや、春宵一刻千金を貴しと思はぬ人ごゝろ、只丹田を鎮むべし、張公藝が九世の同居も忍の一字を守るにあり、何がしが堪忍記は妻に嘲らるゝを結局とす、安に馴れてともすれば、身の用心に怠りなば、兄弟聞くの誚を醸して禍蕭牆の下より起らん、よりて今この箴を作りて、みづから戒め亦人をも警ましむることかくの如し、

何にか入れん癩癩の虫

ハクイン 白隠

名は慧鶴、駿河原野の人なり、十一歳の時、松陰寺の住僧に就て難髪し其弟子となる、學徳大に進み一代の明匠となれり、明和三年十二月寂、壽八十四、

遊女大橋と白隠禪師

遊女大橋は名を律と云ひ幕府旗下の士某の女でありましたが、家計貧窮の結果、遂に島原に身を沈めるに至つたのである、大橋は大に其薄命をなげき、憂苦煩悶して居りました、が、一人の客これを憐れみ告げて云ふやう、汝の心配する所はまことに道理あれど、之を救ふには千金の財がなければならぬ、それは到底我等の及ばぬ所である、其外に只一の方法がある、それは外でもない、汝が一身、見聞覺知の四を除きて別に作すべきもの

はない、この四のものに、其主がある、何者かこの主たるべき、見るもの何者ぞ、聞くもの何者ぞ、覺知するものこれ何者ぞと、念々これを考へ、時々これを忘れずんば、本具の佛性現前してこの苦しき境界を脱することを得るであらう」と、蓋し禪的修養を徳憑したのである、大橋それより心をこれに潛め豁然として悟る所あり、後、島原を出るに及び白隠禪師に謁して其所解を呈し、こゝに徹底することを得たとある、自畫の賛に曰く、

わするなご契りし春は夢なれや
寢覺とひくる初雁の聲

又、老後島原をすぎて、
よそにみておもふもつらし身の昔
うき川竹のさとの夕べは

歌 白隠の隻手の聲を聞くよりも
兩手たゝいて商ひをせよ
これは白隠禪師が某商人に與へられた道歌である、何事にても成功するには勉強と云ふことがなければならぬので、
寢たり起たり轉たり、傘まくらに茶碗酒と云ふやうなことでは、成功は覺束ないのである、依つて佛陀も精進すべきを示して曰く「汝等比丘、若し勤め精進すれば事として難きものなし、このゆへに汝等當に勤め精進すべし、譬へば少水も常に流るゝときは能く石を穿つが如し」と、又、同じ白隠禪師の歌にも。
世の中は何のへちまごおもへごも
プラリとばかりしてもおられぬ

と仰せられてあるが、これらは共に勉強と云ふことが成功の秘訣であること云ふの教訓です

釋 白隠禪師の嚴訓
日向に快嚴と大休との二人あり、古月和尚に參して大事を成辨せりとし、得々として思へらく、天下我に及ぶものなし、暫く紀の熊野に遊び、山深き處に一生を終らんと、共に出で、大坂に趣き某寺に宿す、其寺の壁上に
問蟻爭し拽蜻蜒、翼 新燕竝ニ休、楊柳枝
蠶婦携レ籃多シ菜色、村童偷レ笋過ニ疎籬
と題せるを見、讀み終つて愕然解する能はず、怪みて其何人の作なるやを問ふ、寺僧云ふ、これ駿州白隠和尚の作なりと、二人議して云ふ、我等大事成辨して尙ほこの老漢が語を解する能はず、願ふに此老漢尋常の者にあらじ

暫く脚を轉して老漢が消息を伺ひ、而して後熊野に入らむと、東下して白隠を問ふ、白隠機鋒峻邁、當るべからず、二人初めて一段の廣處を認め、之れに師事す、白隠明旦いで、村民に乞食せよと命す、明くる日風雨ことに甚し二人しばらく雨の歇むを待つ、白隠竹篋を提げ來りて曰く、汝、這裡にありて何をか作す、二人いふ、暫く雨の過るを待つ、白隠呵して曰く、「この備誦の漢、風雨を怕れて何をか爲す、東道、豈人の往還するなからんや汝速に出てすんば、我汝等を打ち殺さん」と、二人大に恐れ相顧みていふ「嚴和尚なるかな」と、雨を衝いて行乞す、かくて終に大事成辨を得たりと。

釋 求道の熱誠

遠州瑞應寺の白沙、亦白隠和尚に參ず、和尚之を罵り追ひ出して云ふ、「汝の如き閑漢何をかなさむ、復に來るなかれ」と、長沙、憤然としておもへらく、我亦堂堂たる大丈夫ならすや、大事を澄徹するにあらすんば生きて故郷に還らし、死を決して工夫を下さむと欲し自ら誓つて七日を期し、海濱の小屋に入りて座し、食はず寝ねず、静座黙想す、期満つるも如何ともすべからず、終に海に投じて死せん。と欲し屍を脱ぎて波頭に立ち、忽ち海光と旭日と相映じて紅を持するが如くなるを見て、豁然として大悟し、走つて白隠の室に入る。白隠一見して曰く、「汝徹せり」と、古人の道を求むるの熱誠斯くの如し。

雜錄

白隠禪師と死生の問題

白隠禪師、死生の大問題を平易に説いて曰く、

死 若し人得て見徹す

名真、大丈夫

明和乙酉の春、或家中の若き武士に上の如く大文字に死の字を書いて與へければ、傍輩の人々いづれも打寄り、殊の外に賞翫せられける由、近頃奇特千萬に思ひければ取あへず即席にかくなん、

若し衆や死ぬがいやなら今死にやれ

一たび死ねばもう死なぬぞや

生きた中は憂きもつらきも樂みよ

侍ちやとて死んでよかろか

口はきけと一度死なぬ侍は

まさかの時に逃つかくれつ

臍の底で一たび死んだ男には

真田が槍もはも立たぬなり

何事も皆すてはて、死んでみよ

閑魔も鬼もぎやふんとするぞ

雜錄

白隠禪師のねむりさまし

るすといはれぬおのれが心

よいも悪いも覺へあり

うそは心に覺へがあるぞ

人はともあれ我が知る

紅やけしやうで外からぬれど

むさい心はぬられまい

ろくな心を思案でまげる

まげにやまがらぬ我が心

ハクラ 薄拘羅

羅漢

善容と譯す、形色端正なるが故なり、百六十歳にして

無病なりしと云ふ、長壽第一なり、

因縁 薄拘羅尊者と繼母

薄拘羅尊者は前生の悪因縁で繼母にかゝりて難儀なり。第一には母親が餅を焼いておらるゝ、其側へ出らるれば、鐵網の上へうつむけに寝させて、炭火で扇ぎたて、焼き殺そうとせられたれど、此尊者の徳にて着物一つ焦けなんだ、其後又母親が洗濯物をするごと大釜で湯をわかして居られたれば、薄拘羅が何心なく側へよらるゝと、直にひつとらへて湯の中へ打込み、蓋をして燃したれば、湯玉がたちてにる上るゆへ、釜の蓋を取りてみれば、色もかわらずニッコト笑つてござる母親もあきれはて、烹ても焼いても食はれぬとは汝が事ぢや、しぶとい奴ぢやと云ふて引

きあげ、其後母親が洗濯するごとく川へゆかれ
る跡を逐ふて行たれば、いつそこの川へ流し
て仕舞ふと、川へ投げこまれた、すると尊者
は浮きつ沈みつ川下へ流れてゆかるゝを、尊
者の母親が之を見て、これでサツパリ胸が開
らけたと喜んで戻られた、さて日暮になりた
れば、父親が大きな魚を買ふて持つて歸られ
妻に告げて云はるゝに、「あまり安いものぢや
ゆへ、此魚を買ふて戻りたが、薄拘羅に見せ
たら喜ぶであらう、薄拘羅は何處へ行きしか
と問はれたれば、「最前遊びに出ましたが未か
へりませぬ」そんなら止を得ずこの魚を料理
しませう」とて、魚の腹を割かれたれば、中
から薄拘羅が出られた、父は驚いて「ヤレ汝
はかわつた處に居た何として爰に居るぞ」と

問はれたれば「實は父上の留守中に、母様に
焼かれたり烹られたり又川へ投込まれたり致
しました、今日は川中へ投げこまれ流れたに
よりに終に此魚が呑みました、然るに此魚が
漁師の網にかゝりて魚屋の店へ行きまして父
上を買ふて御かへりなされたゆへ、再び御目
にかゝりました」と、始終を物語りせられた
れば、父は涙をながし、誠に外面如菩薩内心
如夜叉の金言に違ひはなる、おそろしき仕業
ぢや、やれゝ恐ろしやと、直に薄拘羅の手
をひいて、如来の御許へつれまいり、出家修
行して阿羅漢の證りを開き玉ふた、これを薄
拘羅の五不死と云ふて、五度まで死なねばな
らぬ處を助かられた、後に出家して百六十ま
で長生をなされた、御一生の間、頭痛一つせ

すに御暮しなされたとある。

ハコ子 箱根

【地名】

相模國足柄下郡にあり、箱根権現は芦の湖の東南、駒
ヶ嶽の南麓にあり、親鸞聖人歸洛の折、靈驗ありしを
以て附ゆ、

因縁 親鸞聖人と箱根権現

聖人東關の境を出で、花城の道に趣きま
し、けりと御傳鈔にあるは、祖師聖人六十
歳の御時のことである、關東北國二十五年の
御經回、竹の御杖に草鞋がけ、ながく御苦
勞下されたが、何時まで居ても名残は盡きぬ
ゆへ、も一此上は京へ歸り、京の同行を教化
しようと思召し、關東の地を御發足なされた
のである、御供には性信坊蓮位坊、念佛もろ
とも師弟三人が御道中をなされた、箱根にか
ゝらせらるゝと、七十有餘の老翁の神主、烏

帽子直衣の装束を着け、忽然と現はれて御出
迎ひして云ふ様、私は當箱根権現の禰宜でござ
います、今宵は八月の十六日ゆへ、神職の
者打ち集り月見の宴を開きて、はからず深更
に及びました、いさゝか睡眠と思ひしに、
夢ともなく幻ともなく、権現の仰せに、我れ
今尊敬すべき客人、この道をすぎたまふ、早
く立出で、叮嚀に御饗應申せと明かに御告を
蒙りました、はて唯事ならずと驚き、その
儘立ち出て、みれば貴僧の御來臨、権現より
御差圖のある義に候へば、何卒こちらへ御通
り下されと、客殿へ御案内をして、御饗應を
申された、聖人殊の外御満足に思召して、一
日御逗留なされ、神職の人々へ親しく御教化
遊ばした。

因縁 箱根山上に於ける師弟の訣別

親鸞聖人、箱根権現の御告によりて、神職の人々より叮嚀の響應を受け、且つ神職の人々に親しく御教化なされて、其翌日は箱根の頂上まで上られました。頂上より御覽にならざるごまことに絶景である、關東の地を御覽になりて、御名残おしく思召され、性信坊に向ふて仰せらるゝには、「性信、おれは其方にたのみがある聞てくれぬか」、「それは恐れ入りたる御言葉、何なりとも身にかなひしことなれば御請を致すでござります」と、「早速の承知大に満足に思ふそよ、たのみと云ふは外でもなるが、おれが京都へかへれば、數年知音を重ねし關東の同行は、さぞや心淋しく思ふであらうから、其方はこれより再び關東へ引き

返し、おれに代りて同行門徒の法義の守護をして、れよ」と仰せられた、性信坊は意外の仰せに打ち驚き、再三御辭退を申上たれど、聖人は、

病む子をばあづけてかへる旅の空

心はこゝに残りこそすれ

と御詠みあそばし、強いて關東へ立歸り、門徒教導をたのみぞと、くれんくの仰せゆへ、今は師命に背くべきにあらずと決心し、謹んで御請申上られたら、聖人は、笈の中より如來の尊像を取出したまひ、これを紀念とつかはずとて親しく性信に授けられ、

戀しくば南無阿彌陀佛をとなふべし

性信よ、名殘惜く思ふなら、朝な夕なに南無

阿彌陀佛々々々と報謝の稱名よろこべよ浮む六字のその中に、予が魂は住んで居るぞよと、一口の御法話を遊ばされ、涙ながらに師匠は西へ弟子は東へと名残りの足をこびたまふたのである。

バシヨウ 芭蕉 【人名】

姓は松尾、名は宗房、伊賀の人なり、俳諧の奥義を極め、自ら一機軸を出したる名家なり、元禄七年十月、病みて大阪に歿す、年五十一、

談義 偽筆の名號

芭蕉翁、江戸にありし頃、祐天上人に歸依したる某の家に請せられ、上人とも面會し懇親を結びけるが、翁は其後何故ありてか絶へて上人を問はざれば、上人より使僧を遣はし頻りに招かれたゆへ、翁も漸く上人を訪ふた、時に上人久しく翁を見ざれば懐かしさに

バシヨウ

三六七

耐へずとて、「何故に斯く疎んじ玉ふや」と問はれたるに、翁は莞爾と打ち笑ひ、「上人には去る頃御弟子を破門せられし由承はりたる爲めなり」と答ふ、上人の曰く、「彼の弟子は偽筆の名號を作りて世に施したる罪淺からずこれを以て破門しはんべるなり」と、翁曰く「一人一朝の過あるは其常なり、且つ普く名號を弘むるは誠罪教道の根本なれば、偽筆をも上人と尊ばるゝぞ、如來の御意に叶へるに非ずや、又偽筆する程の御弟子こそ聖人の寶なれ、惜い哉一人を廢れさせしこと大事なり、今迄聖人を尊敬せしは我愚かなり、我も聊か道の建立に心を置けるも、何故詳しく諮られざりし、我れの等閑にして參らざりしも之が爲めのみ」と、上人覺るす手を拍ち、

「善哉々々我れ過てり、子が温潤今我れ之を耻づ」と云はれ、頓て弟子を尋ねて復歸を許されたとある、芭蕉翁が慈愛ふかく、物を憐み人を愛するの至誠は感すべきことである。

芭蕉翁の禮節

芭蕉翁が内藤侯の御前に呼ばれて一日の風流談を試みられたことがある、内藤侯は非常な烟草ざらひなのであるから、芭蕉はそれを知つて一度も烟管を手にはせず、ジツとこらへておられた、其歸り途に其角の云ふには、「俳諧は風流を事とし酒脱を旨とし權門といへども阿らず、富貴といへども屈せざるを貴ぶのではありませんか、それに貴方は内藤侯の烟草ざらひを知つて、御前に於て一度ものまれなんだのは、聊か阿るに似ております」と云

ふと、芭蕉の答に、「其方の疑ふのはまだ俳諧の極意を辨へぬからぢや、俳諧は小技ではあるけれども、亦道とすることが出来るので、風流の中にも禮節と云ふことを忘れてはなりませんぬ、徒に繁を省き我儘をやりて洒落である」と云ふておるのは斯道の賊である、予が今日内藤侯の御前に於て烟草を飲まなんだは禮節であつて、阿るのではありません」と云はれたそうです、風流の中に自ら禮節あり、能く此旨を會して初めて雅談を共にすべきことであります。

芭蕉翁の清貧

芭蕉翁は生涯清貧に甘んじてゐたが、或時俳諧の會に招かれたる時に、「今晚俳諧御催の處、傘無之候間、不參候、

連中へも宜敷頼入候」と云ふ、返事を送つたこれに依て芭蕉の、貧乏さ加減も分るではないか。

芭蕉翁の修業

芭蕉翁は伊賀の人で、藤堂家につかへて居たが、通世のこゝろやみ難く、同僚の城彌太夫と云ふ人の門に、

雲こへだつ雁かや友のいきわかれ

と云ふ句を遺して出家した、それから京都へ上つて北村季吟の門にあそび（これは芭蕉正傳の説、他書には異説があります）、修業して江戸に下つて、深川のはどりに庵を結び、芭蕉を庭に植へて、其閑寂を愛し、野分して盃に雨をさく夜かな、なぞこの吟があります、此頃から深川長慶寺

にござる佛頂禪師に參して禪を學びました。

芭蕉翁と佛頂國師

佛頂國師、芭蕉翁を訪はむとて六祖五兵衛と云ふものを伴につれて深川の庵にいられた、六祖五兵衛が先づすかかゝと庵に入つて「如何なるかこれ閑庭草木中の佛法」と問ひかけた、翁はすかさず「葉々大底者大小底者小」と答へた、禪師はそこへ這入つて來られて「近日何の得る所ぞ」と問はれた、すると翁は「雨過ぎて青苔を洗ふ」と答へた、禪師は猶問を發して「如何なるかこれ青苔未生前春雨未來前の佛法」と云はれた、これは翁が雨過ぎて青苔を洗ふといふたからさらに窮所をつかれたのである、此時にたま／＼池の汀の蛙が一匹水の中に飛び込みました、これと

共に翁が「蛙飛びこむ水の音」と答へた、佛頂禪師が珍重々々として、こゝろ持つてござつた、如意を翁にさづけ筆を取つて、

本分無相 我是什麼物 若未會爲汝等諸人 下一句子 看々 一心法界

法界一心

と書いて渡された、これ即ち佛頂禪師の印可を得られたのである。

芭蕉翁と杉風

芭蕉翁の弟子杉風と云ふ人、翁に御尋ね申すやう、「蛙飛び込む水の音」の句にて已に佛頂禪師の印可を得られました、この句に上五字は如何やうにつけらるゝか」と云ひますと、翁「わしもそう思ふておるのぢや、先づ御前方の考へを云ふてみよ、それからおれも

定めやう」と云はれた、そこで杉風は「宵闇の」と云ひ、嵐雪は「淋しさに」と云ひ、其角は「山吹」と云ひました、

宵闇のかはす飛びこむ水の音 杉風

淋しさにかはす飛びこむ水の音 嵐雪

山吹のかはす飛びこむ水の音 其角

翁これを聞いて「皆の云ふところ、平生の句に似すよく出来たり、殊に其角が色即空のこゝろを以て「山吹の」とつけたるは勝れてよけれど、我はやはりこのまゝに、

古池や蛙飛びこむ水の音

と云はれたには、人皆感じ合ふたと云ふことである。

芭蕉翁と馬鹿げ

芭蕉翁が初め江戸に行きたる時、俳人仲間

ではまだ芭蕉と云ふことを知らず、或時佛席へ出たれば、宗匠がまだ諸國の來客に席へ御通り下されと挨拶す、芭蕉異議なく席にすゝみしに至りて男ぶりの悪い人ゆへに諸人が大に笑ふた、その時宗匠が戯れに、

さし出で、馬鹿げに咲いた櫻かなと詠んだ、芭蕉が「これは清濁を直したら句になりませう」と云へば、宗匠は「如何に改むべきか」と尋ねた、芭蕉云ふやう、

さしいで、葉影に見ゆる櫻かな當年は例年よりは花の出方が多いゆへ、出過ぎて葉の影にまで花が見ゆると云ふことに直された、一同驚いて「さて貴方は芭蕉先生ではござらぬか」と尋ねるに、「如何にも我は芭蕉なり」と云はれたれば、皆々俄かに敬ふたこ

ある。

芭蕉翁と明月

芭蕉翁、俳諧修行の爲め諸國行脚の折柄、ある邊鄙へいたり、此所彼所と巡回せられしが、頃しも八月十五日夜、月一天にすみわたりて皎々として照りかゝやき、白日にも猶勝りて、イト興あれば強ちに宿をも求めず、歩まれけるに、其村里のもの大勢集りて、月見の宴と思しく酒肴を以て興を催し、四方の景色を打ち詠め、頓て俳諧を初めました、芭蕉翁は此有様を見て、「さては、かゝる田舎にも猶風流の學びをなしけるよ」と、イト頼もしく思はれて、傍らになゝすみ暫く打ち詠めておられました、座中の一人翁を見つけて乞食坊主と思ひ、強いて末座にすわらせ一句い

たされよと云ふゆへ、翁は、さらば一句仕らん、それへ書き付け玉へとて「三日月の」と上五文字を云はるゝと、一座の人々打ち笑ひ今宵は明月であるのに三日月とは何事のござら、物知らずの法師であるとして、口々に嘲つた、翁はそれに耳を止めず、

三日月の頃よりまちし今宵かな

と詠じ終れば、忽ちア、と感じ入り、「貴僧は尋常一様の法師と思ひしにかゝる秀句を吐き玉ふは、如何なる人を名乗りたまへと云ふゆへ、「我は芭蕉なり」との玉へば、一座のものは二度びつくりし、先刻よりの無禮を謝したとある。

芭蕉翁の吉野見物

芭蕉翁が吉野山へ櫻花見物に行かれた時、

けたれば、翁ニツコリと笑ふて息たゑたとある、生あるものは必ず死に歸し、盛なるものは遂に衰ふるならひ、さのみ驚くべきことである、散る櫻残る櫻も散る櫻、早かれ遅かれ一度は死ぬると云ふ意です。

芭蕉翁の座右銘

翁は俳諧を善くして妙神に入る、後世俳を談ずるもの皆翁を宗匠と仰がざるはなし、行脚雲水に身を托して風月を吟咏し澹然世と相忘る、座右銘に曰く、

己の短をいふことなかれ
己が長をさくことなかれ
銘に云ふ、

ハタケヤマシゲタ

島山重忠

人名

ハタケヤマシゲタ

ハナハホキイチ

ものいへば唇さむし秋の風

此翁は天下に名高き發句の名人ゆへ、弟子方は翁に向ふて「ナンと先生、此山の櫻の景色を發句に詠んで聞かして下され」と申たれば翁の答に「この吉野の花の美しさは何として發句に詠めようぞ」とて、

これはくさばかり花の吉野山

と詠せられたとある。

芭蕉翁の臨終

芭蕉翁 病にかゝり養生せられてありたがおいしく危篤に陥り、命旦夕にせまること云ふ場合となりた、翁、病苦の中から「散る櫻」と云つたきり言がされた、多くの門人は後の句は如何と息を殺して待つて居ると、また、「散る櫻」とばかり三度まで同じことを云はれた、そこで高弟が「残る櫻も散る櫻」とつ

幼名氏王丸と云ひ世々武藏に居る、真武なる真將なり
享永三年戦死す、年四十二、

源平時代の頃に島山重忠と云ふ人がありま

した、中々勇氣な人でありましたが、平家を攻め落す時分に彼の嶮しい鵜越を下つた、其時に重忠は自ら馬を負ふて下りたと云ふことがありますが、此話は些々たる話のやうであります、如何にも其人のなさけふかいことが能くあらはれて居ります、時に依ては鬼をも殺すと云ふ人が、一時には馬を負ふて峻路を下るとは、如何にやさしい心がけてはありませんか。

ハナハホキイチ 塙保巳一 人名

武藏國秩那郡保木野村の人にして江戸の和學者なり、

失明者にして群書類聚の大著述あり、文政四年九月病歿す、年七十六、

談叢 群書類聚の編輯

檢校塙保巳一は幼き頃より盲目にて、白黒の色さへ分らぬ身であれど、書を好みて人に讀ませて聞き、そらに覺えて忘るゝことなく古書を廣くあつめ世に隠れたる珍書をあまた求め出し、校訂して摺り本となし、又百枚にたらぬばかりの書を千二百七十餘部とりあつめて、群書類聚と名けたるを六百三十卷あま摺り本として世に出しました、この塙檢校の如き盲目にして群書に涉獵し大編輯をなしたるものは、外國にも例がなると云ふことである。

逸話 塙保巳一の氣餒

上る様、私の近傍丸山と云ふ處に一つの古き大池がござります、春秋兩度に祭禮を行ひ池の主へ種々供へものを致します、然るに其供へ物が自分の氣に入らぬと、時々恐ろしき姿のものがあらはれ、非常なる亂暴を致します、仰ぎ願はくば聖人の御威徳を以てこの邪神の難を御救ひ下さるなら、現當の利益此上もなき仕合せに存じ候と申上げた、聖人早速御承知ありて、翌日其地に趣きたまふ、友宗は村民に申付け小さき庵を作り聖人を請じた、聖人は其庵に籠らせられ、三日の間三部經を繰り返し巻き返し御讀誦遊ばした、四日目に水面に向ふて聲高々と念佛を稱へ、我れ彌陀の本願南無阿彌陀佛を以て濟度してやる程に早く本身をあらはせよと仰せられた、

ハナミガオカ

塙保巳一、或年の夏の夜、四壁を開いて涼を入れつゝ弟子の爲めに源氏物語を講じて居られたが、たま〜木の間をくいる風で、室内の燈火が消えた、門弟が「火が消えましたから、點すまで待つて居て下され」と云ふと保巳一笑ふて曰ふには「眼のあいておるものは不自由なものぢや、燈火が消えたら何にも見えぬとは、さて〜氣毒の至りである」と氣餒を吐いたとある。

ハナミガオカ 花見岡

下野國都賀郡にあり、親鸞聖人の舊跡地、建保三年親鸞聖人四十三歳、下野國都賀郡に入らせらるゝなり、惣社村の神官大澤掃部友宗と申す人 わざ〜使者を以て聖人へ申

所が不思議なるかな 池の水がばさ〜と動き出し、バット浪が二つにさけると、恐ろしき大蛇が水上に顯はれた、聖人の仰せに「よこそそ本身を顯はした、蛇道のすがた儘かに認めたり、今こそ濟度の法を授く、汝に變化自在の通力あり、元の人間の姿に改むべしと仰せられた、すると大蛇は水中に沈だが、やゝありて一人の女が水上に現はれ兩手をついて申す様、私はこの里の者ですが嫉妬の悪念ふかく、それゆへ夫に見捨てられ、淋しく詫住居をして暮す中、夫は妾を養ひ睦まじく暮らさるゝをねたみ、どう〜二人を取り殺しました、其悪業によりて蛇道に落ち、數十年來この池にすみませんが、毎日三熱の苦患にせめられ、苦くて〜なりませぬ、然るに此

間以來難有い御經の聲をき、其功德にて餘程苦みが輕みしました、ご一か一時も早く濟度を願ひ度うござると申出でた、聖人はよくこそ其氣になりてくれたと、それより彌陀の本願を説き第十八願の上に第三十五の願を説き、變成男子女人成佛、別願を立て、御待ちなされてあるぞよと御懇ろに御教化なされたれば今の女は兩眼に涙をうかべ、三拜九拜の禮をなして念佛もろとも水中に沈んだ、それより聖人は讀經をなされたが七日目に水上に白雲たなびき、其雲の中にかの女は容顏美麗の姿を現じ、此度眞の知識の引導によりて、上天の果報を得、天壽終らば次生には西方極樂の往生をとげ、永く三塗の苦難をのがれ、但有自然の御樂み、やれくうれしや難有やと念

佛もろとも虚空に上りましたが、五色の天花ばらくと降る故見る人聞く人感心して、聖人の御徳を慕ひました、其池を親鸞池と云ひ花をふらしたるゆへ、其地を花見が岡と名けて、舊跡今猶存じております。

ハフゲンセキ 土生玄磧 【人名】

幕府の醫師なり、江戸人、生死の年月等詳かならず、

談義 金銭と道徳

大槻盤溪が、其頃の學者にして金満家であつた土生玄磧と云ふ人に向ふて「どうしたら金が溜りますか」と問ひますと、玄磧申すや「金を溜めるには我が家の秘傳の法がある是非これを聞きたひと思ふなら、一七日の間精進潔齋して來なされ、そうしたら教へてあげよう」と云ふた、そこで盤溪先生、其如く

精進してまいりますと、玄磧の云ふには、「これは一子相傳の法で他に授くべきものではないが、御依頼によつて御傳へ申す、金を溜める秘訣は別のことではない、仁義道徳を口にせぬにある」と申ししたそうです、所謂仁をなせば富ますの意でありませう。

ハヤシシヘイ 林子平 【人名】

名は友直、江戸の人なり、夙に海防の急を憂ひて海國兵談等の著あり、寛政四年五月兄嘉膳の家に禁錮せられ、薨、歿、年四十餘、

談義 二奇士の背離

下野の奇士 曾て林子平の人と爲りを聞きて遙かに之を慕ひけるが、或時遠く仙臺なる子平の家を訪へり、奇士人と爲り眞率にして邊幅を飾らず、敵袴短袴、行装亦頗る鄙野なりき、子平是を見て大に叱して曰く、ア、何

等の窮苦無頼漢ぞ、汝自ら修むる能はずして何ぞ天下の大事を論ずるを得んや、吾れ敢て之を見るを欲せずと、奇士之を聞き亦大に怒りて曰く、野翁何ぞ其れ自ら尊大の甚だしきやと、其餘は一語を交へずして去れりと云ふ奇士とは蒲生君平其人なりき。

談義 六無齋

林子平の墓は仙臺市街の西 龍雲院の域内にありて、表面に六無齋友直の墓と彫りつけである、これは子平將に瞑目せんとする時、親も無し妻無し子無し版木無し 金も無ければ死にたくも無しと云ふ絶命の歌をよまれた、無の字が六つあるからと云ふので、そこで六無齋と名付けられたのちやそうです。

ハヤシラサン 林羅山

【人名】

徳州幕府の儒官なり、其先は加賀の人、後、紀伊に移る、名は忠、通稱又三郎と云ふ、明暦三年七月歿す、年七十五、

親鸞聖人圖贊

大學頭羅山林道春と云へる人は、儒學の大家でありましたから徳川家康に用いられた或日徳川公の御尋に、儒家の經書は新註でみるがよいか古註でみるがよいかと仰せられたら、道春の御答に、新註がすぐれますと申し上げたそうです、新註とは即ち朱熹集註の方であるが、この朱子と云ふ人が宋儒で甚だ佛法嫌ひです、其佛法嫌ひの朱子を尊む道春であるから、道春も従つて佛法嫌ひであつたに違ひない、其道春が親鸞聖人の御畫像の讚に、

題ニ親鸞師像一

僧家ニシテ犯ニ色肉ノ二律ヲ 猶下士人ノ坐ニ長

嘆論中ニ臆私トテ 雖ニモ其類輩ト 方ニ且ツ醜詆

擯斥シテ 使レ不レ得ニ相齒列ヲ 而シテ鸞師獨リ

執ニテ所見ヲ 以テ謂フ末世ノ根劣非ハ我カ此法ニ

則チ不スト能ニ超度スル 乃公然擁ニ婦女ヲ啖ニ腥

葷ヲ以唱ニ干時ニ 而シテ示ニ干後ニ 我レ固ヨリ

不知下其法ニ之能ヲ 合ニ釋迦牟尼與否ト

即チ使能合ニ 亦在ニ我レ所ニ不レ取ラ 而特ニ

至リテハ其篤信確守舉ニ天下ヲ議スルモ之ニ不

爲レ移シ者ニ 則チ可ヘレ謂フ誠ニ難シト矣 我黨之

士モ苟モ非ハ特立獨行以テ與レ師同ルニ斯志ヲ

則チ惡クク得下脱ニ凡近之習ヲ以テ進ニ聖賢之

域ニ 我於テ是ニ執レ鞭ヲ以テ從レ師ニ哉呵々

この畫贊の意を一言にて云は、なまぐる

を食ひ女を愛するは、釋迦の説教に背くか背

かぬかは知らねども、何分遠目鏡で見ぬひた

事には恐れ入ると云ふ心です。

ハラモトタツ 原元辰

【人名】

赤穂義士四十七人の隨一なり、足輕頭を勤め、銀三百石を食む、元禄十五年、死を賜ふ時、年五十六、

談 原元辰と其母

赤穂の城主が吉良上野介に殿中で恥をか、され、それを無念と思ひ斬付けしが爲め、遂に國も没收れ城主も切腹となりて其の家來は皆散りくくと散り失せたのですが其中でも大石内藏介を初め原元辰などの四十七士は、憎つき吉良上野介、己れ只では置くべきぞと身を商人に賣して敵の様子を探るもあり、或は態と酒色に溺れて敵に油断をさせるもあり、或は十人十色、思ひくりに心を苦めて時節の來るを今かくと待つて居ました、其後ち、星移

ハラモトタツ

り物變りていよいよ警討に出掛んとすれば原元辰も老いたる母のお顔を見るも今日限りこ遙るく、他より來りてお目に掛ると素よりお利口な御母様のことでですから、早くも其れご感附いて申さるゝやう、「萬事慎みて他人に覺られてはならぬぞ」と此の一言を聞くより元辰有り難た涙に袖を濡して、雲時、言葉もありませんでしたが、聽て母に向ひ私の事は決して御心に掛けぬやうに唯、私が死んだ後で母上を養ひ孝行盡くす者の無いのが誠に心配になつてなりませんかと濕聲で申しますと、母は屹と元辰の顔を見て忠孝兩ながら全くすることは出来ぬので忠せんとすれば孝ならず孝せんとすれば忠ならず、そは、今に初つた事でない、昔よりた左様だ、然し、重きを

取て、輕を捨てるが此世の習ひ、今日主君の仇を報せんとするに何ぞ一人の老母を思はんや、汝速かに去れ、我を以て心を勞するなかれと、膝立直して叱るが如く言ひましたら、元辰も其の健氣なる御氣象や其御言葉の尤もなるに感じ涙を拭ひながら暇乞して出掛け、直ぐ大石内藏介の許へ参りましたら、内藏介は此程より病氣で急にも治る容子もありませんですから、それでは一寸又母に逢ふてこよふ、何して一人で暮らして居るかと格子押開け来て見れば、母は能く來たと言ふでもなく唯、頭を低れて居られたのです、其れは、何も困た己があるから己に心を引かされ心配して來られたのだらふ、斯く心配しては到底花々しき働きも出來んだらふ、若しも己が爲め

に引目を取つて人に後指でもさゝるやうな事があつては唯に悴の恥のみでなく先祖へ對しても申譯なしと、心ではそふ思つて居たが能く言葉に現はさず其夜は酒肴を調へて元辰の爲めに門出の祝ひをし献しつ献れつ居る中に元辰もだん／＼と酔ひが廻り來て寝ることもなしに其の場に寝たのです、所が酔ひが覺めて起き見ればヨハ何如に母様は死んで居たれば元辰、吃驚仰天して泣けど叫べど息絶えて手足は最早や冷たかつたのでして、一通の書置が其側にありました、元辰泣く／＼讀むに、「死出の山路で待て居るから主君の仇を取て早や來れ」とあれば元辰見るより心は猛武となり内藏介に従ひて仇上野介の屋敷に討入り天晴功名を現しました、元辰の斯く天晴功名

を現はしたのも母が勵ました効でありませ、若し、此折り忍が元辰に向ひお前に先きたゝれては私はマ一何うして一人で生活することが出來やうかと聲も沽みて言ひたらば、流石の元辰も之にはほと／＼閉口して斯る功名を立ることでも出來んでせう返す／＼も世の母たるものはシツカリせんと不可ません。

バンケイ

【人名】

播磨龍門寺の開基、臨濟宗 屬す、播磨掛保郡網干濱田村の人なり、十七歳にして出家し、元禄六年九月寂す、壽七十二、

談義

盤桂和尚と法名

盤桂和尚 人の需に應じ法名を書き與へらるゝに、いつも文字ゆがみて見苦しい、そこで弟子が罨紙を造りて「これを下にして書きたまへ」と云ふ、和尚も「それよからん」と

て其如くせられてゆがまなかつたに、或時明石の醫師某かねて和尚に信仰して毎度教を受けておりましたが、人より法名のことをたのまれて和尚に書きてたまはれと云ふ、和尚も肯ひて書かんとせられしに、如何せしや罨紙見へず、弟子をして探させしに其日も暮れた醫師もたのみかけたことであるから歸るに歸られず、そこに一泊して、さて翌朝より探したが見へない、又其夜も過ることゝなつた、醫師も數日の逗留に迷惑なれども打捨てゝも歸られず、弟子もつかれて、わづかの罨紙新に造り奉らんと云ふに和尚きかず、只心靜かに尋ね求むべしと云ひて待つて居らるゝに次の日亦探して漸く棚の隅より見出して差上しに、これを見て、よし／＼汝等もよく見よ

萬の修行はかゝるものなりとの一言に醫師もなる程と會得して、數日の滯留も此一語で無益にならざりしと云ふて喜んで歸つたと云ふことがある。

盤桂和尚と乞食

盤桂和尚は臨濟の高徳であるが、一時乞食の徒に混じて居られたことがある、或時乞食の中に錢を失ふたものがあつた、そこで皆盤桂の盗んだに相違ないと云ひ出して、相擁してこれを亂打し氣息奄々たるに至らしめた、そんなでも盤桂少して分疏せず、又意にも介せぬ風であつたが、後盗みしものあらはれて、乞食等は盤桂を拜して其罪を謝したと云ふことである、この少しも分疏せず意にも介せぬ處が、平素より修養の効をつまらした結果であ

ろう。

盤桂和尚の苦心談

盤桂和尚が心を鍊るに苦辛致された實驗談に曰く、身共も漸く成人しました母が大學の素藏を習はせましたが、大學を讀みます時、大學之道在り明ニシテ明德ヲ申す所に至りまして、此明德と云ふことが疑はしく御座つて合點がゆかす、濟みませいで久しうが問だこの明德と云ふことを疑ひましたはいの、儒者衆に問ひますればどの儒者も知りませぬ、或儒者の申すのには、其様な六ヶ敷いことはよく禪僧の知つておる者ちや程に、禪僧に行いて御問ひやれ、明德の事は我等が家の書に出てあつて、朝暮口では文字の道理を能くいへども、明德と云ふのはごんなのが明德やら實

に我等は知らぬと云ひまして塚が明きませなんだゆへに、ごうがなと存じましたれど、其時分は近くに禪宗は御座らず、聞やうもなしごうぞしてこの明德の塚をあけまして、年老ひた我母にも知らせ、死なせたいと存じて、身供が知るよりも、まづ年老ひた今死ぬるもしらぬ母に知らせたう御座つて、茲な講釋彼處な説法があると申せば、其儘走り出て聞いて母の爲めに尊いことを聞きましては戻りましては又母に言ふて聞かせますけれども、彼の明德の塚が明きませぬ、或禪宗の和尚に參じて尋ねますると、和尚の仰せに、明德が知りたくは座禪せよ、座禪すれば明德が知れること事で御座りましたによつて、直に座禪にぞりかゝりまして、そこな山へ入りましては、

七日も十日も食をたべず、こゝな山へ入ては尖つた岩の上に着物をひきまくつて尻を岩につけて座を組むが最後、命を失ふことも願ひませず、自然とこけて落るまでに座をたつこともせず、食物は誰も持ちて來て呉れやうは御座らず、幾日もそれゆへ物を食へなんだことが多く御座りたれど、只偏に明德の塚があけたさに、飢もかまいません苦にもなりませなんだ、でもまだ明德の塚があきませなんだわい。

それより故郷へ歸り庵を結びて安居、晝夜念佛三昧で居てみたこともあり、色々あがきてみましても彼の明德がわからぬ、其如く餘り身命を惜まず五體を擡きまして後には尻が破れ、痛みますゆへ杉原一帖ほどづゝ尻の

下に敷き座しましたれども、血が出て痛み、座しにくう御座つたので、綿をしいて座することも御座りたはいの云云、古人は斯様に刻苦精勵して長き年月を費して、道を求められたのである。

因縁 盤桂和尚と五匹の犬

盤桂和尚、網干龍門寺に居られた時、僧房に一匹の犬があつて五匹の子を持ちました。母犬のこゝろからは皆々不便に思ひそうなものであるのに四匹の犬の子を可愛がつて、残る一匹の犬の子には乳もろくろくに呑ませず憎んでくならぬ、盤桂和尚或時この母犬に向はせられて「汝は畜生ゆへわかるまいが、もし聞ゆるなら能く聞けよ」と云ふて「五匹なら我子であるから、わけへだてをするな」

とくれぐれも御誠めあらせられた、然るに其夜の夢に母犬は和尚の前に來り、人の物云ふ聲をして、「私は前生何某と云ふ遊女でありまして室津に勤め奉公をなし、身を汚して命をつないておりましたが、名染の客を五人もちしに、其中四人の男は情けの深い人であつたが、一人の男はまことの心のなき人ゆへ、日頃憎い／＼と思ひながら胸をさすつてこらへておりましたが、今此寺に居る五匹の犬の子は我前生の五人の男、四人の男は昔の情け深きゆへ今畜生となつて乳を呑むにも、いとしく不便に思ひます、耻かしや一人は、昔も憎く、思ひしゆへ今乳を吞ますにも心に染ます常に傍へもよせつけずに居るのは、ケ様な譯のあるゆへ、ごうぞ御許し下さりませ、さり

ながら其憎くかりし男の甥が、明日犬の子を貰ひに來ますから、左様思召し下されよ」と告げると思ふなり、夢がさめた、不審に思ふてござると、翌朝一人の男が來て「此方に居りまする犬の子を私に一匹下され」と云ふゆへ「どれなりとも望み次第に持ち歸られよ」と云へば「やせては居りますれど此犬がよいと云ふて、今の母犬に憎まれて居る犬の子をつれてかへりたので、盤桂和尚はます／＼感じ入り、夜前の夢は正しく母犬のつげであつたかと思はれたとある。

ハンセイ 反省 世語

自己を省みて過れば悔ひ改め、善道に進むを云ふ、
孫防と申す人は自ら四休居士と號して居り

ましたが、或人が四休の譯を問ひますると、
麤茶淡飯飽けば則ち休す、
補破遮寒暖かなれば則ち休す、
三平二滿過ぐれば則ち休す、
不貪不妬老ひて則ち休す、
と申したそうです。
又、顔蠟と云ふ人は、困難に處するに四味の薬があると申しました、四味とは、
一 無事を以て貴きに代へ
二 早寝を以て富に代へ
三 安歩を以て車に代へ
四 晩食を以て肉に代へ
るご申したそうです、この孫防や顔蠟の如く萬事萬端自己に反省して中心の喜樂を失はぬやうに心掛けたならば、如何なる境遇にあつ

ても従容たることが出来ませう。

【滑稽】 耳の遠ひ老婆

或老婆の申しまするやう、「昔は鶏が皆早うから鳴いたものぢやが、今頃の鶏も無精になり居つて、只欠伸ばかりする」と云ひました。此老婆が己が耳の遠くなりたことを省みずして、鶏が鳴かぬと思ふておるので御座ります。

【滑稽】 寝ぼけ女郎

昔、或僧が女郎買に参りました所、相敵の女郎が非常に寝坊で御座りまして眠りこんで一向に眼を覺しませぬ、僧も切角の思ひで一夜の愉快を買はんとして來たのに、眠りてばかり居られては本意でないと思ひ、頻りに女郎を呼び起しますが如何にも眼を覺さぬ、そ

こで僧は何か悪戯をしたなら女郎も眼をさますであらうと考へて、彼方此方を見廻しますと、枕元に鏡臺がある、鏡臺の抽匣を開けてみると、中に剃刀が一つありました、これ幸ひと剃刀で女郎の髪を一剃ちよとそりましたが、女郎は白河夜船で眠て居る、そこで二剃目をそりましたが、やはり大蛇のやうに髪をして眠て居る、そこで又三剃目をそりましたが女郎はやはり雷のやうな鼾をかいて死んだやうに爲つて居る、かくして遂に女郎の頭を全く坊主に剃てしまふたがまだ眠ておる、僧は此時大に心配し、此儘で女郎の眼が覺けたら大變ぢや、早く逃げやうと忽ち用意を調ひて女郎屋を飛び出し一目散に逃げてしまひました、女郎は坊主にされたのも知らずして、

ヒクワン

悲願 【術語】

大悲の誓願と云ふこと、法藏菩薩因位の四十八願を指すなり、

【歌】

くりおろす綱を取るより外にまた
ただでもあらし井の中の人

翌朝になりまして漸く眼をさましてみると御客様をおらぬ、そこで狼狽周章して「御客様はどこへ行つた、坊様何處へ行つたと云ひながら、寝ぼけ眼で探し居る中に、己れの坊主頭に手が觸れました、すると「やれ〜坊様はこゝに居たが、それなら私は何處へ行つたのであろう」と申したと云ふ話がある、なんと馬鹿氣た話ではござらぬか、兎角我等は自己に反省することを知らずして、徒らに外境に心を奪はれ、本心の主人公を失却して狼狽まはると、此女郎の如くであります。

ヒ之部

三間も五間もあるやうな深い〜井戸の中へ、五六歳の小供が怪我にはまつた、それを見るなり親は狂氣の如くうろたへさはぎ、井戸の上から綱を下げ、アサはやくこれにすがれよ」と大聲あげて叫んだ、井戸の中へ沈んだ小供は否でも應でも此綱にすがらねば命はないのぢや、綱とは御本願、井戸の中の小供とは御座の同行、彌陀一佛の悲願にすがりて助けましますとおもふころの一念の信と云ふのが綱にとりついた味ひぢや。

五郎と云ふ、四代目を継ぎたるを敏政と云ふ此敏政は師匠の三代目に劣らぬ手腕を有して居りましたが、つくづく思ふ様、我れは師匠よりは手腕は上達しておる、されど世間では師弟の別があるものゆへ、師匠を褒めるのであるから、はやく師匠さへ亡くしたなれば、獨り美名を天下に得らるゝことであらうと思ひ、毒殺を企てたのである、或日師匠の許へまいりて云ふには、「私が三年かゝりて刻みました獅子が九分九厘まで出来上りましたから来て見て下され」と云ふた、甚五郎は「それでは行ってみよう」と云ふので敏政の仕事場へ行いた、甚五郎はなかく能く出来ておると云ふて暫く見ておると、敏政は茶をすゝめた「茶も呑むが小刀を一寸かせよ」とて小刀を

持ち獅子の足を二三度げづれり、「サアこれでどこへ出しても批難なしちや、マア御茶を：「ヨシ／＼」と云ふておると、今の獅子が二三歩あゆみて茶も菓子も微塵にくだいた、これを見るなり敏政は、満面に懺悔の色をあらはし、事實をのべて謝罪をした、其時甚五郎は左の如く云はれた、「汝は枝藝は堂に上りておれど心が彫刻の室に入りて居らぬから、これから死ぬる命を彫刻の神靈に捧げ、我慢我執の家を出で、一生懸命に彫刻に力をつかせよ」と、この師匠の寛仁大度の一言、深く肺腑に徹し、ますます勉強して遂に其奥妙に達し、第四代目をつぐに至りたのであります。

ヒチ

悲智 【漸】

悲とは慈悲、智とは智慧なり 佛はこの悲智を圓滿したまふ、文類聚抄に「慈悲深遠即巨空智慧圓滿巨海」とあり、

譬喩 學校と施米札

學校は智識の程度によりて教へが違ふ、小學校を卒業して中學、それより大學と順序を追ふて行くものであるから、何にも知らぬ愚かなものが、私は何拾萬圓の財産を所有して居るから、ご一か大學へ入れてもらいたいと云ふても入る譯にはゆかぬ、又小學校さへ出たことのない老人が中學の門を叩いて、私は老人であつて小學校へ入るも間がわるいゆへご一か當校へ入れてもらいたいと云ふても入るゝ筈はない、それがなせと云ふに學校は智識が本となつてあるから、何も知らぬものは

中學や大學へ入ることはならぬ、聖道門もこれと同じことで、智慧の程度によつて教へるのちやで、聲聞緣覺には四諦十二因縁の法を與へ、菩薩には六波羅密の行を授けると云ふやうになつてある、ところが彌陀の本願はそうぢやない、慈悲門を開いて下されたのであるから、丁度慈善施米とかいた立札の處へ行くとやうなもので、立派な衣裳を着飾つた人は氣兼ねの身分ぢや、正客といへば饑寒孤獨のものや破衣を着た不具者癯疾の乞食が正客ぢや、第十八願の門口には慈悲の施米札がかゝつてあるゆへ、智者や聖者は氣兼ねをする方で、曾無一善の貧乏人が正客である。

因縁 奈良の鹿殺し

奈良の都に於て鹿を殺すと、鹿は春日明神

の御使ゆへに、人殺同様の罪に行はれたのである、然るに或時豆腐屋へ一疋の鹿が飛び込んて、一日の商賣用たる豆腐を残らず喰ふて仕舞ふた、亭主は腹を立て、直に鹿を殺してしもうた、依て御役所よりの御呼び立てありて「コリヤ豆腐屋、其方は錠を破り鹿を殺したと云ふことぢやが、如何ぢや」と御尋ねなされたれば、「なる程鹿を殺しましたが、私の處へ一匹の鹿が、けこんで、商賣の大事の豆腐を食ふてしまいました故に、私はあまり腹が立つて殺しました」と答へた、其時奉行のはからひに「豆腐屋は今度鹿を殺したれば打首は當り前なれども、汝が殺したる鹿は春日様の鹿ではあるまい、春日様の鹿は行儀がよいから、そんな人の宅へ這入りて盗み喰ひな

ごはせぬのぢや、それは定めて山から出た鹿であろう、依て此度の死罪は御免ぢや」と仰せられたとある、これ慈悲心のふかき奉行でありたから、豆腐屋の一命を助けてやりたいの慈悲と、よき智慧を出して辨解して下されたで、一命を助かりたのである、今大悲の阿彌陀如来は、慈悲深遠如虚空智慧圓滿如巨海と云ふて、虚空の如き慈悲と巨海の如き智慧とを以て、地獄一定の我々を救ひ玉ふのである。

ヒチリゴウジエン 七里恒順 【人名】

筑前博多萬行寺の住職なり、道徳家を以てあらはる、

指方立相と此土得證

七里恒順師の許へ、或時一人の居士が尋ねて来て、眞宗の指方立相の事を批難して云ふ

に、「和上の様な學者で、よもやこんな事を信仰なされまい」と、其時、師は驚いて、「イヤどうして私如き淺臺なものが、彌陀の本願他力に乗じて西方に生れずば佛になる道はござりませぬ」と云はれたら、居士は「それは御謙遜でありませう、私なども此土に於て既に證り得ました位であります」とて滔々この娑婆で證りを開き得ることを述べたてました、師は一向感服しない、彼は話する中に居士は歸ろうと云ひ出した、師は「マア、ただ話が盡きませぬ」と引止められたが、居士は堪へ兼ね「モウ晝過ぎで空腹になりましたから」と事實を打明られた、そこで師の云はれるには「これは怪しからぬ、今貴方は既にこの土で證りを得て居ると云はれたでないか

既に證られた人なら、一夜や二夜ぐらゐは寢ずに居ても佛教の話は出来そうなもの、それに晝が過ぎて腹がすいたとは何事です、それとも前に證りを開いたとの御詞は、拙僧に虚言を云はれたのであるか」と、厳しく問ひ詰められたので、居士は平あやまりにあやまつて俯々の體で歸られたと云ふことです。

ヒノサエモン 日野左衛門 【人名】

左衛門尉頼秋と云ひ近江日野の人、日野頼秀の裔なり故ありて常陸大門村に居る、親鸞聖人に歸依して弟子となり、入西房清圓と稱す、枕石寺の開基なり、

日野左衛門の發心

建保五年、親鸞聖人四十五の御年、常陸國を御巡化なされ、十一月二十七日、久慈郡大門村にて非常なる吹雪に出遇ひ玉ひ、大に御難儀なされたが、幸ひ向ふに大きな家が見ゆ

るで、それをたよりて一夜の宿を請はんものと、其方面をさして歩みを選ばれたのである。是れ即ち日野左衛門の邸であるが、左衛門は元江州日野の地頭日野左近將監頼秀と申す士の末にして、日野左衛門頼秋と云ふたが、邪見邪惡の豪氣者にて、慈悲同情の念は一つもない、聖人が蓮位西佛の兩僧をつれて左衛門の宅に入り、難儀の次第をのべていろ／＼とたのまれたれど、中々一夜の宿も容易には貸してくれませぬ、漸く門の軒端を借ることとなり、聖人は脚絆甲掛のまゝ雪の中で石を枕に御休みなされたが、蓮位西佛の兩僧は御枕のもとで降り来る雪を拂ふておる。

寒くとも袂に入れよ西の風

彌陀の國より吹くと思へば

とは當時の御詠である、左衛門は三人の旅僧を門前に追ひ出し、戸をしめて温々と休んで居たが、夜半の夢に一人の化僧忽然と御立ち遊ばし、「今宵宿を乞はれし旅僧を誰と思ふか忝けなくも西方極樂の彌陀如來、愍念衆生の大悲より、墨の衣に墨の袈裟、邪見な汝を濟度の爲めの御苦勞ちやぞよ、早く請待して法を聞け、我はこれ汝が守り本尊たる救世觀音なり」と、健かに御告を蒙りた、左衛門は驚いて直に起上り、座敷の戸を開いて見れば、門前には光明が輝いて居る、その體を一目拜むなり、身の毛いよだち、其儘庭に飛び下りて、聖人の御前に兩手をつき、晩方よりの不都合をわび、座敷の中へ御請待申し上げた、聖人は宿善開發の時が至りたと御喜びあらせ

られ、彌陀弘願の御ゆはれを諄々御説きなされたが、「惡に強きは善に強し」で、其場で發心出家をとり、法名を入西坊道圓と賜はるのであるた。

因縁 御首御眞影の由来

入西房道圓、日頃心に思はるゝ様、聖人はモハヤ七十有餘の御高齡にならせられたことゆへ、何時御遷化になるやもはかられぬ、ごゝかして御姿を寫し奉りたいと、常に思ふては居たれど、恐れ多くしてさらに口外したことはなかりた、所が他心微鑑の大權聖者たる聖人は仁治三年九月の二十日、入西房を御前に召され「其方は予が姿を寫したいと、日頃の念願、遠慮はない寫し取れ、幸ひ七條邊に定禪法橋と云ふ畫工が居る、之に命じて

寫してもらへよと、御許しあそばした、入西房は恐れ入り、唯の一度も申上たことはないのに、御師匠様は御見抜き下されたは、誠にうれしい難有い、併しこの私の念願を御知り下さるからは、胸の中まで御見抜き下さるのであるか、親にも子にも明されぬ蛇蝎姦詐のこのころを御覽なされてましますかと思へば、耻けしいやら恐れ多いやら、

人までに隠くしおきつる身の咎を

知るぞ佛の心はづかし

と一首の歌を詠じて暫し慚愧の涙にむせばれた、明くれば九月二十一日、入西坊は夜の明け方に起きて七條の定禪法橋の許にゆき、委細の様子を申し入れ其儘同道してかいられ、定禪法橋は聖人の御目にかゝるは今が初

めていあるのに、御姿を一目拜むなり、ア、恐れ多や勿體なや、何たる我身は仕合せものやらと嬉し涙に袖を絞りました、外の御方は何の事やら不審にたねぬ、「これ／＼畫工さん御前は何を云ふて感涙に咽んで居るのであるかへ、尋ねられて定禪の答ふる様、「去夜奇特の靈夢をなん感ずる處なり、其夢のうちに拜し奉る處の聖僧の面像、今向ひたてまつる容貌にすこしも違ふ處なしと云つて自ら其夢を語る」と、御傳鈔に示されてある如く、一場の夢物語を致したのである、夜前私は一つの靈夢を感じました、其夢に御出家が二人御こし下されて、一人の御出家の仰せらるゝには、法橋太儀ながらこの御師匠の御姿を寫しでもらいたいとのこと、私し夢ごゝろに、「ハ

イ畏りましてござる、併し御師匠様は何くの御方様、御名前は何と申ますか」と、尋ねましたら、「フーンそなたはまだ承知ないか、この御師匠は悉くも西方極樂の教主阿彌陀如来にたまはますぞ、我が日本で云はば善光寺の本願の御坊これなりとの仰せ、私は恐れ多く思ひ身の毛いよ立ち、何たる仕合ものであろうかと、歡喜の涙にむせびつゝ、御首ばかりを寫し奉りたひと思ふと夢がさめました今この御坊へまいりて聖人の御姿を拜ませて頂くと夢の中の如来様にすこしもかわりませぬとの事ゆへ、入西坊も感じ入り、それでは今も夢に任せよう云ふことで御首ばかりを寫されたのである。」

ヒユ 譬喩 【術語】

深遠なる教法の道理を現在所見のものに比況して知らしむるを云ふ、

因縁 惠王と惠施

梁の惠王に仕へた惠施と云ふ人は至極發明な學者にして、亦忠義な人でありた、此人が何か君に御諫言でも申上ることがあると、必ず手短かな譬喩を以て申上られた、處がこの惠施を忌み嫌ふ人があります惠王に讒言をして申上げる様、「惠施はいつも譬喩ばかりを場塞ぎに云ふて肝要の話を致しませぬ、此後彼人に譬喩を申すことはならぬと御差止めなされませ」と申上げた、惠王は最もに思召し、其後、惠施の出頭せし時に「譬喩を云ふことはならぬ」と御差止めになりました、惠施は委細を承まはりて申上るやう、「此間遙か南方

の暖國に生れて雪や氷を見たことのない人物にあひました、其人物が申しまするに、此邊には雪や氷が出来るぞ承りておりますが、私は雪や氷を見たことがござりませぬ、如何様なものでありますかと尋ねましたが、ケ様なる場合には何と云ふてさとしましたら向ふが納得するでありますか「惠王曰く、「つめたいものぢやと云ふたらわかるであろう」惠施曰く「雪も氷もともにつめたいのですが、形は如何なるものぞと云ふたら、其返答は如何致しませう」、惠王曰く、「雪の形ち、氷の形ち、フム、それはその説明にこまるなあ」と仰せられたら、それに乘じて惠施は左の如く申しました、「其様な場合には是非とも譬喩がなくてはなりませんまい、雪は色白くして手ざ

わりは至て柔かにして、形は打綿の様なもの
氷は水晶の様なもの申し聞かせましたら、
忽ち承知するでせう、譬喩の入用はこゝでこ
ざります、君に於ても、私が申上て御承知な
され難いことは、譬喩を以て申上げねばなり
ませぬ」と云はれたら、惠王も至極最もなる
申分であるとなつかしたと云ふことが説苑
の中に書いてある、智慧を磨いて座禪觀念、
おのれと證る程の相手なら喩へはなくとも分
りもせうが、座禪處か觀念處か、といても
く分らぬ様な愚かなものには、是非とも御
たごへによるより外はなる。

ヒラタアツタ子

平田篤胤

人名

出羽秋田の人にして和學者なり、秋田藩に仕へて祿百
石を食み、後に旗元に進めらる、天保十四年閏九月歿
す、年六十八、

し、遂に秋田藩士なることを知つて、侍臣平
田某の養子とせられたのである。

雜錄

平田篤胤の和歌

見ればしも人にやあるとよく見れば
あらぬ獸の人の皮きる
神はよし神とあらずも我や人
人たる道を好まであらめや
祖はよし祖とあらずも我や子
子たらん道を盡さてあらめや
人はよし人たらずとも我や人
人たる道を知らであらめや

ヒラノクニオミ

平野國臣

人名

福岡の藩士なり、通稱を二郎と云ふ、勤王家なり、元
治元年の秋、幕吏の爲めに刑せらる、時に年四十三、

平野二郎と西郷隆盛

ヒラノクニオミ

談叢

平田篤胤と板倉侯

平田篤胤は秋田の人である、少年の頃に江
戸へ出ましたが、夢中半銭の貯へもなく親戚
知己の依るべなく、非常に辛酸を嘗めて、火
消人足となり、俳優の男衆となり、更に轉じ
て常盤橋外某家の奴となりましたが、自分の
受持の仕事がすむと直に讀書をしておる、當
時常盤橋目付は松山の板倉侯でありましたが
一日厠にゆきしに遙かに讀書の聲が聞へるも
のですから、不審に思ふて尋ねられたら某家
の奴であつたので、さても珍らしいことと思
ふておられた、其後同侯は他職に轉じ、又三
年餘を経て再び常盤橋目付を命せられしに、
讀書の聲は依然として昔の如くであつたから
頗る其熱誠に感じ、侍臣某をして其素姓を糺

平野二郎は慷慨にして大節ありき、夙に尊
王倒幕の説を持して深く西郷隆盛と結びしが
隆盛は容貌魁偉にして威風凜々たる偉丈夫な
れば、時として氣焔を吐き、人を壓するの失
あり、二郎常に之を惜みたりしが、後隆盛血
氣に乗じて人と争ひ、怒りをもらして劍を抜
くに至りしと聞き、益之を憂ひて竊に謂ら
く、今天下の大事に堪ふるものは、隆盛を除
きて誰かある、若し一朝些少の事にて、斯る
奇傑の士を失ふが如き事あらば、我神州の浮
沈にも關らん、今に及びて其弊を矯正せずん
ば、後に悔ゆるも詮もなからんと竊かに時期
の到るを待にける、或日二郎は隆盛と共に、
國家の大事を議せしことありしが、其議協は
すして遂に一場の劇論とはなれり、二郎此時

なりと思ひ、直ちに傍なる鐵扇を把て隆盛の頭を打つ、隆盛怒氣天をも衝かん如く、蹶氣して刀を撫で、いざ狂漢覺悟せよと詰寄れり二郎は冷かに微笑しながら「汝も亦天下の大事を計るべきものにあらず」と、獨語しつゝ、嚴然と襟を正して言ひけるには、「凡そ前途に大望を抱くものは、皆其身を愛して時の至るを待たざるはなし、韓信は賈人の股下に屈して天下に伸び、相如は秦王を廷辱するの勇を忍んで廉頗の車を避けたり、血氣に乗じて事體を顧みず、妄りに理非を刀劍に認ふるが如きは、所謂匹夫の勇にして大丈夫の耻る所なり、吾と汝と身を忘れ家を忘れて共に計る所のものは何事ぞ、眼前の小事に憤激して大任の身にあるを忘るゝは何事ぞ、抑も此を以て

國家の憤となすか、神州の爲と思へる乎、汝こそ狂漢なれ、看よ其毗り裂け髪堅つ醜態を、嗚呼吾汝を以て國器なりと信せしは誤りなりき、嗚呼天下人なきこと久し、誰と其にか此大勢を制せん」と痛く之を規誨せしかば流石の隆盛も一言なく深く其身の失を責め其後は氣に克ち心を潜め、遂には其度量宇宙を包括するの南洲翁となるに至れり。

平野二郎の辭世

平野二郎、幕吏の爲めに捕へられ、刑に就くや、從容として拍手再拜すこれは朝廷に永訣を告げたのです、詩歌各一首を賦して辭世しました。

其詩に曰く、

憂國十年 東驅西馳

成否任天 魂魄歸地

其歌に曰く、

見よや人あらしの庭の紅葉々は

いつれ一葉も散らすやはある

ビンズルハラダ

寶頭盧頗羅墮

具には寶頭盧頗羅墮と云ふ、白頭長眉の羅漢なり、

因縁 千僧供養大會

寶頭盧頗羅墮尊者、樹大長者が栴檀香木の鉢を取ろうと思ふて、大神通を現はした爲めに、釋尊より御叱りを受け、其方は涅槃に入らず何時までも此世に居て十方施主の供養を受けよと仰せられたので、唯今でも眞實に供養するものがあれば、どこまでも御出なさるゝのです、そこで寺の檐には寶頭盧尊者の木像をこしらへて安置し、諸人の供養を受け玉

ビンズルハラダ

ふのであります、天竺の長者がこの寶頭盧尊者を招待したいと思ひ、千僧供養の大會を設け、庭に淨妙の花を蒔き散し、尊者が御出下さらば、花のしほまぬを以て證據としようとして、丹誠を抽んで、營まれたが、花は皆しほんでしまふ、これは信心がたらのぬちやと思ひ第二回目の法要には念に念を入れて營まれたれど復花が凋んでしもうた、これでは残念であるとして第三回目には一層丹誠を抽んでられたが、今度は花が凋まなんだこれはいよいよ尊者の御出下されたに違ひなむと思ひ、「ごなたが寶頭盧様でござるか」と御尋なされたら上座に居らるゝ八十あまりの老僧が「おれこそ寶頭盧である」と仰せられた、そこで御姿をつくゝ見れば眉間に三つの疵がある、「こ

れは何となされた」と御尋申たれば、「されば其方が眞實の志から大法會を設け、我を招待するによりて、初めの法會の時にも來れども、年老ひて瘦せ衰へ、袈裟も衣も破れてあるゆへ、門番の人に咎められ、入ることならぬと云ふを、無理に這入ろうとして、この右の鬢先の疵を受けた、二度目の時にも亦同じやうに左の鬢先の疵を受けた、今度こそは三度目ゆへ、どうでもこうでも來たいと思ふて門番のたゞくのもかまわずに來たから、眉間の疵を受けたのちやと仰せられたとある。

フ之部

りましたとある、これ風外和尚の眼中には、高位榮職の人や、王侯貴人を慕ふと云ふやうな、そんな腰の抜けた境界ではない、來るものは之に慈眼を以て迎へやうが、時に臨んでは風外これ獨尊佛なのであると云ふの識見であります。

鐵牛禪師と風外和尚

稻葉侯、真鶴山の絶眺の土地を選びまして長興山と云ふ立派な寺を建て、風外和尚を勸請した、處が其懇請を受けず辭せられた、致方がないから黄檗の二代木庵禪師の上足なる鐵牛禪師を屈請することになつた、鐵牛禪師も中々の英雄であつたのである、稻葉侯或時鐵牛禪師と同道で風外和尚を訪れ、鐵牛禪師の曰く「貴下は世塵を遠く離れ、寂黙これ事

フウグワイ

風外 【人名】

名は懸兼 字は風外、上野國碓氷郡土國村の人なり、相摸成願寺に住す、生年月等詳ならず、

小田原侯と風外和尚

小田原城主稻葉侯が、大に風外和尚の高風を慕ひて、是非に一度逢ひたいと云ふので使者を差向け、和尚を城中へ招いた、和尚は招きに應じて城中へまいりましたが、侯は丁度來客があつて酒宴最中であつたから、どうすることも出來ぬので、取りあへず和尚を客間へ通した、和尚は甚だこれを喜ばない、風外直さま筆を取つて、

太守、一國、鎮 我は是レ風外、身

卒客無卒主 宜レ假不レ宜眞

と走り書きに屏風の上へ眞黒に書きまして歸

として居るゝが實に「美しい」と申しますと、風外の答に「ア、世を遁るゝことは造作もないことで、又出家も造作はないが、しかし出家後の出家は六ヶしい、現今の僧の多くは、三衣を着用してはおれど眞の出家は少い又世をすつるも同様ぢや」と云はれたとある

風外和尚の酒脱

風外和尚は枯淡酒脱、毫も塵事を以て意に解せられませぬ、奕堂、風外の門下にあつて典座となりましたが、米麥將に盡きんとするの悲境に陥つておるのに、風外はどしどし參禪するものゝ來宿を許さるゝものですから、奕堂は心配でくたまりませぬ、方丈へ行いて窮乏の狀を陳べますと、風外舌を出して云はるゝやう、「己れの舌はあるか」奕堂「ござ

ります「風外「舌さへあれば食ふに差支ない」

フオンジユ 不飲酒 【術語】

飲酒すれば放逸に流れて智心昏亂す、故に誓て此事をなさざるを「不飲酒」と云ふ。

談話 ジャックの禁酒

ジャック、シムプキンと云ふ水夫は、英國ボートハウスの造船所に雇はれて居たとき、酒が好きで澤山に金銭を費したので、生活に困難し、妻子はいつも破れた汚れた服を着け粗末な飲食をし、そのうへ濕氣の多い、極寂しい小屋に住んで居たのである、或夜、酒飯仲間と街中に彷徨ふ折柄、不圖人の家に這入つた處が、たま／＼此家に禁酒會の集會があつて、今しも温和の容貌で一人の紳士が、頻りて大酒の害をのべ、少しも酒を飲まない人

は幸福が多いといふことを説いて居を、ジャックは酔中ではあつたが、此の演説の趣きを聞き取つて、大に心に感じ、演説が了ると同時に入會を乞ひ、禁酒の仲間に加はつたのである、ジャックが酒を禁じた後、朋輩の者が頻りに嘲り笑つたが、元來正直な男であるから、一度誓約したことは違へず、酒屋の方へは足も向けないで、儲けた金は皆な家の世帯に用ゐたので、今は家内の者も、垢のつかない衣服を着、食事に事は缺かず、家具も買ひ求め、小供は學校へ入れ、それから貨錢の使ひ残りは、少しづつ貯金銀行に預け、病氣にかゝつた時、又は老年になつて、仕事の出来ない時の準備としたのである、ところがジャックの友たちはかやうな行爲を譽めないで、

却て之を笑ひ、人にはよい衣服を着せたり、味のよい物を食はせたりして、自分では冷たい芋を食つて居る大馬鹿者であると嘲つた、或る日、ジャックは彼等が嘲を心地よく挫いたことがある、朋輩の若者が途中でジャックに行違ひ、「汝は酒を止めたが、心よいことはあるまい、憐な奴ぢや、汝が顔は追々黄色になつたぞ」といふと、ジャックは其の時丁度貯金に行く道であつたから、金貨を十二箇ばかりとり出して「吾が巾着も黄色になつた、諸君これを見よ、吾は禁酒したゝめに、こんなに黄色な巾着を得たぞ」といつたので、彼の友たち等は大に自分等の貧乏を耻ぢて、其の後は、二度と嘲笑しなかつたといふことである。

談話 ジョルジと麥酒の再生
染工ジョルジと云ふ人は麥酒を嗜むの癖がありまして常に酒店に出入し節儉の道を修めませぬ、妻を娶りました時、妻の申しますやう「妾麥酒を好みますから一日に六錢ついで下されよ」と云ふた、ジョルジ其非なることを知れど、自分も之を嗜むものであるから止を得ず承諾しました、其後酒店に遊びましても必ず六錢を餘して妻に與へます、斯の如きこと始んど一年、家計大に困難に陥りました或日妻に向ふて申しますやう、我れ其方を娶つてより一年になるが、家計ますます非にしていまして今は一錢の貯へもない、後日の生計は如何したものであらうかと、相談を致しまるると妻直に立つて小囊三百六十餘箇を出す、一

蠶毎に六錢つゝ入れてある、而して静かに云ふやう「これ妾が飲むところの麥酒の再生なりと、シヨルシ大に耻ぢ即日飲酒を禁じ、後ついに富有の身となつたさある。」

譚 在監人の懺悔話
或在監人の懺悔話に、「私は性來酒をたしみましたして今回の失敗も其原因に遡れば全く酒の爲めでありますが、先年東京に在學中、年々脚氣を患ひますから醫師の忠告によつて、滿三年間斷然禁酒致したことがあります、宴會とか知己の宅へ行たときなどは大に不都合を感じましたれど、情實の爲めに決して決心を動かしませぬ、人の見ておるときもおらぬときも表裏なく實行しておりましたが、滿三年魔事なく経過し其中に脚氣も年々起らぬや

うになりましたから、何か機會があつたら一度酒を呑んでみやう、是迄のやうに斷然禁酒をしては社交上あまり殺風景であるから、一度に三杯と極めて置かうと思ひました、丁度其頃同窓の懇親會がありました、初めて三年以來口にしない酒を一杯呑みました、處が一杯では止められぬ、三杯五杯八杯と際限なく呑むやうになり、そうすると酒友達が出来て甲地の遊廓乙處の茶屋と放蕩三昧に身を持ちくすし、呑めよさはげの快樂も束の間の夢で遂には借金に身を沈め、のつばきならぬ苦し紛れに、つい心にもない不丁筒を起し斯く御上の御厄介になりたことですが、今にして思ふてみると、あの懇親會の席上で一杯の酒をのます、禁酒を繼續して居たら、斯くの

如くの悲運には陥りませぬでせうに、實に思へは思ふほど残念でなりませぬ」と涙ながらの懺悔話を致したことがある、これは連如上人の「一度のちがいは一期のちがひ一度の嗜みは一期の嗜み」と仰せられてあるのには、誠に好き例話である、一步千里でありますから、西向ひて踏み出すか東向ひて踏み出すか一步の踏み出しやうで、末には東京と長崎との大違ひとなります。

譚 飲酒と不飲酒
釋尊 或時多くの御弟子方に向ふて、飲酒の誠めをして居られますと、其當時の外道日外道と申せば何だか妙に聞えるでせうが、今日で云へは異りた説を立てる哲學者の事です、日がそれを聞いて、高慢にも釋尊の前へ行い

て、頻りに酒の功德を説き立て、議論を吹きかけますと、釋尊は少しも理屈を云はれませぬ、我が心には道業に妨げがあると思ふから禁じたのちやが、論より證據、西方の弟子等を一座に並べて、其徳を試験せようではなぬかと云はれますと、外道も賛成して遂に雙方の弟子を一座に立てわけて試めしました、すると佛弟子の方では元より飲まぬ酒ですから酔ふたためもなく、終日成儀作法を亂さないで如何も靜肅であるのに、外道の方の弟子達は、追々酔の廻るにつれて、踊るやら舞ふやら、怒り上戸、泣き上戸、笑ひ上戸、とても御話にならぬ亂暴を始めたものですから、流石の外道も低頭平身して釋尊の前に詫ひ入りて、とうとう佛道に入門したことがあります

不許堂酒入山門

山寺の和尚が盛んに酒を飲むので檀頭の主人が忠告した、これ、和尚、あなたも凡夫ぢやから、酒を飲まれてもよいけれど、少々陰な方で隠して御飲みなされ、門前の石には、

不許堂酒入山門

と書いてあるぢやありませんか、と云ふと、和尚は微醉機嫌で、貴様あれは何と心得て居るだ」と云ふから「それは貴方、堂酒山門に入ることを許さずです」と答へた、和尚からくと笑ふて「イヤ、ハヤ無學なもの致方がない、あれはそんなことぢやない、乃公がきかせてやる、斯うぢや、

不許堂酒入山門

と讀んで、釋尊は不飲酒戒などと云ふて五戒の中にも酒は許してないけれど、酒はどしどし山門へ入つくと云ふことぢや、入つて来た酒なら飲まぬば勿體ないから、乃公は飲んでおるのぢや、馬鹿なこと云ふなど怒鳴りつけたとある。

フカシギ 不可思議

心も言もたへてたることなり、勝鬘經に「心行滅、故不可思議、言語斷、故不可思議」とあり、

染いだす人はなけれど春來れば

柳は緑花は紅ひ

柳はどふで青く、花はどふで紅ひぞと、工夫をつけても理會はゆかぬ、唯是れ造化自然造物者の無盡藏不思議な事と云より外はなひ今一毫末斷の悪人凡夫が如來を頼み奉るば

かりで、光りを放つ佛になる、斯る不思議のことはりは、三賢十聖非所洞窺等覺補處の彌勒菩薩を首め、量り知り玉ふ事は叶はぬ増て愚痴無智の凡夫が、何として窺ひ知ふぞ唯不思議と信じ候うへば、兎角の計ひあるべからず、晋の郭洗馬と云者錢樹子の舞をまふて新聲うたふを聞いて、涎を流し、朋友の石季倫と云者に開口て、存外面白かりたと云へば石季倫聞て其歌は二上りか三下りか、何と云曲で有たぞと尋ねたれば郭洗馬が否其曲は何かも知ぬが唯漫に、面白かりたといへば、石季倫が其れはつがもなひ、歌の目も知らひで何の面白ひ事が有ふといへば、郭洗馬取あへず「譬へハ、如見西施何必識姓名然後知シヤ美」と云たは、昔し西施は天下無雙の美

人、いかな者も一面見ると、さても美しひと云たは顔さへ美しくければ、名を識ひでも美くしい事は美しく、歌の曲は何やら知ねども面白い歌ぢやに由て、聞は自然と面白い、何と左右ではないかと否といはれぬ、理の當前何ことのおはしますかは知ねども

忝さに涙こぼるゝ

どふした縁で凡夫が助るやら、何にたる子細で悪人が佛になるやら、其義は知ねども、頼めば必ず助け玉ふ、信すれば必ず參らせて下さるゝ事の頼母しさに、さても不思議の御本願哉と、うちきれて御恩を喜ぶより外はない

句 糸瓜とは糸瓜に似たり糸瓜かな
ぶらりと下つて居るあの糸瓜です、ごう云ふ譯で糸瓜と云ふ名がついたのですかと尋ね

てみても、ごふ云ふ譯、斯ふ云ふ譯と説明することば出來ない「糸瓜とは糸瓜に似たり糸瓜かな」で、糸瓜に似て居るから糸瓜ちやと云ふより外はない、似て居ると仰せらるゝと其元の糸瓜と云ふは何故でござると云ふたらエ、面倒なことを云ふな、糸瓜と云へば糸瓜ちやと怒鳴りつけるより外はあるまい、今南無阿彌陀佛と云ふは何の事ですかと尋ると、悪人凡夫が其儘御助けにあづかるで南無阿彌陀佛と云ふのちや、それは亦どう云ふ譯でござるか云へば、願力他力の不思議ちやと云ふ、其不思議とは如何なることと云ふ、不思議とは妙と云ふことちや、其妙と云ふはと尋ねたら、エ、面倒なことを云ふ奴ちや、妙と云ふたら妙ちやわい、本願信じて念佛申せ

と云ふより外はあるまい。○
 楠公の石碑
 徳川光圀卿が湊川に楠公の碑を立て、其銘に、

嗚呼忠臣楠子之墓
 ○○○○○○○○
 と刻したが、我國開關以來の忠臣の代表者とも云ふべき楠正成公の徳は、如何に千字萬字の文章を列ねた頌徳文を書いて褒め盡し難いことであるが、それを今光圀卿はわづか八字を以て楠公一代の徳を頌し盡したのである、「嗚呼忠臣楠子之墓」と、名を呼べば直に徳をほむることになる、嗚呼の一言はほめてもくほめ盡されぬ、楠公一代の忠義を封じこめられたもの、今阿彌陀如來の御徳をほめるもそれと同じことで、大經には無量壽佛の

威神功德不可思議を賛歎すると云ひ、阿彌陀經には、六方恒沙の諸佛如來が口を揃へて、彌陀の佛徳をほむるに、不可思議の言を以て讚歎せられてある。

因縁 智慧の輪

一人の細工人があつて智慧の輪を二つ拵へて、これを宋の元王へ進上した時、元王も智慧自慢の人であるから天晴と見て見やうぞといろく心を碎かれても解けぬに依て、一家の者にこの智慧の輪を解けと申付られた、家中の面々我れ一と智慧の底を叩いて工夫すれども合點がゆかぬ、そこで宋の國中の智慧あるものを呼びよせて、此輪を解いたら莫大の御褒美を下さることであるから、いづれも思案をめぐらせども一人も解くものはなかつ

たところが、兎説と云ふ學者の弟子に一人の智慧ふかき人があつて、かの智慧の輪を見て一つはまんまと解き了つたが、今一つの輪を考へて云ふやうには、「此輪は私の智慧の及ばぬではなけれども、彼の細工人が最初から解けぬやうに拵へおいたものゆへこればかりは解れぬぞと知つたのが、即ちこの輪をどいたと申すものにて候」と申たれば、元王はるばるかの細工人をよびよせ此趣を話されましたら、細工人は横手を打つて、「さてく大王の御國にはすさまじい智者がある、成程其人の申す通り、一つは智慧次第で解けるやうにこしらへ、一つは初めより解けぬやうに拵へおきましたを見ぬかれたは、中々感心の至りである」と云はれたそうです、これは解け

るものなら解けると知り、もとより解けぬものは解けぬこと、知つたがやがてこれを解き得たと云ふものぢや、今阿彌陀經に聞説阿彌陀佛とありて、其説きなされやうは、釋迦如来も十方諸佛も、口をそろへて不可思議功德と説かせられて、この名號は説かれぬこと、極めさせられた、なせ説かれぬかと云ふに、一毫の煩惱をも斷せず、一分の智品をも生ぜず、造悪不善のいたづらものが、後生たすけ主へとたのみ奉る一念の處に六道生死の迷ひの根がきれて界外無漏の報土に往生し、無上涅槃の位に昇り、光りを放つ佛に、し下さるゝ、其不思議な味ひは、どうも説かれぬことぢやによつて、唯不可思議功德と仰せられたのである。

フクザヲユキチ

福澤諭吉【人名】

一身を捧げて學術界に貢献し、慶應義塾を興して子弟の教育に盡せし大學者なり、

談叢 福澤先生の懺悔話

明治の御代に第一の智者と云はるゝ福澤諭吉先生の如きすら、其自傳の中に左の如き懺悔話をしておられるゝことを見受るゝ私は酒の爲めに生涯の大損をして其損害は今日まで身について居ると云ふ其次第は、諸方の塾に學問修業しながら、兎角酒を呑むでよいことは少しもしない、これはすまぬことだと思ひ恰も一念こゝに發起したやうに斷然酒をやめた、すると塾中の大評判で、ヤア福澤が昨日から禁酒した、コリヤ面白い、コリヤ可笑しい、何日まで續くだらう、とても十日は持て

まい、三日禁酒で明日は飲むに違ひないなんて、冷かすものばかりであるが、私も中々剛情に辛抱して、十日も十五日も飲まずにおろと、親友の高橋順益が、「君の辛抱は忍らい、能くもついく、見上げてやるぞ、所ですべて人間の習慣はたごひ悪いことでも俄かに禁すると宜しくない、到底出来ないことだから、君がいよく禁酒と決心したらば酒の代りに煙草を始め、何か一方に楽しみがなくては叶はぬと親切らしく云ふ處が、私は大嫌ひであつたれど、つい口車に乗せられて、一ヶ月ばかりの間に、本當の煙草客になり、又酒も一寸一盃やつてみると堪らない、モウ一盃これでお仕舞と力んで徳利を振て見て、音がすれば我慢が出来ない、とうとう三合の酒も皆飲ん

フシドウ

で仕舞つて、又翌日は五合飲む、五合三合と徒前の通りになつて、されば煙草の方は、喫まぬ昔の通りにせうとしてこれも出來ず、馬鹿々々しいごも何とも譯が分らない、さても叶はぬ禁酒の發心、一ヶ月の大馬鹿をして酒と煙草の兩刀づかいになり果て、六十餘歳の今日にいたるまで、酒は自然に禁じられど煙草は止みさうにもせず、衛生の爲め自ら作せる損害と申して一言の辨解はありませぬ云々」たい酒と煙草でさへも此通りである、況んや高慢、卑屈、詐偽、貪婪、淫亂、不實不人情、不信心など、さまざまの罪惡に至つては、何うして人間は己の方で、之に打勝つことが出来るものでせうか。

フシドウ 武士道

【世語】

死を鴻毛の如く軽んじ、義を山岳の如く重んずる、日本固有の大和魂を指す、

班鳩平治の潔白

班鳩平治、初め上杉謙信に事へ、後、諸國に流浪して加藤清正の家老庄松隼人の家に寄食して居たが、清正は其武勇を愛し、自分の臣下に加へやうと云ふので、隼人に命じてよきやうに取計らはせた、隼人は命をうけて、平次に相談をかけた「君は我主君清正公に仕へやうと云ふ心はないか、もし仕へるならば何程の祿を求めつものか、覆藏なくもうしてくれよ」と云ふた、すると平次の答が面白い「自分一人の飢を凌がれるならそれでよいと、頗る潔白なる答へちや、「君は上杉氏に事へた時には二千石を頂いて居たときいて居る

が、今もやはり二千石でなければ氣に入らぬのであろう」と云ふと、「イヤ〜祿は功を累ねて得るもの、我は一寸の功もないのに、舊祿を稱して多くを貪るなどは、非常に男子の耻づべきことだ、それだから祿を定めずして仕へませう、さるかはり、他日従軍した場合には、一度の勳功毎に五百石づゝいたゞきたい、これ主君漫りに與へず、我れ空く受けず雙方ともによき手段ではありませんか、隼人之を聞いて大に感ぜ清正に話しますと、清正もそれは妙策であると云ふて承諾せられ、遂に平治は清正に仕ふることゝなつた、其後、朝鮮征伐に従軍して殊勳をたつること七回、遂に三千五百石を食むに至つたのである。

松崎大尉の妻

明治二十七年八月一日、清國へ對して宣戰の詔勅を下されましたが、其當時に松崎大尉は、何時出征せねばならぬやも知れぬと思ひ暇乞の爲めに自宅へ歸りました、老父は病床に居られます、病める父に告別するは非常に斷腸の思ひがいたしますれど、さりとて時間制限のある身のことゆへ、思ひ切りて宣戰の御詔勅の趣旨をこま／＼と話しましたが、流石武士道の素養ある人のことゝて、別に驚ける色も見せず、一死以て君國に殉せよと諭された、松崎は大に喜びて最後の挨拶をなし妻子にも事情をうちあけて別れをなし、モハヤ是で思ひ残すこともなしとて師團へ歸りかけた、道の十町も歩める時、後ろよりオ、イと呼ぶ聲あり、ふり向ひてみれば妻である、

ア、女と云ふものは何たる愚痴なるものぞ、苟くも帝國軍人の妻たるものが、跣足で夫の跡を逐ふとは何等の醜態ぞと、心に思ひながら待つておらるゝと、妻は逐ひかけ來りて云ふやう、清國までの旅費は政府から頂かれるでせうが、もしも敵弾にたおれることあらば死出の旅路に向はねばなりませんねが、其出離生死の路金に如何なされますか、それが承りたいばかりに跡逐ふてまいりました」と云ふた、松崎答ふるやう、「生死出離の旅費は確かに用意して居る、軍隊には本願寺より布教使を差向けられて、時々御法話を聴聞して居る、

後の世を彌陀の誓にまかせつゝ、いのちをやすく君にさしつけよ

とは子が精神であるから、心やすく思ふてくれ、萬一敵弾にたおるゝことありても、西方の淨土で再會することであるぞ、辭世の二十八字を形見に残しておくゝとて、鉛筆を以て名刺に左の詩を記された、

春は醒風に入りて彈雨斜なり
危難背め盡して感いよゝゝ加はる
死なば淨土へ還り生きなば郷里

兩々花は香ばし父母の家

其後、松崎大尉は清國にて數度の激戦に目ざましき活動をなし、遂に名譽の戦死をどげられたのである、其悲しき電報が、留守宅へ着した時に、老父はやはり病床に苦しみ居られ、子は父上は何時御かへりぞと尋ねる、老父にも明されず、子にも云はれず、松崎大尉

の妻、當時の苦しきは實にゝ云ふに云はれぬ切なきことでありたであらうと思はるゝ、父上はいつかかへるぞと幼な子の問ふに答ふは涙なりけり
人生の最大悲劇、恐らくばこれに勝るものはないであらう。

談話 餞別の十七文字

明治三十七八年の役に際して、旅順口にて敵の堅艦をくだき、風雪の中に壯烈なる戦死をどげたる江副中佐が出征せらるゝ時に、中佐の嚴父武矩氏は、
散りぎわのなほ勇ましき櫻かな
と云ふ十七字を認めて餞別とせられました、而して中佐は此句の如く散りぎわの勇ましき名譽の戦死を遂げられたのである、中佐戦死

の報をうけた時に、嚴父武矩氏の云はるゝには、「ごんな死に様を致しましたか、少しは御國の爲めになることをして死にましたか」と云ふて、一言も未練がましき愚痴をこぼされなんだとある。

雑録 赤穂義士の辭世

大石良雄

あらたのし思ひは晴るゝ身はすつる
浮世の月にかゝる雲なし

貝賀彌左衛門

櫻咲く茶屋もあらじな死出の旅

木村岡右衛門

身寄浮雲滄海東 久愆恩義世塵中
看花對月無窮恨 散作曉天草木風
横川勘平

待てしばし死出の遅速はあらねども
先つさきかけて道しるべせん

吉田忠左衛門

君が爲め思ひぞつもる白雪を

とかすは今朝の峯の春風

竹林唯七

三十年來一夢中 捨生取義幾人同

家郷臥病ニ双親在 膝下奉歡恨未盡

原惣右衛門

かねてより君と母とに知らさんと
人より急ぐ死出の山道

小野寺十内

今は、や言の葉草もなかりけり
何の爲めとて露結ぶらん

富森勘右衛門

飛びこんで手にもとまらぬ霞かな

フジヨウジユ

不定聚 【術語】

自力念佛の機に名く、名號を稱念する故に邪定聚の名を離るれども他力念佛に非るゆへ正定聚にあらず、

歌

乗り得ても心ゆるすな海士小舟

高瀬の波のあらん限りは

念佛を信する手前は二十願も十八願も同じやうなれども、不定聚の機は自力信心で機の策勵が離れぬゆへ、舟に乗りたはよけれども、櫓を押ししたり揖を取りたりする働きがやまぬ其働きのやまぬのは舟に任せ兼ねるゆへぢや上の歌の如くで、弘誓の舟に乗り得ても、死ぬまでは心ゆるされぬ、行業を策勵と勤め勵みて修せねばならぬと云ふ、力味心がある、元祖聖人の御歌に、

のり得ては心うれしき海士小舟

高瀬の波の立つにつけても

と仰せられたは第十八願の意である、如來の願船に打まかせ助け玉へと乗り込んでみれば行者の方に案じ煩ろうことなし、煩惱の波風の起るについても、なおく御慈悲が、尊まれるのです。

フセ 布施 【術語】

六波羅密の隨一なり、金銀衣服等を施すは財施、世出世の正法を説き與ふるは法施なり、

熊本籠城の事實談

谷干城子の夫人玖満子と云ふは、中々賢明なる人であつた、西南戦争の當時谷將軍は熊本鎮臺の司令長官として熊本城を守つて居られたが、賊將桐野利秋篠原國幹等が大兵を率

いて七重八重に圍んだゆへ、どうすることもならぬ、おい／＼兵糧は乏くなるから城中に於て粥をすゝつて僅かに飢を凌いでおると云ふ始末、玖満子夫人は常に炊事を指揮し、彈丸の飛び來る中を物ごもせず、此處彼處を奔走して世話をなし、又力めて將軍の氣を勵まされた、或時兩軍入り亂れて戦ふ中に兵卒が少しく疲れた頃、夫人は大釜で小豆を煮て手づから牡丹餅をこしらへ、又堤の内をさがして、三つ葉、葦、嫁菜の三種を摘んで来て、それを酢に浸して一同の兵士に饗まはれた、すると城中の兵士は大に喜び、籠城中にこんな甘いものはなかつたと云つて、皆々喉を鳴らし舌打ちして食べました、かくて賊軍は遂に敗北して誅戮せられ官軍は首尾よく凱歌を

あげて歸りましたが、それから「熊本籠城會」といふ會が出来て、當時籠城した將校士卒が寄り合ふて籠城中の難義話をせらるゝことであるが、その會には必ず三つ葉、葦、嫁菜の三種と牡丹餅が出来てそれを食ふて苦戦の紀念とすることである、其度毎に何れも夫人の賢いことを褒めぬものはないと云ふことです。修證義の中に布施の事をのべて「其物の輕きを嫌はず其功の實なるべきなり」とあるが、實に其通りで三つ葉葦嫁菜のしたし物や牡丹餅の御馳走は、誠に軽い品物であるけれども之をこしらへて疲れたる兵士を慰めようと云ふの思ひつきはまことに切實なる老婆心の顯はれと云はねばなりません、これらこそ眞實の布施と申すものである。

フダンボンノウ 不斷煩惱 【備語】

聖道門の斷惑證理に對して淨土門は「一」云ふ、一毫の煩惱を斷ぜずして證果を得るなり。

歌 なれぬればさすがわびしき柴の戸も

名残のおしき今日にもあるかな
公義の法度に背きし咎によつて我が古郷を
追放され、妻子眷屬にも別れて遠い島へ流され、
數年の間、那方に逗留して心ならずも月
日を送る中、思ひもよらぬ大赦令が出て、あ
らゆる罪人ゆるしたまふ程に、流罪の者ご
もに勅免を蒙りて古郷へかへると云ふ事にな
ると、世にそれ程なうれしきことはあるまい
然るに彼の島に逗留の間に、柴の庵を結んで
住ひて居たが、わびしい事不自由なことは噓
へん方もなければ、今度島を出で、故郷へ

歸るについては、何となふ其不自由な柴の庵
に名残が残ると云ふ歌のころ、御座の我等
は罪業深重の罪人、本覺眞如の域を離れ三界
生死の島へ流されてより、展轉五道憂畏勤苦
多生劫々永々のことであつたが、難有は彌陀
如來、他力本願の大赦を行ひたまふ程に、十
惡五逆五障三從の惡人女人、此度は三界生死
の島をはなれて涅槃常住の城へかへる身とな
つた、然るに貧ひ庵も年を経て馴れてみると
流石にすて難く思ふ様に、「久遠劫より迷ひそ
めし苦惱の舊里はすて難くして未だ生ざる安
養の淨土は戀しからず候こそ、よく／＼煩惱
の興盛に候こそ」久しく三界の島にあつて五
欲の家に馴染が深かければ淨土へまいること
をさほごに思はず、却て娑婆に名残を残して

すてかねたる有様は、よく／＼迷ひの深いゆ
へである、されど不斷煩惱得涅槃とあるから
には、娑婆の御縁のつき次第、力なくしてお
はるとき安養淨土へまいらせて頂くのである

たのぢやが、貧乏人から云へば返さずして返
したことになる、今もそれと同じことで、阿
彌陀如來の檀那の方より云へば消滅したまふ
のである、衆生の出入人の手前よりいへば煩
惱を斷せずして斷じたことゝなるのである。

譬諭 貧乏人と檀那

因縁 盛岡の同行

貧乏人が出入の檀那に、今も壹圓復も貳圓
と借りをして幾度も重りて遂に節季になると
如何に工面をしても返すことの出来ぬ大借金
大に心配しておると、親方の檀那が呼んで、
其方が借りて行た金が積り／＼して澤山なる金
高となりたゆへ、とても其方の腕では何年か
／＼つても返済は六ヶ敷かろうと思ふから、來
年からは改めて貸すことゝして、今日までの
處は残らず帳消にしてやると、帳面へ横棒を
引いた、主人の手前からいへば借金を消滅し

陸中の盛岡に一人の篤信なる同行がある、
或年の報恩講に蓮如上人の御文を讀んだ處、
その大坂建立の御文に「あひかまへて／＼こ
の一七ヶ日報恩講の中に於て信心決定ありて
我人一同に往生極樂の本意をどげ玉ふべきも
のなり」との御詞に感激して、七日の間に信
心決定せよと仰せらるゝ上は、信心の決定が
出来るに相違ないと思ひ、日々引續き寺にま
いりて熱心に聽聞をしたけれども少しも分ら

ぬ、ついに御満座の御法筵に列つたが猶わか
らぬ、力を落して家に歸ろうとしたが、それ
でも猶一度尋ねてみようと思ひ、如何にした
ならば信心の決定が出来るであらうかと住職
に尋ねた處、住職の僧が直に「其許は御身が
平生拜讀する所の正信偈に「不斷煩惱得涅槃」
の七字があるのを知らぬか」と申された、こ
れを聞くなり、永の間の心中の闇いのが、ク
ワラリと明るくなりて、餘りのうれしさに我
を忘れて家へ飛びかへりたと申すことである
實に不斷煩惱得涅槃、この七字は大悲の血が
流れてある、洵にこれ弱いもの、杖、愚かな
るものゝ力、罪業深重の私其の生命である。

因縁 西山上人と芋

西山上人、善恵坊の御許へ或同行が二人連

れにて、畑で掘つた土のなりの芋を藁づとに
包み、それを御土産に持てまいり、「さて今日
私共兩人堆參仕りましたは別儀にあらず、
法華經の上には愚痴人中莫説斯經とあつて、
愚かなもの相手に此法説くなどの仰せ、然る
處貴方の御化導では凡夫が正客愚かなもの
が彌陀の本願の御目當ちやと仰せ下されて、
凡夫往生々々々々盛に御勸め下さるゝ、其
凡夫往生とは如何なる相のものでござる」と
御尋申たれば、其時上人の仰せに「凡夫往生
がわからぬか、柳は緑花は紅、今其方達が
持つて来てくれた、畑で掘た土だらけの其芋
を、土も落さず洗ひもせず、藁づとのなりで
くれた方が其まゝゆへ、もらひての方も小言
を云はず、忝なふと受取るが、これが凡夫

往生の御ゆはれぢや」と當意即妙の御答をな
されたので、二人の同行も感じ入つたと云ふ
ことがある。

フチタトウコ 藤田東湖 【人名】

名は彪、字は斌卿、虎之助と稱す、後誠之進と改む、
勤王家なり、安政二年十二月、江戸の震災にて歿す、
年五十、

逸話 藤田東湖の自警

水戸の偉人、藤田東湖、嘗て國事の爲め江
戸小梅邸に幽囚せられたことがある、其幽室
の周圍には板塀の上へ竹にてイト嚴重に忍び
返しなるものが打ちつけてあつた、東湖は朝
な夕なに之を見て、不愉快なる月日を送つて
おりましたが、已にして救命を得て水戸に歸
らるゝに臨み、其忍び返しの竹三尺ばかりな
るもの一本を持ちゆき、常に我が座右に置い

フチタトウコ フチハラフチフサ

て居た、人あやしんで其故を問ひますと、東
湖答へて申しますやう、「さればでござる、此
竹は小梅の忍び返して、予を戒むる大切な竹
である、もし心中に安逸の念生する時は此竹
を見て自ら警めます、此竹を見ると云ふと忽
ち江戸小梅のことを思ひ出し、心中に安逸の
氣のきざすことはござりませぬ、そこで平常
座右の誠めとしてこの竹をおくのである」と
話されたとある、この東湖の如きは本を忘れ
ぬ殊勝の心懸と申さねばなりません。

フチハラフチフサ 藤原藤房 【人名】

後醍醐天皇に仕へ左兵衛檢非違使となる、後、其終る
所を知らず、或は云ふ、僧となり侃山子と號し、諸州
を周遊して土佐に行き船覆りて歿す、

逸話 藤原藤房と關山國師

藤原藤房、關山國師の高徳なることをきゝ

妙心寺を開創せられた時に、入りて参禪す、
關山乃ち本有圓成の公案を見せしむ、一日了
然として投機す、すなはち偈を作つて曰く、

此の心一び了して曾て失せず
人天を利益す盡未來

佛祖の深恩報謝しがたし

何ぞ馬腹と驢胎とに居らむ

と、趨りて開山に呈す、關山問て曰く、この
心何の處にかある、藤房曰く虚空に逼塞す
關山曰く、未審し、何を以てか人天を利益せ
ん、藤房曰く、行て到る水の窮る處、座して
見る雲の起る時、關山曰く佛祖の深恩如何か
報せん、藤房曰く、頭に天を戴き脚に地を踏
む、關山曰く馬腹驢胎何としてか入らざる、
藤房便ち禮拜す、關山呵々大笑して曰く、汝

今日大徹大悟せりと。

フチハラユキナリ

藤原行成

人名

義孝の長子なり、寛和中侍従となり、左兵衛權佐に任
せらる、萬壽三年按察使を兼ね明年薨す、年五十六、

藤原行成の忍徳

藤原行成、或時藤原實方と殿上にて事を論
せしに、實方怒つて行成の冠を打ち落して
中庭へなげすてた、されど行成はすこしも之
に逆はず、徐ろに主殿司を呼びて冠を取ら
せ、守刀の笄をぬいて鬢の亂れたるを繕
ひ、實方に向ふて云はるゝやう、なせにかゝ
る騒がしき振舞をせらるゝのぢや、まづ其故
を承りませうと云ふたので、實方は返す
言葉もなく赤面して座を立たれた、一條天皇
簾を隔て、この有様を御覽なされ、「行成はや

さしきものよ」と譽めたまひて藏人頭に任せ
られ、實方は陸奥の國へ退けられたとある。

まけてのく人を弱しと思ふなよ

智恵の方の強きゆへなり

又、

雨にふし風になびけるなよ竹は

世々に久しきためしならすや

なごの道歌は、行成により實現せられたりと
云ふべしである。

フツオン

佛恩

【衡語】

佛陀の恩徳を云ふ、正像末和讃に「如來大徳の恩徳は
身を粉にしても報すべし」とあり、

歌

月みればちいにもこのそかなしけれ

我身ひとつの秋にはあらねど

月は陰氣のかたまりちやゆへ、見れば心も

フツオン

すみわたり、哀れを催すと歌にも詠する習ち
や、今の歌の心は、秋の月影を見れば、却て
數へてかそね擧られぬ程に物悲しく思はるゝ
己れひとり秋でもないのに、世界中の悲し
さが我身ひとつに集まる様に思はるゝと云ふ
歌の意ちや、今も其如く、阿彌陀如來の御本
願の月、或は如來威徳の相好を拜見すれば、
五劫思惟の本願と云ふも兆載永劫の修行と云
ふも、唯我等一切衆生を助け玉はんが爲めに
本願をたてましくてと、如來の本願は私の
爲めの御苦勞ぞと思へば、ちいにも物こそ悲し
けれ、あら難有き雨山の御恩ぞと思ひ、迷塵
八萬の頂き滄溟三千の濱の眞砂も數へあげら
れぬ程、身にしみんと難有思はるゝ、然る
に我身一人の爲めの本願かと云へば、因願に

は十方衆生成就には諸有衆生と説いて、たつた一人の爲めでもなければ、法界の秋をひとりへ受け、月に向ふて愁ひを催すごとく如来の本願をきいて我身の罪の深きを知り、罪も障も如来にまかせ、唯佛智不思議に助けらるゝことを、自身一人へ引き受けて喜ぶのが信を得た同行のしるしである。

歌

春の田を人にまかせて我はたい花に心をつくす頃かな

春の田の耕作は下女や下男にうちまかせて我身は風流三昧、花に心をつくすと云ふ歌のころ、誓願不思議にたすけられて浄土にまいるべき我身としられたら、往生の一段は何事も他方にまかせまいらせて、我に於ては唯本願を信じ佛恩を仰ぐばかりである。

句 ひとつそりとあとに秋あるおどり哉

七月十五夜の盆踊りに、村の若い娘や息子達が、わい／＼とさはいて踊つておる間は、秋の景色も知らずに居るが、さて踊りもやみて、大勢の人々が我家々々へ歸つた後では、秋の夜のものさびしきことがしれると云ふ句のころ、今なぞらへて頂いてみれば、同行會合の場では、さほどに如来大悲の御恩とも思はねど、我家へ立ちかへりて、つく／＼と思ひ回せば回すほど、阿彌陀如来の御慈悲があればこそ、かゝるものを御助け下さるゝとはあろうことではないと、しみ／＼と御恩が身にこたへて喜ばるゝ。

アツキヨウ

佛教

【術語】

佛陀の説きたまへる教法を云ふ、八萬四千の塵勞に對

して八萬四千の教法あり、

説

一休禪師叡山の晝寢

大徳寺の一休禪師ある夏のこと、比叡山に昇られた、丁度叡山延暦寺では一切經の一年一回の土用干し、所謂虫干しと稱へてこの經文を吹く風を身にうけても功德善根になるといふ心からでもあらう坂本近邊遠くは五里六里の村々から山へ虫干し拜觀に參詣に出かけるのであつた、禪師はこれを見てあゝ今日は一切經の虫干しと見ゆる時に俺の一切經も大分汗をかいたわいと仰せられ經藏の側、大木の影に涼しい風をうけて汗を拭い何分の暑さ故、登山の疲勞で横になつたと思ふ間もなく誠によい氣持で眠りに就かれたのである。處へ叡山の役僧虫干しの掛りでそちこち見ま

わつて居ると何かしらんぐう／＼と音がするその音の方を見ると一人の大入道が木の根を枕に裸體半分で晝寢をして居る、是は怪しからんと傍へよつて見れば外ならぬ大徳寺の和尚故、怒るわけにも行かぬので手軟らかにゆり起して、「禪師晝寢も所と時によりまする一切經の虫干しで近郷近在の人々が參詣するに貴僧がわざとこんな所で裸體になつて晝寢なさるとは近頃怪しからぬ事でござりませぬと、一本きめつけると、禪師は、「紙に書たお經の虫干しに錢をあげて拜んでゆく人があるから俺が是で晝寢したのが悪いといふのか、叡山にはお經は紙にかいたより外はないと見るな、この一休の身體は飯も食へば談話もし法も説けば何でもできる生きた一切經だ、

紙の一切経と活きて働く一切経と、いちららが役に立つのだ、偶々數里の道を登つて来たので、大切なお經に汗をかいたから木の下で虫干しをやつたのだ、何の不都合があらうぞ」と氣焔萬丈、役僧も膽玉を潰した、實に獨り叡山の僧徒のみならず、日本中の佛教僧侶が徒らに經文陀羅尼、紙に刷つたものを讀まないで心に彫りつけた經文を身體で讀んでもらう、ここが出来たなら、どの位、釋尊を初め各宗の祖師方は喜ばれることであらう、またこれが現代佛教の大に要求する所であるのです。

談話 延壽大師と活ける佛教

延壽大師、在俗の時は唐の太宗の治下の某縣の長官として、治蹟甚だ舉り、良二千石の譽は遙かに天關にまで聞ゆる程であつた、或年

非常な天災の爲めに民に菜色あり、餓孚野に滿つると云ふの有様であつた、縣令はこれを見兼て心甚だ憂へ、天朝に奏して民の餓を救はうと思ふたが長安へは餘程の道があるから其許可を乞ふの暇がない、そこで斷然志を決して恣に官の米廩を開き、ありだけの米穀を出して以て民に施し、漸くにして民の苦を救ふことが出来た、斯くの如くの非常手段を取りて民の苦を救ふことは出来たが、一度空虛となりし官廩は之を如何ともすることが出来ぬ、そこへ長安の役人が検査に来たが、廩中一粒の米もないので、其責任者たる縣令は死刑に處せらるゝことゝなつた、元より身をすて、仁をなしたのであるから、何の言譯もせずして死刑の申渡しを受けたが、落ても

枯れても一州の知事のことであるから、この死刑の事が太宗皇帝の耳に入つた、すると皇帝はかねてより良二千石の聞へある彼れが、官廩の米を盗んだことは、どうも受け取れぬ、話ぢや、これには何か深い仔細のあることであらうと云ふので、死刑の役人に云ひつけて彼が刑に就くときに周章狼狽して見ざるしい醜態を演じたならば直に之を斬れ、もし神色自若として死を見ること歸るが如くあつたらば刑を延べて其因て來る所以を検査せよと命せられた、果して刑場に臨みし彼は、談笑平生に異ならず、毫も悔ゆる色がないものであるから、役人は皇帝の御言の如く刑罰を延して米廩の空しくなつた所以を探ると、飢饉を救ふたのであると云ふことが初めてわかり、

終に許されたばかりでなく其處置の宜しき事を賞せられた、後、仕官を辭して出家し、皇帝より延壽大師の號を賜はり、宗鏡錄を著して平生の蘊蓄を傾倒したと云ふことである、これ等を指して、活ける佛教と云ふのである。

談話 大顛禪師と韓退之

韓退之と云へば佛骨の表まで書いて佛教を罵りた排佛家であるが、或時大顛禪師に遇ふて佛説を難じた時、大顛曰く汝は昔の佛圖澄を知るか、韓退之曰くいかにも知つて居ります、そこで大顛重ねて問て曰く、然らば汝も佛圖澄と智徳の點において何れか勝るゝと思ふや、韓退之答て曰く、我れ佛圖澄に及ばず大顛曰く、汝に勝るゝ人にしてすでに佛を信

ず、其徳に及ばざるの汝が佛を罵るは如何と詰問せられたとある。

獅子身中の虫

蓮華面經といふ御經は二卷ありて、如來滅後に惡比丘が出て佛法を破滅する有様を御説きなされた御經ぢや、蓮華面と云ふ外道の事が出てあるゆへに、題號を蓮華面經と名く、この御經の中に獅子身中の蟲の譬が出てある獅子は獸王と申して一切の獸の中の王で、獅子一吼すれば百獸腸を斷つと申して、獅子一たび吼れば、あらゆる獸の腸がちぎれる程に恐れることゆへに、其獅子の死んだ體には外の獸がより付くことが叶はねども、悲しい事には獅子の體から蟲が出て、獅子の體を喰ひ破る、今佛法も威神力の勝れさせられた教

ゆへ、九十五種の外道が競起りても佛法を破する事はならねども、悲しい事には如來の滅後に及ぶと、佛法に衣食し、袈裟衣を着る僧分が邪見放逸なる故に、我が佛法を破する者は外道ではない、我が弟子ちやと御歎きあらせられたが、如來の金言明鏡の如くで、當時此頃に至りては、僧侶の不律不如法、實に言語道斷の有様で、獅子身中の蟲は寺院の中に蠢動しておるが、今日の宗教界の現状である實に慨歎の至りではありませんか。

葉公と龍

支那に葉公と云ふ人があつたが此人は至つて龍が好きで、座敷の飾り、床の置物、着物の模様、何もかも龍づくしでありますから、眞の龍がこれを知つて、あれ程に已れを愛し

てくれるのは有難い、それにおれがいつて遇つたならば非常に喜ぶであらう、平生愛して下された御禮かた／＼一寸御目にかゝらうと、葉公の座敷へニヨッコリ頭を出した、すると葉公は驚いて目をまわして氣絶をしてしまつたと云ふ話がある、それは龍を愛したのでではなく、龍に似た形を愛したので、まことの龍を見て目をまわす様では何にもならぬのちや、世に佛教信者であるとか、眞宗の御門徒であるとか標榜しておりながら、多くは形式に止りて佛陀や祖師の眞精神を知らずに居る人が多いやうに思はれる、殿堂佛教や儀式佛教を滅多矢鱈に難有がりておる連中は、皆この葉公同様なのである。

鏡面王と盲人

昔、鏡面王と大ふ大王が此世の中を治めておられた時、一日、臣下の者に向ひ多くの盲目をつれて來いと云ふことを申付けられた、臣下は王の命を奉じ、早速城内の盲者を招集し、同道にて參殿したるに、王は重ねて臣下に對し、其者共に象を見せてやれと申された、臣下は畏つて、其人達を象廐の前へ案内すると、盲者はいづれも大象の身體をなで、それ／＼に心の中に象の形を想像した、かくて再び大王の前へまいると、王は一人々々に象の形を尋ねられたるに、多くの盲者の中には種々なる答を申すものがあつて、柱の如しと答へるは足を探つたもの、箒の如しと答へるは尾をにぎつたもの、箕の如しと答へるは耳を撫でたものであつたとある、今眞實に佛

法の味ひのわからぬ人々は、多くは此盲目が象を評したのと同じように、自分勝手な解釋を下しておる、地獄極樂は一方の方便にすぎない、此世一生を氣樂にくらしさへすればよいと云ふものもあれば、又佛教は無學文盲なものに入用なので智識のあるものには不必要ぢやと云ふ人もある、又無常と云ふて露の命をもつておる身ぢやからと云ふて、しきりに厭世をつのるものもある、これらはとも佛教の眞理がわからぬ盲目の象をなでると同じことであります。

談話 給孤獨長者

釋尊の御在世に名高い給孤獨と云ふ長者がありまして非常に慈悲深い大財産家でしたが始めて竹林園で佛陀の説法を聞いて大に感じ

釋尊に御尋申すには、「私もドーカ彼尊のやうに家を棄てて欲を棄て、清淨な身になりたいけれど、只今私が出家しますと澤山の人民が忽ち糊口に窮して氣の毒なことになるます、これは如何したものであらうか」と問ひましたれば、其時釋尊は、「汝決して出家するに及ばぬ、能く大慈悲の心で此世の人達を救ふたならば、それが即ち佛教の精神である」と諭しなさいましたが、實にこの御教訓を我れも共に服膺して、佛陀の忠僕となり、國家の爲め社會の爲め、何處までも御用に立ちお役に立つことを心がけたいものです、

世をおさめ民をたすくることゝこそ

やがて御法のまことなりけれ

と中務卿親王の詠せられたのも、つまりこ

の意であらうと思ふ。

闇夜の提燈

客人が暗夜に我家へ歸ろうとした時、宿の主人が氣をきかして提燈を貸してくれた、すると其人がこれは重寶なものでござる、この鳥羽玉の暗夜にも、足元が明るくて、石にも躓かねば溝にも陥らぬ、こんな難有いものはないとて、己れの足元のみをながめて提燈のあかるいのに氣を引かれ、一寸も前へ進まぬ人がある、或はこれさへあれば大丈夫であるとして、我が足元を見ずして只一概に前へと進むことばかりに氣を引かれておるが如き誤りをしておるものがある、これはいづれも提燈の機能を諒解しておらぬものである、宿の主人が親切に提燈を貸したのは足元を明る

くして躓き斃るゝことなく、且つ完全に其人の家へ歸らしたいと望んだからであります、今が丁度其如くで、佛教は世の中の人氣を和げる爲めの教へであつて、云はゞ人道の教へとかはらぬものである、依つて無學のものには必要なれど、教育のあるものには入用にならないと云ふものがある、これは足元を照らすことの中に心をかけて進むことを知らぬのと同じことぢや、又此世はたのみ少なき泡沫の如き處なればどうでもよい、後生が一大事なれば……と云ふて、佛法と世間法とを全く別物にしておるは、足元を見ずして前へと進むことばかりに氣を引かれておるのと同じことである。

ほとけとは何を云ひけむあるごも

しづのおだまきくりかへしみよ
 糸は針に従つて、二尺でも三尺でも四尺でも
 縫ひつながらるものであるがもし其の中途に一
 寸でも結び目があるなら決して通らぬもので
 ある、即ち糸の働きをあらはすことはできぬ
 もし結び目があつたら之をほごいて後に用い
 ねばならぬ、人の心に結び目が澤山あつて人
 生を安らかに行くことができぬ、心の結び目
 をほごくのが解脱、ほごいて見ればほごけ様
 である、この心の結び目は個人に在ては煩悶
 となり、家庭に在ては不和となり、社會に
 在てはあらゆる不法不正衝突となり之の結び
 目が餘り多いと個人も身を亡ぼし、家庭は離
 散、國家社會も滅亡するを免がれぬ。
 一切の結び目が全くほごけ終つた所が本來

の佛、もこの姿に立ち歸つたのである、先哲
 も赤子の心眞情なりと云はれた、赤子とな
 るとは身體を小さくするのでない、心を赤子
 にして何等私なきの心である、煩悶懊惱の結
 び目をよくほごき去れば自然にして毫末も偽
 りを交へざる赤子の心となり得るのである、
 聖書にも赤子天國に行とあるのもこの意味で
 あらうと思はれる。
 歌 世を照らす佛の誓ありければ
 まだ燈火もきわぬなりけり
 佛陀の御教は三世因果の道理をとかせられ
 人の悪を作すことを懲して善をなすやうにす
 らめ、以て世を導き時を救はれるのでありま
 すから世を照すぢや、此の如く世を照すとこ
 ろの佛法があるから、まだ燈火も消へぬなり

けり、夜中に火が消へると眞暗闇となるが、
 佛陀の御教が世にあるからして、末世澆季の
 今日でも、まだ闇黒世界とはならぬこの意味
 ぢや。

同 雨の名もかはりて時雨かな

この句の意は、一年が四季に分れて、春ふ
 る雨を春雨と云ひ、夏ふる雨を五月雨と云ひ
 秋から冬に向ふてふる雨を時雨と云ふ、其時
 々で名はいろいろにかわれども、其體を云
 へば水一色より外にはない、釋迦一代五十年
 法は八萬四千、會は三百餘會、さまざまと御
 説きなされたれども、餘のことはなる、轉迷
 開悟と云ふて、迷を轉じて悟に至らすより外
 事はない、其悟に至る道について、聖道門淨
 土門の二ツと分れ、聖道の御法は時機不相應

淨土の法は時機相應、ケ様にわかれてあれど
 今一步を進めて頂いてみるに「聖道權假の方
 便に衆生ひとしく止りて諸有に流轉の身とぞ
 なる悲願の一乘歸命せよ」とありて、聖道
 一代の教法はこの念佛を聞かそう爲めの方
 便ぢや、悲願とは第十八願、華嚴と云ふも法華
 と云ふも、皆彌彌の本願を聞かそう爲めより
 外はないのである。

佛教お伽はなし
 一名一馬鹿者づくし

昔、馬鹿者があつたとき、餘所の家におよ
 ばれに行つて、御馳走を頂戴した所、すつば
 りとした御馳走で田舎者の口に合はないもの
 だから、水臭い〜と云ふた、そこで主人が

一寸鹽を加味してやつたら、大層馬鹿者の口に叶ふたから、大に感服して、此雪の様に白いものは何でござると尋るから、主人は鹽でござると答へた、馬鹿者は之をきいて思ふた少しでさへこんなに旨いものだから、澤山に食べれば非常に旨いだらうと、こんな考を起したものだから、鹽をつかんでウンと類ばつた處が、辛いやら苦いやらで四苦八苦したと云ふことである「過ぎたるは及ばざるが如し」で、適度と云ふことを知らないこんなことになる、世の中のすべての人は、皆この鹽の經驗を繰返しておるのではないか。

二

昔、馬鹿者があつたとき、禿頭病でも煩らつたものか頭がさらさら光つて毛が一本もな

い、時に一人の悪戯者があつて、藜を以てこの馬鹿者の頭を、一ツ二ツ三ツ四ツ、ぶん殴つてた、き割つたけれど、馬鹿者は平氣な顔をして、あの人は可愛そうな人です、驕慢で馬鹿で、それに力だけがあく迄強いものだから私の頭を石と間違へて、石が強い力が強いかを試してみたものですから、可愛そうなものですと答へた、傍の人あきれかへつて、石と間違へた馬鹿者よりも、石になつた方が餘程馬鹿だと歎息したげな「大愚は訓ゆべからず」で、自ら己れの愚を知らずに人海の波濤の中に飛び込むと、常にこの馬鹿者の如く叩かれ、蹴られ、踏られて、自分は案外其ことを感じない。

三

辟易して飲まない人の一種である。

四

或人が齒抜屋の所へいつて齒を一本抜いてもらはふとして直段を問ふたところが、齒抜屋は一本の抜賃が壹錢だと云ふた、それは高いまける、まからぬと、押問答の末、そんならば二本なら壹錢五厘だと答へた、此男暫く考へて居たが、二本ぬけば五厘の徳がゆくと考へて、抜かねばならぬ齒と、抜く必要のない齒と二本抜いてもらふたと云ふ話がある、一度墮落してより悔ひ改めずに、自暴自棄する人、實務に疎く賢なる人、慾の熊鷹股からさける人等は皆この仲間ではあるまいか。

五

或所に一人の紳士があつた、學問はあり智

昔、大變な馬鹿者があつて道を歩いて居たところ、非常に渴を覺へたものだから、水を飲まうとして印度河へ尋ねて行いた、然るに河岸に立つて汪洋河の如き水を眺いて居る、水を飲まないから傍の人が「なぜ渴しながら水を飲まないか」と尋ねた、處が馬鹿者が答へて曰くさ、「この澤山な水はどうしても飲み盡すことが出来ぬからそれで止めたのだ」と本能と感情、宗教を認めながら、人間の區々たる理性で海の如く深い／＼廣い／＼宗教がわからぬからとて、懷疑し、獨斷し、折角の道に乗てる人は、皆この馬鹿者の一種である又社會の實際に立つて生存競争をすることをせず、希望と事件の多く且つ難きに辟易してなかれ主義に引込む人も、やはり水の多きに

識はあり、其上非常な財産を持つておる、近所の一人の馬鹿者があつて、此智者を自分の兄がくと云ふて居た、所が有爲轉變の世は是非ないもので、彼の紳士は其後不仕合がついて、あちこち借金をこしらへた、そうすると馬鹿者奴、あれは自分の兄でない云ふことを披露してあるく、そこで或人が、「御前は紳士が全盛の時には兄だと云ひながら、今日になつてから兄でない云ふは汚い話でないか」と嘲つた所が、馬鹿もの、云ふには「あの人に財産のあつた時はそれをもらいたさで、兄だといつたけれど、もうあの通り財産のなくなつた以上は、兄と云ふの必要はないのです」と答へた、今の交際社會の人が、皆この馬鹿ものと同じころを持つて居るこ

とが、慨歎に堪へない次第である。

六
昔、或處に一人の國王があつた、初めて皇女を設けて嬉しさに堪へず、一日も早く成長する所を見たいと思ふて侍醫に命じて皇女が一日に成長する妙薬を調合せよとの難題を命ぜられた、侍醫は暫く小首を傾けて居たが、稍あつて、其薬は長い月日かゝつて探して來ねばなりませんから、其間皇女の顔を御覽なされてはなりません」と堅く断つて出發し十二年たつて皇女が十二になつた時に侍醫がひよこりと歸て來て、薬を調合して皇女にませて王の所へつれて來た、王が十二年目に皇女を見て、薬の効目が一時にこんな娘を成長させた喜んで、臣下に命じて其薬を賞

物として保存せしめた云ふ話がある、他人の辛苦の結果成功したのを見て、其辛苦の跡を尋ねず、成功の表だけを見て、我身も一足飛びに成功せうとする思慮の淺き人は、この國王を笑ふことは出来ない。

雜錄 六宗立會の連歌
或人が六宗立會の連歌、秋の季を六句ものせられた、第一が眞言宗、立て句にて、
明王の火焰に似たる紅葉かな
不動明王の火焰の如く紅葉ちやと云ひかけたれば、禪宗がそこへ出て、
そもさんかこれ秋の夕暮
とつけた、そこへ天台が顔出して、
肌寒みかへもなんいざ友よびて
寒むうなつて來た、歸らないかと友達を誘ふ

そこへ淨土宗が顔出して、
西より吹く極樂の風
と云ふと、日蓮宗がまかり出で、
聞くもいや、かの佛めが住み處
と云ふたれば、眞宗がにつこと笑ふて、
そこらが歸命無量壽如來
と云ふた。

フツタ 佛陀 【衛語】
覺者と譯す、自覺覺他、覺行圓滿の三義を具せり、自覺の少分は聲聞にもあり、覺他の少分は菩薩にもあり、覺行圓滿は佛のみなり、

歩 隨フツ流水 水二見ニ溪源一
行到三源 頭一却テ惘然
始レテ悟ル眞源 行不到
一 未倚筇隨處 弄三潺湲
これは宋の朱子の詩である、山を廻り嶽角

を廻り今度が源か今度が源かと尋ねても、
 眞源には容易に到ることが出来ませぬ、しか
 し眞源に遡ることをやめて眼前に流れて居
 る潺湲の響を愛し聞かば、やがて其中に眞源
 の存することを感知することが出来る云ふ
 詩の意である、今信仰を求むる人々も、佛陀
 の存在を證明して、然る後に佛の慈悲を信せ
 んとするよりも、まづ佛の大悲を信すれば、
 佛陀の存在は事實となつて認知せられると思
 ひます。

歌

なに事も空しく夢とさきくものを
 覺めぬ心になげきつるかな

これは續古今集に出ておる歌にして、顯俊
 朝臣が畢竟空寂の意を詠まれたるものであり
 ます、なに事も空しき夢とさきくものをとは畢

竟空寂の意である、〇〇〇〇〇〇〇〇
 謂「未得眞覺一恒處夢中一佛說爲生死長
 夜」とあるのと同じ意なので、實際これは夢
 である云ふことに気がつかぬから魔はれて
 苦しむのと同じ事です、淵と知れば溺れませ
 ぬ、狐と知れば化されませぬ如くで、夢とす
 れば苦しみませぬ筈であるのに、やはり惱み
 苦んでおると云ふのは夢が全く覺めないの
 であろうと云ふ意です、今我等は無明長夜に深
 くねいり、自力迷情の夢を見て魔はれ苦んで
 おるのを、釋尊は御經の聲でゆすり起して下
 されたて今は生死流轉の本源をつなく自力の
 迷情も共發金剛の一念に破れ、無明長夜の闇
 も忽ちはれて、如實に御法義を喜ぶやうにな
 ったのである、ケ様な譯でありますから、佛

を具には、佛陀此に覺者と翻じて、覺者とは
 さためたるひと云ふこと、自覺々他覺行窮
 満で、自らもさとり人をもさとりしめ玉ふの
 であり。

宇治川と琵琶湖

或人宇治川は琵琶湖より流れ出て居ると聞
 いた故、其實地をたしかめん爲め探險に出か
 けた、唯水際に沿ふて進むのであるが、時と
 しては碧潭に行き當りて進路を失ひ、其背石
 の巖石を透ぐり、或は陰々たる竹籜や深林に
 入つて再び水際に出てくる、兎に角水際を離
 れぬやうに進めば大丈夫に琵琶湖に達するつ
 もりであつた、しかし非常なる峻路で、鞋は
 破れる腹はへる、暮色が催する、寒くなる、
 前路は暮靄の中に閉ぢられました、路は僅か

に三分の二を進んだ位である、そこで残念だ
 が終に力つきて琵琶湖に達せずして中途から
 村落に出で京都へ歸つたとある、それゆへ其
 人は湖水と宇治川とが實際に連絡して居るこ
 とを實驗することは出来なかつたのであるが
 併し宇治川の上流には必ず大なる湖水があら
 ねばならぬことを信じました、これは盲目的
 に信じたのではない、そこに確かなる理由が
 あるのである、それは通常の川ならば、三里
 五里と上流に遡るに従つて川はせまくなる
 水は瘦せる、水聲が衰へる、川が浅くなるが
 通常である、然るに此宇治川は上流に上れば
 上る程、水聲甚だ盛んで川は決して小さくな
 らぬ、寧ろ川巾は下流よりも廣く水聲頗る猛
 烈である、そこで其人はこの川の上流には必

す偉大なる湖水あつて、百千年を経ても水の
澗れることのなき一大源泉の存することを信
じたとある。

今我々が佛の存在を信じて居る状態も頗る
是に似て居る、我身は智慧淺く根機拙劣にし
て到底實佛を拜することは出来ぬ、しかし我
心の罪惡に泣く時、闇黒なる時、悲む時、苦
悶する時、一たび佛の慈悲を思へば忽ち歡喜
の浪起り、感謝の水聲進しり、光明來り安
慰起る、我々の心の上になる歡喜安慰の水聲
は、溯れば溯るほど、歡びの水聲進りて
世上一般の喜び事は全く違つておる、世上
の事は遠きものは日々疎しと云ふ風情で、
花を觀た喜びも月を眺めた樂しみも、五年十
年と月日を経れば、歡喜の情は次第に疎くな

る、惡人がこのまゝ佛になることの歡びは
其趣が大に異つて居る、古人は、水邊風
何事も多きには飽くならひにも

もれたるものは山櫻花
と云ふ古歌をひかれて、惡人凡夫がこのまゝ
佛になることばかりは、幾度聞ても飽くこと
なしと申されましたが、この喜びが即ち宇治
川の水聲で、此上流には必ず大慈大悲の佛陀
と云ふ一大源泉の存在するに相違なしと云ふ
ことが信じられます。

フツチ 佛智 【術語】

一切諸佛の智慧を集めたる彌陀の智慧を指して、佛智
と云ふ、大無量壽經に「如來智慧深廣無涯底」とあ
り、
露みちて月のこぼれぬ里もなし
天上の月が水中にやどりて居る有様が、感

應道交と云ふものぢや、選擇集に「念佛の行
に水月を感じて昇降を得る」と御喜びあそば
して、十萬億の彼方にまします大悲の阿彌陀
如來と、今日在座の我々と、ならべくらべは
ならねども、觀經には「諸佛如來はこれ法
界の身なり」一切衆生の心想中に入る」と御
説きなされて、信する心の露にやどりて下さ
るが佛智満入と云ふものぢや。

フツチ 佛地 【術語】

地には能持と出生の二義あり、故に佛智を大地に喻へ
て佛地と云ふ、文類聚鈔に「樹三心ヲ弘誓ノ一ニとあ
り、

醫論 植木

木を植るには其木の性に順ひ、程よく植へ
て、其後は捨ておくやうにせねば根がしつか
りどつかぬ、小供等に植木を植ゑさせると、

もうついたかつかぬかと、時々いろいろみて
り、動かしてみたり、ヒツパツテ見たりする
から、到底土地に根がシツカリトおりて枝葉
が榮へ花が咲き實を結ぶと云ふことはならぬ
のみならず、終には枯れてしまふ、そこで、
「木を植ゆること捨つるが如くせよ」と云ふ
のぢや、今も心の樹木を弘誓の佛地に植ゆる
に間違はさぬ、助くるぞこの本願にシツカリ
いけこんでおけば深信金剛の根がはわる、彼
の自力疑心の小供のやうに、助かるうか助か
るまいか、まいられふかまいられまいかと、
若存若亡と氣遣ふてみたり計らふて見たり
すると、眞實信の花や眞實證の實を得ること
の出來ざるのみならず、遂には千中無一と枯
れてしまふ。

問 朝顔や大地をほうをあぶながら「足實地を踏む」と云ふて、大地をある程な丈夫な事はないのに、朝顔は其大地をあぶながらひよろしくしておると云ふことで、今我々も、心樹弘誓佛地とあるのに、我機さまを詠めて、コウ思ふたらよかろうか、ア、心得たらよかろうかと計ふてばかりおるのは、弘誓の佛地を危がりておるのである。

フツボニイツタイ

佛凡一體

佛心とは如来の大悲心なり、凡心とは凡夫の迷心なり、如来の大悲心が凡夫の迷心に徹したる信心なるが故に信心決定を指して佛凡一體と云ふ、

炭と火

炭と火の喩を以て佛凡一體の御ゆはれを領解せられよ、炭とは衆生なり、火とは佛心なり、火の物を焼くは願行成就、火の炭につ

くは廻向成就、但し濕りし炭にはつかぬなり（無宿善）火よりいへばつくなり（廻向）炭よりいへば受くるなり（信順）炭と火と二物なし（佛凡一體）、炭の名混びてたゞ火と呼ぶ（信心）以上の比喩を以て佛凡一體と云ふことをよく味ふべし。

磨尼珠

磨尼珠の喩と云ふが論註の中に出てある、磨尼珠の濁水に投れば忽ち清水となるが如し疑を濁り水に御喩へ、濁り水をすましたいと思ふて、なぶればなぶるほど、いよく濁りが逆立つばかり、ごうして見ても清まぬ、濁り水の中へ磨尼珠を捨てこめば、忽ち清水となる、濁り水の澄んだのと、投げこむ玉と相たは二ツなれども、澄むは水、澄ましたは

實の徳、全く一ツ凡夫の胸の内の疑ひを濁り水に御喩へ、其疑の濁りが澄したひと思ひ、なぶればなぶる程、逆立つものに迷ひ、いつまで心なぶりても、役にはたゝぬ、モウ今日は疑ふまい、いよくこの様なりで御助けとさばるやつぐるみが疑の心、ごうして見ても晴れの疑ふ胸へ南無阿彌陀佛の磨尼珠の玉を善知識の御教化で耳より心へ投げこんで下さるなり、はれるはれぬの世話いらす、疑ひなく助け玉へとたのむ思ひが起る、これ聞へた六字の玉の、助け玉への信心と、相たは二ツなれども全く一ツ、

南無阿彌陀佛、「一流安心の體と云ふ事南無阿彌陀佛の六字の相たなりと知るべし」と仰せられた處ぢや。

フツミヤウエ 佛名會

淳和天皇の時代より、宮中に於て三千佛名會を行はる

歌 一年のはかなき夢やさめぬらむ

三世の佛の鐘の響に

これは太政大臣藤原良經公の歌にして、其意は一年は夢の様に暮して、何とも譯がわからずに送つて仕舞つたが、今此佛名會の鐘の響で、夢幻で犯した罪も迷ひの夢もさめると云ふ意である、この佛名會と云ふは淳和天皇の天長七年十二月、即ち明治四十二年より千八十年前の十二月、始めて宮中に於て三千佛名會と云ふが行はれた、これは、一年中に

造つた罪過を十二月の末に至つて、過去の千佛現在の千佛未來の千佛、これを三世の諸佛と云ふ、其三世の佛の御名前を一人唱ひては一拜づゝ御拜をして自分の罪過を懺悔すると云ふ式である、今年中犯した罪過は今日唯今三世諸佛の前に於て残らず懺悔いたしますと云ふて懺悔して、罪過に汚れて居る體を、清淨にして目出度き新年を迎へると云ふわけである、それより畏くも天皇陛下より天下第一に勅令あつて百官百僚は申すに及ばず、下庶民にいたるまで皆佛名を稱へて懺悔致せよとの仰せがあつた、ケ様な有様で五六百年と云ふものは、上朝廷におかせられても下民間に於ても、必ず佛名會と云ふものを行つて一年中の罪過を懺悔するといふことになつて居た

ので、この歌も即ち其佛名會を詠じたものである。

歌

年中に積みたる罪はかきくらし
降る白雪と共に消けな

これは紀貫之が佛名會を詠じた歌である、頃は十二月であるから雪が降る、其雪も春になれば自然と消けて仕舞う、丁度佛名會も其如く今一年中の罪過も、この佛名會で懺悔すれば、白雪と共に消けてしまふと云ふ意である。

フドウ

婦道 世語

家政を料理し、子女を教養し、常に和順なるを云ふ、

段

玉耶姫の悔悟

印度に給孤長者と云ふ富豪がありた、此長者が我子の爲めに玉耶姫と云ふ美人を嫁にも

らいました、所がこの玉耶姫は自分の容姿のよいのを鼻にかけて自慢心を起し、兩親に對し夫に對し、少しも婦人らしき仕を爲しませなんだ、娶りた方の給孤長者の家は誠に案外で、兩親も非常に心配し、種々に相談しました、幾等云ふても聞かしても馬の耳に風で少しもきゝ入れぬものゆへ、此上は釋尊を御迎へ申して花嫁玉耶に教誡してもらふより外はないと云ふことになりました、そこで長者は早速釋尊のもとへまいり、委細を具さに申上りましたら、釋尊は快く御承諾下されたから其翌日に御迎へ申すことに決しました、扱翌日になると、釋尊は千二百五十人の御弟子を從へ長者の宅へ御來臨になりた、家内中はいづれも門前まで御出迎へ申上たれど、肝心の

嬌慢婦人の玉耶のみは奥座敷の隅にかくれて出てまいらぬすると、釋尊は神通を以て長者の家をば瑠璃水精の色に變じてしまわれたれば、家の中が隅から隅まで透りて見へ出したこうなる玉耶も身を隠すべき所がない、目前に釋尊の三十二相八十種好の御姿を拜み奉り恐れ入りてすぐに釋尊の御前へ出てまいりました、そこで釋尊は、この玉耶に向ふて徐ろに御話を始められた、玉耶よく聞けよ、すべて婦人の容姿のよいと申すは、顔や容よりは、心の中の垢の取れたことを云ふのである聞けば其方はその邊の事につき大に心得違ひをしておる様である」とて、兩親や夫に仕へるには、五善三惡と云ふことがあるといふこと、及び世間多くの婦人達を見渡すに七通り

の質があるとして七婦の説明を御懇ろになされ
 言を改めて仰せらるゝやう、玉耶そなたはこ
 の七通りの婦人の中でいづれの婦人になりた
 いと思ふか」と仰せられた、玉耶は厳しき御
 教誡を蒙りて、中心より悔悟し、「妾は愚かに
 して今日まで非常な心得違ひをしておりました
 たゆへ、今日よりはキツト心を入れ替へ、婢
 婦の道を守り申して、両親や夫へ仕へませう
 と御誓を致しました、釋尊は大に御満足なさ
 れて、人間は誰ぞで過ちのないものはない、
 過ちて改めるといふことは此上もなる事
 あるで、これから其氣になりて婦人の道を守
 れよと仰せになり、玉耶姫に對して十戒を御
 授けになりました、給孤長者の家内中は大喜
 び、生れかわりたやうな花嫁が出来て、目出

度一家の治りがつきました、これが玉耶經の
 大綱であります。
 談叢 かご女の孝貞兩全
 備後國比和村に岩見かごと云ふ老女があり
 ます、今年五十歳でござりますが二十年程前
 に夫に死に別れてから、操正しく、日常の行
 ひも世人の模範となること多く殊に八十餘歳
 の姑に事へ、孝養怠ることなく、春は野山
 に伴ふて其心を樂ましめ、家は貧困にして僅
 かに豆腐を商ふて糊口をしのご程であるのに
 平生は能く勤儉を守り少しも冗費を用ゐず、
 わづかなりとも之を貯蓄して公用に供せんと
 し、赤十字社の正員に加入して居らるゝ、夫
 に貞操を立つるのでさへ賞すべきことであり
 まするのに、其上姑に孝養をつくさるゝこ

とは、玉耶經に所謂、

名く所生の家を離れて夫の家を家とし、
 夫と異體同心の人となりて、夫の父母に
 事ふること所生の父母に事ふるが如く、
 尊み崇め慎み敬ひ、憍慢の心なく能く家
 事を治め能く賓客に接して家道を豊かに
 し家名を揚ぐる、これ嫁たるの道となす
 と云ふに適當し、理想の婦人と云ふてもよい
 のであります、比和村と云ふのは、鐵道から
 二三十里も山奥でござりまするのに、此孝貞
 兩全の婦人をみるとは、喜ばしいことであり
 ます。

談叢 かご女の貞節

紀州新宮町に須川熊藏と云ふ人がある、そ
 の女房のよと云ふのは今から十二年程前に

この熊藏に嫁したので、嫁して間もなく夫は
 骨髄炎と云ふ病氣にかゝりて起臥も不自由と
 なり、何事も出来なくなりたを、まだ若い身
 で厭ひもせず、大小便の世話までして少しも
 怠ることなく、もとよりありあまる身代でも
 なきゆへ、働きの夫が病氣であるあら、其
 日の生計にも苦みむやうになりたのであるが
 賃仕事から洗濯まで近所のを引きうけて、晝
 は身を粉にして働らき、夜は夫の看護にすこ
 しもまごろまぬ時さへある程で、今年三十四
 になるまで、十有餘年一日の如くにつくし、
 貧しき中から長女ふくと云へるを學校に入れ
 て、自分の食ふべき一飯を減じても子供の教
 育を怠らず、家庭教育を嚴にし、家は代々眞
 宗の信徒なるを以て、佛事法要を怠らず、朝

は早く起きて佛前に禮拜して我が一日の仕事に過りなからんことを期し、身をも心をも正しくし、人の離縁を勸むるものあることも、縁ありて一旦夫と定めし人の、如何に病み玉ふともそれを見棄るは女の道にあらず、殊に我れ今去らば誰とてこの不自由なる夫の世話をなすものあらんやと、女一人の手にて、生計の事から夫の看護子の教育、少しも滞りなくせられて居るとの事です、感心な御人ではありませんか。

談叢 烈婦栗女

烈婦栗女は甲斐國田中村農夫の女である、幼にして孤、村長某の家にて育られました村長其人となりを愛し、資装を興へて同村安兵衛なる者に嫁しました、其後、安兵衛が悪

疾にかゝりて臥したが、栗女は之につかへて十二分の介抱をなし、晝は夫に代つて田を耕し夜は歸りて之を扶助し、其間には糸を績ぎて金を儲け、細き烟を立て、居りました、男六右衛門と云ふは七十歳を過ぎてまだ達者でありますゆへ、此れにも孝行を盡くしましたので、一村の人々皆嘆賞せぬものはなかつたのである、夫疾んで事を事こせず、舅毫いて家衰ふ中にありて、毫も水臭き心を起さず婦道を全ふじたるは、孝にして且つ義ありと云ふべしである。

享保十三年戊申七月八日、洪水の爲めに全村押し流されんとするに悲境に迫る、栗女は舅の着物や地券證等の大切なる品々を油紙に包みて舅に持たせて危難を避けしめ、自分は

疾める夫と共に水に溺れて死なうと覺悟した夫の云ふやう、汝疾く避けよ、汝我を醜とせず、湯薬の煩ひ扶助の勤め心に銘じて忘れず汝年若し、幸に生を全ふじて家を滅するなかれ、これ望む所なり、我れ悪疾に窘む、餘喘惜む所なし、命旦夕にあり、水に死せば即ち幸なり、汝即ち避けよと、栗女泣いて云ふ相親むこと數年、難に臨んで之を棄つるは不祥なりと、遂に溺れて死を同ふしたとある、これは五井蘭洲と申す人の烈女傳の中に出て居る實話であります。

談叢 ヒーコンスヒルド侯

有名なる英國保守黨の首領ヒーコンスヒルド侯が國會議場に於て演説せらるゝ時には、いつも夫人は傍聽席にあつて夫の成功を祈り

つ、謹聽して居られたとある、或日の事ヒ侯は極めて重大なる問題を提出し是非とも議會を通過せしめよう云ふので、十二分に思考を費やして、演説の腹案をつくり、時刻が來るに馬車に乗りましたが猶も默考の體であつた、夫人も同乗せんとして窓に手をかけて乗らんとせしに、急に窓の障子落ち來つて指を壓したものですから、夫人は痛くて／＼たまらねども、もし痛しと叫ばい良人の思考を亂すであらうから、暫く忍んで居ろうと思ひ定め、毫もかはれる氣色も見せず、我慢をして居られました、兎角する中に議院の門前に到着したゆへ、夫人の靜に障子をひらき、すりむけたる指を押し隠して、快く笑みを含んで傍聽席に入りました、既にして其夕刻ビ

侯は壯快鋭利なる演説をなして反對黨を駁倒し見事大勝利を得て、満面喜色を帯びて夫人と共に歸邸の途に就けるが、その途中で始めて夫人は指を窓の障子で壓せられて、大に苦しかつたと云ふことを話されたところ、人の妻たるもの萬事についてこれ位の注意を拂へば夫も後顧の憂ひなく活潑な運動をすることが出来るでせう、船で云はれば船長妻は機關士のやうなものでありますから、船長の夫と機關士の妻とが心を合はせて、内と外とに働けば、世の荒波を渡つて行くことが出来るのである。

談議 李京讓の母

唐に李京讓と云ふ人がありましたが、此人の母は鄭氏と申しまして早く夫に別れ自分の

かゝる賢母でありましたから、李京讓も其徳に感化せられて、後には榮達の人となりたのであります。

談議 狭手彦と佐用姫

大伴狭手彦と云ふ偉い大將が居まして天皇陛下の詔を受けて朝鮮を征伐に行きました此頃は朝鮮に通ふには肥前國松浦郡唐津といふ所から出發するのが定りでありましたから狭手彦も用意の出来るまで暫くここに逗留して居ました、さて船の用意も出来、戦争の準備も整ひましたから、いよいよ出帆すること云ふ時になりました、此狭手彦の夫人は松浦佐用姫と申しましたが、今度の別れがどうも心細くて悲しくて堪りませぬ、併し天皇の詔を受けて戦争に行く人を留むることは出来ま

手一ツにて幼き子を養育し、行儀は勿論の事、學問をもさせまして一日も怠りた事はありませなんだ、或時其家の後の垣根が壊れまして行て見る所が餘程土がめいりております、不審に思ふて土かきよけて、見ました處が、コハソモ如何に、錢が澤山出ました、すると鄭氏は此錢には少しも目にかけて、天に向つて告で申しますには、「我は苦勞せずして得る所の財實は身の災であると思ひますから、私は一文も此錢を受くる事は出来ませぬ、併し天道様がもし我が貧窮を憫み玉ふならば、何卒小供の學問を成就して家を起すやうに守り玉ふべし、我と骨折りてもふけ得ざる財を望みも侍らす」と、復た元の如く土をかけて覆ふておいたと云ふ事でありませぬ、

せぬ、いよいよ其翌日になりました兵隊ども、舟に乗り込みます、狭手彦も舟に乗り込まれました、佐用姫は悲しくて堪りませぬけれども人の前だから涙を出さないで我慢して居られます、舟は出ました、エッサ／＼と漕ぐに従ふて次第に遠くなり、モウ岸からは見えなくなりました、姫は今我慢が出来なくなつて、後ろの山にかけ昇つて遙かに漕ぎゆく夫の船をながめやり、今の着物の袖みたやうな領巾と云ふ着物をふつて、船よ／＼と叫びましたが、とても聲は届きませんし、後には船の影も見へなくなりました、姫はあまり悲んだ爲めにさう／＼泣き倒れて死んでしまいました、狭手彦は見事に軍に打ち勝つて無事に凱旋しましたので、姫は誠におしい命

を失ひました、今に唐津の田島と云ふ處に望
夫石といふ石があります、これは佐用姫が
死んで石になつたものだ云ふことです又其
領巾を振つたと云ふ山は、今も領巾振山とい
つて唐津の海邊にあります、彼の名高き朝顔
日記の淨瑠璃に、
夫の跡を戀慕ひ、石に成りたる松浦瀧、
領巾振山の悲みも身に比べては數ならず
とあるはこの事なのである。

談叢 夜寒酒

阪田村阿留なる者容貌醜惡なりしも縁あり
て長須賀の農夫善八に嫁せり、八年にして一
女を生む、よく夫に事へ舅姑に孝なり、舅
善兵衛性急短慮、飲酒度なく、屢々阿留を打
擲するも、毫も怒らず恨みず、朝夕孝養を盡

す、而も其家貧なるを以て厚く舅姑に奉ず
る能はざるを患へ、終には衣を賣り、櫛笄
を鬻ぎ、之を以て日々酒を買ひて舅善兵衛に
すゝめ、其悦べる顔色を見て、己れも愁の眉
を解ぬ、既にして善兵衛老い、起居心に任せ
ず、二便亦時を分たず、されど阿留之がため
に苦い顔もせず、看護至らざる所なし、一日
口ずさみていふ、
寒さにや夜毎に酒をすゝめたし
さしもの舅も之を聞いて其孝心に感泣せりと
云ふ、當世のハイカラ式部、少しく身の樂と
すべきである。

談叢 清水東軒の母

清水東軒と云ふ人は二人の幼き子を遺して
死にました、其細君を駒井氏といつて、子を

育てながら家計を立て、まいりましたが、實
に感すべきことがあります、人がまだ年が若
いから、いつそ他へ嫁いたらよかろうと頻り
にすゝめますれど、それを聞きませんで、私
はこの子を大切に育て、亡き良人の家を繼が
するが何より樂みであります、貞操正しく
云ひきつて、唯々其子の教育にのみ力を用ゐ
ました、其教育の仕方は如何かと申します
と、世間の婦人とは差ひます、世間の婦人は
良人でも死くなると切りと其子を可愛がり甘
へかして其子の言ふなりに何んでもしてやり
ます、之が猫可愛がりと言て、子の將來に取
つて甚だ可くない事でありませぬ……之を知
つて東軒の女房は決して、そんな事は致し
ませんで、二人の子を二階へ上げ、毎日、本

を讀せました、兄の方には何十枚、弟の方に
は何枚とちやんと定めて置きました、其れを
讀むのを母親は二階の下で針仕事や洗濯しな
がら聞いて居つて、若しも誤讀つた所があり
ますと、オイそれは誤讀つて居る斯う讀まん
ければならぬとか彼う讀まんければ不可いと
か言つて教へてやりますが例であります、子
供は遊ぶ方が面白いから始めはなかく親の
言ふことを聞きませんでした、それがそこが
習ふより慣れよと言つて、だん／＼慣れて來
まして其れが習慣となつて能く讀みます、其
の讀む時には二階の梯子を外して子供が降ら
れぬやうにして、定めた紙數を讀み終りし後
に亦初のやうに梯子を掛けて子供を降しませぬ、
降りてから子供は自分々々の運動もし遊びも

致します、その遊ぶにも悪戯なぞをした時は
容赦なく膝近く呼寄せて能く了解るやうに言
ひ聴かせ亦少しでも善きことがあつた時は、
それを褒め嘸しやりまして、只管子の善に向
くやうに勵みの付くやうに心を用ゐられまし
たに因つて二人の子供も、成長して偉い人と
なり名を世間へ擧げ人々より尊敬せられまし
に。

工夫の妻

或製造會社に於て其工場に非常に大なる烟
突を作り、いよく落成して足場をこごとく
く取り拂ひ、多くの工夫は既に立ちかへつた
然るに如何なることにや一人の工夫は烟突の
頂上にあつて足場を拂はれ、而も最後に縋り
下るべき綱まで取り去られければ、此工夫は

狼狽して轉び落るか飛び下りる外其術なく危
機一髪の場合となつた、時にたま／＼下に遊
べる小兒、其由を告げたので、妻は大に驚き
急いで其場につけ、大聲をあげて夫につ
げて云ふやう「御身は靴足袋をぬいで其毛糸
をほぐし、其先にせめんこの小片を付けこれ
で下げてください」と云ふたので、夫はヤ、
安心して其如くした、糸が地に垂れると云ふ
と、妻は其端に細繩を結びつけ、上より之を
引きあげたるとき、再び其端に太き綱を結び
つけたれば、夫は其綱を得たので、これを烟
突の先に結びつけ無事に下ることを得たこと
る、なんと妻の考は能く其機智をめぐらし
て其救濟法を案出したものではありませんか
秋胡子の失望

支那の秋胡子と云ふ人は、妻を娶りて五日
目に陳の國へ仕官を致しまして、五年を経て
國許へかへりました、其途中で美人が桑を採
つておるのを見まして車を下りて云ふやう、
「我れは黄金を澤山に持つて居るから、之を
貴婦に上げますので、我れの妻になつて下さ
い」と云ふと、彼の女は「私は田を耕すやら
蠶をかふやら、仕事させわしく、其上に舅姑
に事へねばなりませんから、他人の黄金はい
りませぬ」と、言ひ放ち怒つて顧みませぬ、
秋胡子は致方なく慚ちて家に歸りましたが、
母は歎んで之を迎へいろ／＼の話をなした未
其妻を呼びましたので、フト妻の顔を見るこ
云ふと、先刻桑を採つて居た美人が自分の妻
であつた、妻の云ふやう「美しき婦人を見て

黄金をすて、其親を忘るは大不孝である、私
は左様なる不孝な人は夫とする事を快と致し
ませぬ」と云ふて去つて仕舞ふたのである。
斷乎たる決心
矢崎正子と云ふは美濃國芝原郷の人で、十
六歳の時大井氏に嫁せられたが、其夫には忍
び妻あつて情愛元の如くならなだったので、一
女あるにもかゝらず、十九歳の時、
世の中は飛鳥の川と聞きしかど
身のうき瀬こそかはらざりけり
と咏じ一女と共に郷里に歸つたのである、そ
れより京都に上り、小澤蘆庵翁について、歌
や書の道を學び、其外茶香より長刀の伎まで
おさめ、程經て郷里に下られた、然るに以前
の夫、昔の語らひ忘れ難くありましたか、文

など送りて靡かせんと試みましたが、正子は秋にあひて枯にしものを今さらに何おどろかす萩のうはかせと咏じて、後には返事をもせなんだとある、この正子の如きは男子の不品行を憤り、斯くの如き有様にては、とても圓滿なる家庭の幸福を享受する望みがないからと云ふので、断然たる決心を固め、生涯これを實行せられたので、デ、ビー氏の所謂「女子を教育して男子爲めに己れの無學を耻づるに至らしめよさらば無智無學は世より其跡をたゝん」と云はれたのは、此等の事實を指したものであらう。

談叢 女性の欠點

トルストイ曰く、女は恰も噛み付き犬の様

なもので、希望通りに美肉を興へておけば尾を掉つて喜んでおるか、もし興へざる時は直に噛み付いて、手も爪にも乗らぬものだ。或人曰く、女は床置のやうなもので、男子がそれに美麗なる衣服を興へるのは、ただ我が目を娛ましめる爲めである、即ち一種の美術品玩弄品として扱ふて居るのである。或人曰く、世に女はど手におへぬものはない、可愛がれば調子に乗つてつけ上る、叱れば憤る、擲ぐれば泣く、殺して仕舞へば幽霊になつて迷つて来るはてさて困つたものである。

以上は女性の暗黒面を云ふたものであるから、修養に志す婦人は他山の石として大に内観省察の資料に供せねばなりません。

談叢 貞婦お竹

寛政十年戊午八月、關東郡代中川飛彈守同勘定與頭金澤瀬兵衛と共に南總を巡視し、一日望陀郡久須間村里正十郎右衛門の宅に宿しました、たま／＼深夜織機の音を耳にして大に怪しみ十郎右衛門に問ふた、すると十郎右衛門答ふるやう、隣家の農夫利八なる者あり、其家貧にして悪疾を患へ、面色紫の如く崩れ醜たさふるに物なき有様、妻お竹嫁して七八年になるが、一子午之助を挙げ婦道甚だ力め、居常夫利八の悪疾を治せんとして、車前草を採りて之を薬餌としますれど其効があまりませぬ、お竹ます／＼憂愁し看護怠らず、晝は傍ら幼児を撫育し、夜は機を織りて倦まず、心を竭すこと多年一日の如くであります

一日、利八妻を喚びて云ふやう、我が悪疾は天なり命なり、到底治療は出来ない、其方は未だ三十に満たず、宜しく我をすて、他に嫁せよと、お竹之を聽きて啼泣して云ふやう、良人何ぞ妾を棄てたまふことの甚しきや、妾無智にして一の取るべきなきも、貞婦兩夫に見へずの語だけは、能く惱裡に印して記憶しておきます、もし妾に悪疾ありて君我をすてたまへば我は恨みます、良人も亦そうでありませうと、眞實面にあらはれて申ますと、利八も其貞節に感じ入り、感涙の滂沱たるを禁ずる能はず、手を合はして喜んだとある、そうして云ふやう、我汝の介抱を受けて死せば大葬を得ずとも地下の榮之に過ぎずと、卿黨傳へ聞いて其貞節を稱しておりますと、中

川金澤の兩氏之をき、て感歎膝の進むを覺へず、編戸の民猶斯の如きものあるかどて翌朝早々小吏をして利八の家を窺はしめました。果して十郎右衛門の言の如くであつた、此に於て兩氏おのゝ和歌を詠じ療養金千二百疋をお竹に賜ふた、詠に曰く、

人も見よ人にも見せよ朝夕に

かゝる心の鏡てらして

みだるなよ操をたてし賤はたは

錦にまさる麻の狭衣

かくて兩氏は久須磨を去り木更津に向ひました。貞節お竹、わざ／＼旅館を訪ひ手織の木綿を献じて恩を謝した、飛騨守ます／＼感じ入り、過分の贈物實に錦をもろうたよりも難有い、予が肌につけて日夜其許の行ひを

傲ひたい」と云はれたとある、實に美はしき話ではありませんか。

成田喜起の家

成田喜起と云ふ侍がありました、其御母様は早く良人に死別れて寡婦生活して居ました。其子を教ゆる事にはなかく注意したもので、何でも其子の氣を挫かさぬやう引起すやうに／＼と常々育て教へたのです。所が、その御母様は非常に雷を怖がり雷の鳴るのを厭がって雷さへ鳴れば蒲團被つて直ぐ寝て仕舞ふと云ふ風でしたが、或時つく／＼思ひますのに、己が斯く卑怯の仕振りをする自然と子も其の眞似して卑怯となるかも知れんとて、飄然、心を改めて、之より雷の鳴るとき、ごろ／＼と鳴り破せるときは驚

端に出で端直と坐り少も怖いやうな姿は見せません。大人でさへ怖がるものですか。子供の怖がるは尤で其子の喜起がアレ怖い御母様、雷が鳴ると云ふを母は否へ怖くない、雷なんか怖いものです。御母様を御覽、こう端坐として觀て居るではありません。此の時、一般世間は太平に慣れて士族の風儀大に弊れ若い侍達は自分の本職の武藝學問はそつちのけで、三味線稽古や、淨瑠璃、義太夫などに現を抜かして居りました。が、喜起の御母様は之を、大層、慨いて我子も此の悪風に染らんことを恐れ劍術の達人に就かせて稽古をさせ、亦立派な學者の許へ通はして學問を勵まし以て身を遊藝に委ぬるに餘地なからしむると同時に文武兩道は車の兩

輪の如く鳥の兩翼の如く一を廢しても完全には云へませんから、斯く兩つ揃へて稽古させたのです。何んぞ寡婦女では感心ではありませんが、寡婦女の例を觀ると、大抵男を拵へたり、不義の道を行つたり或は他へ嫁て貞操を破つたりして居るものも少くはありません。増して子供の教育と來ては全で零です。所が喜起の母は早い頃より良人に別れ、人の他へ嫁けと勸むるも、「貞婦二夫に見えず」と固く取つて動かばこそ、唯だ杖も柱も子の成長するのを待つて居りました。喜起は幼くして家督相續したと云ふもの、扶持は減りて家は次第／＼と貧窮になりし折柄、殿様より江戸奉公を仰附けられたのです。所が江戸へ行く旅費がありませんで、何しよう斯しよう

と一人思案に暮れて居りますと、母は之を見
て屹と容貌を正しくし、お前の家は代々殿様の
御恩を受けて居られて、今、仰を受くることは
これ御恩返しをする折で最も大切な場合、そ
れを何して旅費がないとて、ぐすくして居
られませうと、云ふより早く自分の着物や帯
簪など賣拂ひ仕度調へて目出度江戸へ出立
させたと申されます、後ち、喜起も能く御奉
公して殿様より褒られ日増しに立身して善き
役となられたのです、之と云ふも母のいろ
くど丹精して教へ育てた花が今咲いたので
すから、世の母たるものは何卒此の母に負け
ぬやう子を育てられんことを望みます。

談書 千種有功と時鳥の歌「チクサアリコト」
の下をみよ。

歌 わがせこはものな思ひそことしあらば
火にも水にもわれなけなくに
これは安部郎女の詠じたる歌である、其意
は、わが夫にはゆめゆめ心遣ひし給ふなよ、
たとひ火に入り水に入るほどなことはあつて
も、自分のある限りは、夫に心配さする様な
ことはないと云ふのである、古の教にも三
従の道と云ふことがあつて、女は父母の家に
あれば父母に従ひ、夫の家にあれば夫に従ひ
夫死せば子に従ふと云ふのである、女は凡て
我儘に何事もせないで、必ず人に従つてせな
ければならぬ、夫故に舅や夫に事へては、衣
服と住居とを清潔にし食物食物を見計ひ、内
を治めて家をよく保つのが、何よりの務であ
ると云ふことを忘れず、又決して誇り顔や物

知り顔をしたり、或は舅や夫を凌ひて物事を
我儘に振り舞ふことなく、何事によらず控目
にするのが、第一の心得である。
夫から始終念頭に置いて、忘ることのならない
のは、自分が一家の内務と大藏と文部との職
を兼ねて居ると云ふことである、即ち家庭の
整理を掌り、婢僕の指揮に至るまで、監督せ
ねばならぬと云ふ内務の職と、又一家の經濟
に就ても、出入の金高を見計ひ、夫に内顧の
憂なきようにすると云ふ大藏の職と、又子女
の養育に就ても、注意細心、家庭の教育に勉
めねばならぬと云ふ文部の職と、此三職を兼
ねて居るから、自分の任務は非常に重ひと
いふことを忘れてはならぬ。

句 浮草や今日はむかうの岸に咲く

これは貞節なき婦人の有様を詠じたもので
ある、香山院講師の「守節婦道訓」に、
二人の妾をもちたる人あり、人ありて夫
を、試に落さんと、仲人をたのみて二人
へ同時に艶文を遣はしければ、一人は如
何にしても従はず、其後に其夫身まかり
たり、後其時の仲人妻にとりもたんと云
ひしかば、然らば其従はざりし婦人を妻
にせんと云ふ、仲人いぶかりて「彼は御
身をきらひしもの、是迄御身に從ひしも
のを何とてもらひ給はざるや」と云ひけ
れば、其答に「その従はざるものこそ我
はほしけれ、彼の我に従ひしものは我が
妻とならば、遠からず他の人に従ふべし
といへりとなん、げにことはりなる事な

り。書いてあります、少し心ある男子であつたならば、貞操なき婦人は尤も卑しみます。

可愛らし、かられぶりのよい女房

御客のありた時に酒の爛があつすぎるか、湯豆腐がかたふなると、御客の前で亭主に呵かられると、一言の口答へもせずと、しほくとして立つて行くと、ア、おとなしい妻君ちや、女の道を守るよい女房ちやと、客が心でほめてかいる、それが亭主に呵かられると、直に口返答して、「私ちやとて千手観音ちやあるまいし、八人藝をしますと云ふて来た身ぢやなし、一人で何もかもするもの、時にはやりそこなひも當り前ぢや」と、ぶり／＼して唐紙や障子を荒くしめて立つてゆくと、

御客の胸の中にギツクリして、御馳走になる気がせぬ、これぢやで人と云ふものは萬事に氣をつけねばなりません。

軍人の家庭

明治三十七八年戦役の當時某大尉の妻、出征中の夫へ小包を贈る時に、左の歌をかい入れておかれた、

ゆるしませ襟にかゝれるしみのあと
思ひ亂れし涙なりけり

大尉は戦地にありて、最愛の妻よりの贈物をうけ、且つ情をこめたる歌をみて、一種の感に打たれ暗涙にむせばれた、而して左の如く返歌を認められた。
肌をさす寒さもいかに徹るべき
君がなきけのあたゝかきあと

夫婦の情愛はこの二首の歌に溢れておるではありませんか。

洗ひ髪

或處に至つて仲のよい夫婦があつて、共に敷島の道に心がけあつく、輿に乗すると云ふと、互に和歌を詠して楽しんで居た、世に同じ處に興味を感じて居る夫婦程愉快なことはない、或時、細君が髪を洗つたので、いつも顔の上へ髪が亂れかゝつてならぬ、そこで主人が、

またしても顔にちらかる洗ひ髪
と云ふと、細君は、

我が物なればうるさくもなし
と答へた。

婦人は櫛木に纏へる葛の如し

これは米國の文學者アービング氏の語であります、この意は天氣も長閑に風も静かな時には左に吹かれ右にゆられ大木に支へられて生長するのが葛でありまするがさて俄かに暴風に沙を捲きちられ天は眞闇になるし、雷は鳴り出す雨は降り出す、山は崩れ石は飛ぶと云ふやうな大變になると、其柔弱なる葛はシツカリと大木の幹に取りついて離れませんが、折れかゝつても折れぬやうに守りませう、平生は強い櫛の木が弱い葛を守り、非常な場合には弱い葛が却つて強い櫛の木を守ります、實に巧みなる天の配劑と申さねばなりません、婦人の身も丁度其如くで、尋常平和の時には花にもまさる優美の徳をそなへ、夫にかしづき舅姑につかへ、少しの事にも耻らいて顔を

赤くすると云ふやうなことは誠にこの上もなきことであるが、しかし一朝國家に事あるときとか、又は非常な災難に出會ふたときには落膽せる夫を慰め失望せる兒童を勵まし、奮闘的生活をつゞけしむるものは、全く婦人の力である、してみれば、婦人は子を産むのみではなくて子を活かすはたらきがなくてはなりません、夫を樂ましむるばかりでなく、夫を救ふ力を持たねばなりません、かくありてこそ賢母良妻と云ふことが出来るのである。

俗語 なかいよいとて禮儀をかくな

圓 云ふ字も角に書く

夫婦の間の心得を云ふたものである、夫婦別ありとか申しまして、如何に睦まじいとて禮儀を欠いてはならぬ、禮儀を欠くのは、遂

に一家のみだれるもごゝなる。

雜錄 慈恩尼の「婦人の道」

慈恩尼、曾て婦人の道を説いて云ふやう、總じて女は何事にも我身をへり下つて高ぶる心なく、つゝまやかにうやくしくして、我身によき事ありてもおのれが、名を顯はさず、人のあしき事をも我身に引き受け、はぢしめられてもよく堪忍びて、舅姑、夫の心次第になり、己が私意を用いずして、慎みて眞實にしたがふが女の道なり。

フボ 父母 **【佛語】**

梵に耶波弟隣、此に父母と云ふ、楊子は「父母は子之天地ナリ無ンハ天何ヲ以テカ生セン無ンハ地何ヲ以テカ形メン」といへり、

歌 父は照る母は涙の雨となり

同じ恵みに育つ撫子

父と云ふ字は釋名に、甫なり始めて己を生ずるものなりと注し、又白虎通には矩なり法度を以て子を教ふるなりと解きて、父は我身を生みつけて下された本であつて、又生れてからはよく教訓を與へ玉ふ處の人であります母と云ふ字は、蒼頡篇の意によりますれば、其字の形は女と云ふ字の中に兩點をうつたので、其兩點は兩方の乳に象り、子を養育することをあらはしたものであります、この父母の因縁が和合して成長したのが我々五尺の身體であります、さりながら父は嚴、母は慈、父は光りで、母は雨、これは其重なる所について且く分配して申したゞけの事で、其實は父にも養育の恩があり、母にも教訓の徳があ

る、父も涙を流し母も光りを與ふるので、子に對する親心は決して父母の異りはありませんぬのです。

歌 父母の恩をば深く思ふべし

彌陀たのむ身を育て玉へば

本願を聞く耳も合はす兩手も拜む眼も、身體髮膚を父母より受けた此身なれば、かゝる御法を信することも全く父母の御恩であること知られ、親の御恩は明け暮れ深く思はねばなりませんぬ。

フライコウ 不來迎 **【佛語】**

信の一念に光明に攝め取らるゝを以て來迎を期せぬを云ふ、

歌 出づるごも入るごも月を思はねば

心にかゝる山の端もなし

十五夜の月も待ち兼ね眺め様とすれば、曇らぬばよいが、障りがなければよいがと案ずれども、十五夜もしらす、宵から寝る機になりてみれば、曇らふが障りがあらふが、心にかゝる山の端もなしで、何にも心にかゝることはなると云ふ歌の意、今も正念往生の月を眺めんとしてこそ、妻子の障りや散亂の雲が邪魔になれど、念佛三昧で死んでも浄土まいり、苦しやくで死んで念佛一遍も稱へず死んでも、息のどまりは極樂が宿と、領解一つが定まりたなら、何も臨終に案じこたはない。

【醫論】 娘の家に母の居續け

一人娘を縁付けた處が、姑小姑に氣兼ね子供は大勢、年中難義しづめにして居るゆへ

の云ふには、是非とも此母が娘をつれてかへるゆへ、別に迎ひに来るに及ばぬと云つた、今が丁度其如く、阿彌陀如來の母様は、久遠劫の昔より、末代の今日まで、惡業煩惱で苦しむづめにして居る我々を、其苦しみの根をまいて浄土の蓮臺で樂む顔を見てやりたひ、たのむ一念にはやく浄土へつれかへり度ひの御心なれども、親の心子知らず、惡業煩惱の仕舞仕事にかゝりはて、浄土へ急ぐ心がなきゆへ、惡人女人を迷ひの娑婆において歸りては、もし往生を仕損じはせぬかと思召して、是非とも此度は浄土へつれて歸らにやおかぬの御心ゆへ、たのむ一念より埴生の小屋に大悲の親様の居續けちやぞや、臨終斷末魔に至り、化佛菩薩の迎ひに及ばぬ、大悲の親が是

せめては自宅へ十日でもつれて来て樂がさせたりたいと思へども、縁付たれば我が娘でも思ふ様にもならぬ、どうぞ〜と思ふ内、幸ひ祭禮ゆへ、それをこつげに呼びよせて、ゆつくり樂がさせてやりたいと、思ふころから使もやらず、母親が十日前から向ふへゆき、母の心では直につれてかへりたいと思へども、親の心根知らぬ娘はなかく直に行ふとせず、亭主の羽織や、子供の着物、あれしてからこれしてからと急がぬゆへ、母が先へかへりては若しよう來まいかと案じ、是非共つれてかへりたい心から、母は娘の家に居續けちや、さて何日立ても母が歸らぬゆへ又自宅からの使ひ、いよいよ祭禮は何日ゆへ丁稚でも迎ひにやろうかと使をやれば、母親

非とも連れて歸るとあるが攝取の御利益、年寄りた母親が、聾や姑の其中に何の居續けしたかろう、娘がつれて歸りたさに、つらい氣兼ね打ち忘れ母の居續け、今阿彌陀如來も惡業の黒烟りの立つ其中に居續けは往生一ツの仕損じさせてはならぬ、是非とも浄土へ連れて歸らすはおくまひの御心より、五欲の家に大悲の彌陀は居續けちやぞや。

フランクリン 【人名】

一七五二年電光と電氣同一物なることを確證す、電氣學の造詣深し、又一七六五年英國政府が新大陸殖民地に課税すべく印紙條例を發布せしに對し英國に派遣せられ其不條理を辨論して翌年三月之を撤回せしめたり、外交上の名高し、一七九〇年没す

【説書】 フランクリン肉食を禁す

フランクリンは種々の書籍を研究する中に肉食の非を論じ肉食の功をのべた、書を讀んで大に悟り、直に肉食を禁じ毎日蔬菜の類は

かりを食べた、朋友が其の奇を笑ふと、フランクリンは更に意とせず、反て之が爲めに食費の半額を減じ、書籍購求の費用に充てる便を得、其の他種々の利益を得ることを以て人に誇つたのである、フランクリンがいふには「予が印刷所に居つた時、予が兄を始め数多の職工どもは、予を工場に遺して各自家に歸つて食事をした、然るに予は獨工場で、一片の麵包と、一塊の菓子と、一杯の水で食事を済し、衆人が歸つて来る迄は讀書をしたので、ツマリ予が考察の明と理會の速かなのは、即ち予が飲食を節制した結果である」と、古來佛敎者が、肉食を重じて肉食を斥けたのも、固より慈悲の道徳から起つたものではあるが、又智を尊ぶの結果、飲食を節制し

たものである。

フランクリンの十二徳

節制 餘計に食ふことなかれ澤山に飲む事

なかれ、

沈黙 他人の益にも自分の益にもならぬ無

益の談話はこれを避くべし、

整齊 所持の物品は其所を一定し豫定の仕

事は其時を設くべし、

決斷 自己の職分は力て之を成さんと決心

すべし、一旦決心したることは滞

りなく之を成すべし、

儉約 他人の益にも自分の益にもならざる

ことに金錢は勿論徒らに一物を費す

事なかれ、

勉強 時間は常に要用なることのみを使用

フリウモンジ 不立文字 【術語】

如來出世の本懐は直に人心を指して開悟せしめん爲めなり、文字言句の中にあらずと云ふ意、

唐辛

唐辛を喰べると大變辛い、しかしながら其味はどんなものかと問ふたならば、如何でありませう、山葵の様なものか、そうだと云へなぬ、そんなら焼鹽みたやうなものであるかと云ふに、そうだと云へない、それなら山椒のやうであるかと云ふに、そうとも云へない、如何に説明をなし比較をしても、實際の所は分らぬから、赤い唐辛を一つ咬んでみるより外はないのである、説明の聞きたい人には赤い唐辛をすゝめるより外はない、今佛敎に向ふて、科學的に研究するのも、歴史的

信實 詐偽をなす事勿れ總て正直に考へ眞實に話すべし、

正直 不正の所業を爲し又は自身の職分を怠りて他人に損害を與ふることなかれ。

抑制 總て極端の事をなすこと勿れ自ら適當なりと信する如くに不足の所業を増長すべからず、

清潔 自身衣服又は居室を不潔ならしむることなかれ、

靜肅 小事に驚くことなかれ又免れ難き災

難にあふも其心を亂すことなかれ、

仁愛 自身の平和を全ふし他人の名譽を毀

くることなかれ。

に研究するのにも、悪いではない、これによつて佛教の光輝をします。鮮明ならしむるのであるからよろしいに違ひはなれども、飢ゑておる人や渴しておる人には、パンの説明や水の解説よりも、一滴の水や一片のパンが必要である如く、所謂冷暖自知で、理屈を云ふておるよりも自分が之を信仰するのが一番の近道である、これによりて禪家では、以心傳心不立文字とたてるのである。

フリヨウアツチ 不了佛智 【術語】

自力疑心の人ば明丁に佛智を信ぜざるが故に……

影法師

十五夜の明月を見やうと思ふて、月に向ふた時には我が影は後ろにある、又、月を後ろ

にすると我が影は前にある、自力の行者は不了佛智と云ふて、本願の月を後ろにして佛智を疑ふておるから、たのみごころや信じごころの影法師をながめて、或時はさもと思ひ、或時は往生如何と、若存若亡の心中で居るのちや、それが明信佛智と云ふて明かな本願の月に向ふてみれば、至心信樂己れを忘れてかゝる機までも御助け下さるは、たい大悲の親様御一佛でござるかご落つかせてもらう、これが信心決定と申すものちや。

フレデリック 【人名】

一七二三年一月に生る、父はフレデリック、ウキリア二世、母はソシア、プロテアなり、一小國の普國一躍強國の列に加はらしめたるは偏に此王の力なり、

フレデリック大王と侍童

フレデリック大王が、一日、頻りに呼鈴を

打ち鳴らされたのに、誰も答へて罷り出るものなかつたので、常に侍童の侍り居る室の戸を開き窺いて見給ふと、侍童は椅子に凭つて居睡つて居つたのである、ソコデ大王は、侍童を醒さうと、室内に入られたところが、不圖、侍童の袂から、手紙の端が現はれて居るのを見られて、何事か認めてあるだらうかと、竊にとつて開いて見らるゝと、侍童の母より贈つた手紙で、侍童より贈つてくれる俵給の資で、心安く生計を支へて居ると、細ましくに禮を述べ、終に杖とも柱とも頼む一子であれば御奉公の間は、神も憐んで、恵を垂れて下さいと祈つて、筆をこめてあつた、大王は之を読み了つて、音のせぬやうに居間に歸り、一葉の貨幣をとり出し、手紙と共に侍

フリヨウアツチ

童の袂に入れ置いて、再び居間に歸つて、はげしく呼鈴を打ち鳴らされたら、侍童は驚き醒めて、慌しく戸を開いて入つて来ると、汝は、よく坐睡つて居たなといはれ侍童は畏つて謝罪を陳べ、何心なく袂へ手をさし入れると、貨幣があつた、ハツト驚いて取り出したが、顔の色は忽ち青くなつて一言も得いはず、只大王の御顔を見上げ兩眼に涙を流した大王は「汝は如何した、何處ぞ病氣なのか」と問はれたから、侍童は跪いて「誰かは存じませぬが臣を陥れて傷はふと計つたでありませう、臣は此金かどうして臣の袂に入つたか、毫も覺へませぬ」と御答へ申すと、大王は、神が我々の睡中に恵みを垂れ給ふことは往々例がある、其金は予が與へたのである

汝の母に贈つてやるがよい、予は今より母と汝の行末を保護してつかはさう」といはれた

へ之部

ヘイセイゴウジヨウ 平生業成 【術語】

平生の時に往生の業事成辨するを云ふ、

青年と老人

老人ありて、青年の者に向ふて其最も恐るべきものは何であるかと尋ねました、甲曰く貧である、老人曰く、貧は恐るゝに足りませぬ其恐るべきは貧にして志のないのである乙曰く賤である、老人曰く、賤は恐るゝに足りませぬ其恐るべきは賤にして能のないので

ある、丙曰く老である、老人曰く、老は恐るゝに足りませぬ、其恐るべきは老ひて空しく生るのであります、丁曰く死である、老人曰く、死は恐るゝに足りませぬ、其恐るべきは死して聞なきである、青年等老人に反問して云ふには、然らば老人は何を以て恐るべきものとなすでありますか、老人曰く、我は平生ほど恐るべきものはないと信じております、依て我は平生を恐れ平生を慎みますと答へられたとある。

譬

碁は一石にて死活の定まるものであるが、或時、甲平と乙助とが碁を打つて居るのを、丙太郎は傍らで見居た、危機一髪と云ふ場合に成ると、一生懸命に力癪を入れて見てお

る、すると甲平はいきなり丙太郎の頭をぶちなぐりた、丙太郎驚いて「何をやるのだ」と云ふと、甲平は「貴様傍から助言をしようとするからだ」と云ふた、丙太郎の云ふやう、「おれは一言も助言はせぬ、助言をせぬのに打つとは亂暴だ」と云ふと、甲平は「助言した後ならば、おれが貴様を打つた所が何の所詮もないでないか、それだからおれは、貴様が助言せぬ先に打つたのだ」と答へたと云ふ話がある、これは大に味ふべき事であつて、世間の處世上に應用し、又出世間の信仰問題についても大にこの考をもたねばなりません、助言した後ならば打つた所が何の所詮もない、助言せぬ先に打つたと云ふは、所謂轉ばぬ先に杖をつくのと同じことである、平生

の時に後生の用意をすると云ふも亦この意なので、地獄へ落ちてから泣いても悔んでも取りかへしはつきませぬから、性根のたしかな間に、たのむべきは彌陀如来、まいるべきは安養の淨土なりと云ふの覺悟に基かねばなりません。

旅行の用意

明日は十五六里もある所へ行こうと思へば前夜からチャンと辨當路用の用意をいたし、百里二百里の長旅をしよう云ふ人なら一月も先から支度にかゝりて旅費を用意する、それは何故なれば、空手で旅へ出たなら、宿をとるごか晝飯を食ふごかいふ其時になつてから難儀不自由をせねばならぬゆへ、遠大の計と云ふて、何事も前方からの用意と云ふこと

がないと、後悔しても甲斐がないと云ふ誠め
 ぢや、人間の一生も丁度旅路を行く如くで、
 幼い時から學校に往き種々な學問をするのも
 皆成長の後の用意ぢや、さて成長の後にはそ
 れ／＼職業をはげみて、勤儉貯蓄するは、老
 ひて後に不足なきやう、不意の災難にかゝつ
 た時の用意を前以て致しおかねばならぬ、災
 難にかゝつてからうらたへ、老ひて後に後悔
 しても、「盗人を捕へて繩をなふ」道理で決し
 て間にあはぬ、故に「遠き慮なき時は必
 す近き憂あり」と心得て油断なく其用意をせ
 にやならぬ、善導大師は、
 一度泥梨に入つて長苦を受け、始めて娑
 婆の善知識を念ふ、
 と、鬼の阿責を受くる時に始めて此娑婆の御

教化が戀ふなりても、更に其甲斐はない、こ
 の所に氣がついたなら、これ迄の大機懈怠
 は改悔懺悔とあやまりはで、本願に乗托する
 之が平生業成と申すもの。

監獄の宣告

監獄へも數回はいらたと云ふやうな惡漢不
 頼の徒は、因果の道理に暗く、竊に人の家に
 忍び入り、種々の金品を強奪し、猶其上に人
 の命を取りて強盜殺人と云ふやうな重罪を犯
 した、されど人に知れぬやうにつゝみかくし
 品物も我が近邊では賣り捌かず、百里三百里
 の遠方におくりて賣り捌ひ、なるべく人の目
 にならぬやうにかくして、僥倖にも二三年を
 すごした、然るに少しの所より事あらはれ警
 官の手に捕へられ、一往警察の調べもすみ、

次に豫審の取調を受け、追々に地方裁判所に
 送られて、幾多の月日を経て、其終りに裁判
 長は一枚の宣告文にて初めて死刑に處するこ
 申渡された、この時になつてから惡漢は悔い
 ても詮はない、たい死刑執行の日を待つばか
 りである、而してこの惡漢は裁判長の宣告を
 受けた時に始めて罪がきまるやうに思ふゆへ
 いろ／＼な愚痴をこぼせども、宣告をうけた
 時に始めて定まりた死刑ではない、己れがひ
 そかに他の家へ忍び入り人の生命を傷けたと
 き其場さらずに死刑の業は結んでおるので、
 これが平生業成にして、所刑場の臨終になつ
 てから始めて定まる罪にあらず。

歌

守ることも動かすながら小山田の
 いたづらならぬ案山子なるかな

こちらで十分に備へてあるならば、いつど
 んな事に遇ふとも、事に躓づく心配はない、
 人が陥れんとしても反對に相手を説服して益
 々こちらの方あり徳あることを示すに至るも
 のである。

句 燈火の用意かしこし秋の暮

十年程以前の事であるが、編者は山命によ
 つて北國へ出張し、數十日間の聖務を終り
 て歸途に就いた、富山の停車場へ來ると洪水
 にて瀛車不通と云ふ揭示がしてある、されど
 致方がないから行けるまで行ってみようと思
 ふて乗り込みましたが、柳ヶ瀬トンネルに損
 所が出来て居たので、とうとう匹田と云ふ片
 田舎に一泊せねばならぬこととなつた、處が
 編者の投宿した家は匹田第一流の旅館なれど

其設備の不完全なこと、待遇の不行届なこと
 は話にならぬ、座敷へ通つたきり、煙草の火
 も持つて来ねば茶一ぱいも出さない、日が暮
 れておるのにランプもともさない、編者は非
 常に閉口して手をボン／＼と打ち、はやくラ
 ンプを……」と催促すると「ハイ只今はや
 を買ひに行つて居ますから、しばらく御待ち
 下され」と云ふて、又三十分間程たつても火
 をともさない、再び手を打つて「まだはやを
 買ひに行つてかへらぬのか」と問ふと「ハイ
 ほやは買つて来ましたが、石油がなくなりて
 居たので只今買ひにゆきました」と云ふた、
 編者はあきれ、「この次にはしんを買ひに行
 くのであろう、さても／＼暢氣千萬なことぢ
 やナア」と、不平を訴へておると、どーもお

そくなりまして……」と云ふて下女がラン
 プを持つて来たがケ様のつまらぬ宿にとまり
 てまことに不愉快を感じたことがある、其後
 御門跡様、當時は新門様であつたけれど、の
 平生業成と云ふ題にて詠まれた上の十七文字
 を拜見して、匹田の宿屋の事に想ひ到り非常
 にとふとく感じた、日の至りて短くて仕事の
 多いのは秋であるから、日暮になつてから彼
 や是やとさはぐより、朝の間にちやんとラン
 プの掃除をなしておく如く、平生の時に御法
 義をきいて往生一定の身となるが平生業成で
 あると云ふ御教化です。

羅網之鳥悔不ニテ高飛
 吞釣之魚悔不ニテ深沈
 網にかけられて取らるゝ鳥に、モ少し高く

飛べばよかつたにと捕へられた後に悔み、釣
 にかゝつてとらるゝ魚は、ア、モ少し水底ふ
 かく沈んで居ればよかつたにと、捕られた後
 で悔むとある、命の内にかく後生も願は
 ず、心の疑ひをも晴らさずして、死後に閻魔
 の朝廷へ引き出され、獄卒の責をうくる段に
 なつてから、臍を噛んで後悔しても何の所詮
 もない程に、命のうちに急いで未來の用意を
 せよとあるのが、平生業成の御宗意でありま
 す。

商家の張紙

或商家の柱に張紙あり、曰く、
 大晦日に晝寝すべし、
 元日より十露盤に向ふべし
 この言葉いやしけれども、商賣の針砭なり

大晦日とは元日の宵なれば、元日より油断の
 ならぬことなり、古人も、
 一日の計は晨にあり
 一年の計は春にあり
 一家の計は身にあり
 一生の計は勤にあり
 といへり（人言草）

ヘイタロウ 平太郎

常陸國の農民にして深く親鸞聖人に歸依せる信者なり
 御傳鈔下巻第五段に出つ、

平太郎の熊野參詣

平太郎の熊野參詣は、仁治元年十二月にし
 て聖人六十八歳の時の事である、平太郎は、
 常陸國那荷の西の郡大部の郷の人にして、聖
 人の御勸化を聽聞して無二の信者でありたが

時の領主佐竹刑部左衛門末賢、少し宿願ありて、熊野に年籠に参詣せられるに付て、平太郎は農夫の事なれば歩にさゝれて御供の役を云ひつけられた、そこで平太郎思ふ様はかねて聖人の御教化に念佛の行者は必ず現世祈の爲めに神や佛にまいるなよ、これ雑行の一にして千人に一人も往生はならぬとの、事はよくよく聴聞して居るが、然るに此度地頭の現世祈りに参詣さるゝに、御供をして熊野へまいるならば雑行になりはせまいか、ごも心の中に合點がゆかぬ、つくづく思ひまわせば聖人御歸洛の後も心ある同行は一度も二度も上京して御見舞申上らるゝのに、自分は貧乏人ゆへ一度も御見舞も申上げぬ、今度行く熊野とやらは京を通りて行くことあれば、

よき事の序ぢやで、聖人の御目にかゝりて、右の義を御尋ね申すとしよう、参詣しても苦しからずとの仰せならば参ろうし、又往生の障りになることあらば、今生は一旦の事、永き未來とかへることはならぬ、地頭の御咎を受ることも決して参詣は致すまいと決心して佐竹地頭の御供をして、京都に着くや否、早速西の洞院の禮坊に尋ねにまいられた、之が御傳鈔下巻第五段目の發端であります。

聖人は平太郎の熱心なる御尋に對して、初めに淨土眞宗の安心たる一向專念のことはりをば經論釋を引いて懇ろに御教化あそばし次に差當りたる問題、即ち熊野参詣の心得を御示しなされてあることは、御傳鈔の上で御聽聞の通りである、要するに其方が今度の熊

野参詣は、自身の願の祈禱の爲めではなし、地頭よりの申付けなれば参詣してよいが、別火を食ふたり物忌みなどをやる様なことはいらぬ、これ等は皆清淨潔白を顯はす爲めなれど、見かけばかり精進潔白を顯はしても心の中に虚假不實の穢れがあるゆへに見かけばかりの清めはいらぬ、元來熊野權現の御本地は阿彌陀如來にして、其本地の誓願に本爲凡夫とあるからは、かゝる淺間布き身を迎へ取りて下さるは實に難有き事であると喜び、一心一向に南無阿彌陀佛々々々々御稱名をとなへて参詣いたせとの事がありたから、平太郎は其御教化をうけて西の洞院の禪房を退き、熊野に趣かれたのです、これ念佛行者は神の御前にまいるにも、現世いのりの願立は

せねども、種々に御手まわしの御恩の程を思ひて、神明を輕しめ奉らぬやう、神社を粗末にせぬやうにせよとの御手本であります。

平太郎は聖人の御教化を蒙りて、念佛となへ、地頭の御供をして熊野参詣の途に上りたが、田邊の浦と云ふ處に行たれば、其頃の暴風の爲めに多くの船が破損したものが、一人の死骸が濱邊に打ちよせてあるのに誰一人としてこの死骸を吊ふものもない様子、平太郎はこれを見て不便に思ふたが、主人佐竹殿を初め數多の御供の人々はもの忌みして目にもろくの不淨をも見ぬ様にしてゆかれるから、平太郎は夜の中に田邊の浦へ行って彼の死骸を埋め念佛申して吊はれた、かゝる不淨のあることは人々夢にも知らず、何事もなく

熊野へ参詣致されたが、其夜平太郎は不思議の靈夢を蒙られた、所は証誠殿の拜殿、數多御供の人々と共に通夜して眠るかと思ふと、神殿の扉を開きて衣冠正しき俗人出て來られ平太郎を見玉ひて「汝何故に此方を侮りて汚穢不淨の身を以て参詣するや、言語道斷憎き奴かな」と御咎めなさるゝ、平太郎は其有様を見て恐れ入りて居ると、祖師聖人忽然として顯はれ玉ひ、權現と對座なされて仰やる様「彼は善信が勧めによりて念佛するもので御座る」と、權現忽ちに顔色麗はしく、笏を正しく持ち腰を屈めて云はるゝやう、「さては念佛の行者か、ありがたや」と禮拜なされて一言の御言葉もなかりたと思ふと夢がさめた平太郎はこの事を奇異に思ふて下向のとき都

に上り、右の次第を聖人に申上ぐれば、されば其事なりとの玉ひて、驚き玉ふ模様も見ねなんだ、これ冥衆護持の御利益であります。

ペンペン 辨圓【人名】

修驗道を學び、播磨公辨圓と稱す、後、觀宗に歸し、明法房、證信と改む、建長三年十月寂す、壽六十八、

因縁 辨圓の臨終

明法房は聖人より十二年先だちて、建長三年十月十三日に、六十八歳にして往生遂げられた、其事を常陸國横會根の性信房より、其翌年正月下旬に聖人へ申上られたれば、聖人も深く喜び給ひて、御返事をつかわされた、其御返事が「御消息集」に載せてある、文に曰く、

明法の御房、往生の本意をとげておはし

まし候こそ、常陸の國內の之に志おわします人々の爲めに芽出度きことにて候へとも仰せられ、又、明法などの往生しておわしますも、本は不思議のひがごを思ひなごしたるころをも、ひるがへしなごしてこそ候へ、又明法の御房の往生のこと、驚き申すべきにはあらねども、かへすくうれしく候、鹿島行方の奥郡かやうの往生を願はせ給ふ人々の皆の御喜びにて候。

建長四年二月二十四日

愚禿親鸞 御判

常陸國證信御房外同行中へ

として下された、然れば明法房の往生は、聖人の御教化、悪人攝取の本願なることを顯は

して末世の龜鑑とし玉ふ思召にて、御傳鈔にもたいこの事を二十五ヶ年の御化導中に引きあげて記されたのである。

因縁 辨圓の悔悟「イタジキヤマ」の下をみよ

辨圓悔悟の後日譚「イタジキヤマ」の下をみよ

辨圓の眞似する人は多けれど

明法房にならふ人なし

昔の辨圓の眞似をせずと明法房の眞似をせうぞや、邪見我慢の辨圓が、刀杖をすて頭巾を取り柿の衣を改めて、忍辱の衣を着た柔順の明法房、これ皆超世の願功ちやぞや、嫁と姑がしのぎを削り、近所隣りに顔のふり合ひ、意根重ねた敵でも、六字となへる身とな

れば、和いて日暮しの身になるが轉悪成善の御利益であります。

ペンケイ 辨慶 【人名】

幼名は鬼若丸、武藏坊一と稱す、熊野別當灌増の子にして、出雲鰐淵山の僧なり、

談話 辨慶の勸進帳

九郎判官義経が、兄頼朝と不和の時、奥州秀衡をたのみて落ちゆくに、東大寺大佛殿の勸進とて、山伏修験の姿にやつし、一統が打ち揃ふて下られたが、加賀の富樫の一族の守る安宅の關所を通る時、「つらがまへが當時鎌倉より草を分けて御吟味ある義経に能く似て居る、いぶかしい待て」と聲かけて捕へようどせられたら、さすが才智の辨慶、即座に大音あげて勸進帳を読み上げた、富樫は「勸進

帳に用はない義経によく似たものを吟味せよとあれば、辨慶はかの義経を引倒し、大地へなげつけ、草鞋にて頭を踏みつけ「おのれがつらがまへが當時御尋ねの義経とやらに似て居るどて、所々の關所でとがめられ、邪魔をする憎いやつ、モウつれぬあとへ戻れ」とてした、か打擲した、關守も誠の主人の義経なれば、かくまでは振舞はじと、不審をばらし通した、次の宿へつき義経を上座に直し辨慶は九尺ばかり飛び下り「今日は計らず不慮の振舞ひ、眞平御高免を願ひ奉る、さりながら斯くなければ通られぬ其場のしき、三代相恩の御主人を、よみつけねばならぬ味方の薄運、無禮の程は幾重にも御容赦下されと詫られたとある。」

談話 有智無智三十里

義経が辨慶をつれて奥州へ下られた時の事であるが、或日、田舎の農家に泊られた、この家には十二三を頭として澤山な小供がある辨慶が其家の主人に尋ねるに、「さて〜大勢の小供ちや、幾人あるぞ」と申しければ、主人の答ふる様「妻の子が六人と私の子が六人と合せて九人御座る」と云ふた、辨慶は「も合點がゆかぬ、六人と六人となれば十二人それに九人と云ふは如何なる譯であろうかと心には不審を抱きながら、我慢な質ゆへ義経公に尋ねもせず、三十里が間考へたれど、どうしても分らぬものゆへ義経に尋ねたら、其答に、「今の妻は後妻とみわる、主人が三人連れて居る處へ、妻は三人つれて後妻に來た

それから夫婦になりてから三人出來たものぢや、このあとから出來た三人の子は父の子でもあり母の子でもあるゆへ、家つきの三人と今出來た三人とを合はしてみれば、主人の子が六人と云はるゝ、又妻がつれて來た三人と今出來た三人とを合はしてみると妻の子も六人と云はるゝ、されど實は九人であると云ふことぢや」と説明したので、辨慶もなる程と初めて合點がいつた、これ辨慶の智恵でさばけぬことを、義経の智恵で早速さばけた、これを俗に有智無智三十里と云ふたものである

ペンキヨウ 勉強 【世語】

身の骨折りを惜まずして、物事を能くつとむるを云ふ

譬喩 金剛石と木炭

金剛石といふものは實に貴いもので、其價

の高いことは、とても金でも白金でも及ばぬ所謂寶石の中でも一番結構なものだから、豆粒位の大きさのものを一個持て居ても可なりの大盡だ、然るにソレがどう云ふ所から出るものかといふと、川の砂利や土泥の中から拾ひ出すのたソ一だ、拾は初めは泥土や砂が澤山付て居て定めてきたないものだらうが、さて磨き上げて見れば目のくらむほどの光りが出るなんと驚き入たものではないか、玉磨かざれば光なしとはほんとうによく云ふたものだと思はれる、人も學問して智慧を磨けばいかなる立派な人にもなれるが土の中に埋めて置ては何にもならぬといふ事が是でも分る、併しコレ云ふと或る人は、其は元來のきじが金剛石だから磨き甲斐があるのだが、我々の様な中

までの泥は磨ても駄目だらうと云ふかも知れぬが、其が大間違だて、金剛石もよく其性質を分析してしらべて見ると、何にもめづらしいものは入居らぬ、木炭や石炭と大抵同じやうなもので出来て居るソ一だ、同じ物でも木炭や石炭となりて居れば、きはめてありふれた魚末なもので、誰も珍重はせぬが、其が金剛石となることステキなもので、二重三重の箱の中に安置せらら、位の事ではない、大英國女皇陛下の御胸のあたりや、佛蘭西皇帝那翁第一世の劍の頭に遠慮なく光り輝くといふ事になる、ソ一シテ見れば器量次第で平民から大勳位までも上らるゝ今日、利口者でも馬鹿者でも、一と奮發して勉強して見ずばならぬではないか。

譬喩 雨滴と檐下の石

世の中の大抵の事は根さへよければ仕遂げられぬ事はないたゆまず、息まず勉強さへすれば多年の後は吃度成功は間違ない、早い處が檐下の石を見るがよい、石はもとより固いもの、水は非常にやはらかなものだが年中落ちかゝる雨滴の爲めに遂に石に穴があくではないか、昔し或る人は學問が出来ぬので、とても駄目とあきらめやうかと思つたが、不圖檐下の石が雨滴で穴のあいたのを見て、スツカリ意をあらため非常に勉強して、大學者になつたといふ事だが、至極御尤の事と思はれる、諺にかせぐに貧乏追付かすとは、さてもよく云ふたものかな。

ペンドウミロク 便同彌勤

【術語】

念佛行者と彌勤菩薩と同じ位になることなり、正保來和讃に「すなはち彌勤にになじて」とあり、

句 提燈を持てば旦那の先きに立ち

下女であろうが丁稚であろうが、提燈持つたら、いつも旦那の先きに立ち、いつでも後につくべき筈の下女や丁稚が先きに立つたは提燈を持つた御蔭ぢや、今我々は曾無一善唯知作悪と云ふて、地獄一定の泥凡夫なれど、一念歸命の提燈もてば、

五十六億七千萬、彌勤菩薩はとしをへんまことの信心する人はこのたび證りをひらくべし信の一念から正定聚不退の菩薩仲間、息き眼の閉ぢ次第……。

句 大雪やいかな野もなし山もなし

大雪が降ると萬里銀世界を現出する、野も

山もない、見ゆるかぎり不夜城の有様ぢや、
 今が丁度其如く、等覺補處の彌勤菩薩を下ろ
 して来て罪造りの我等が仲間へ御入なされ、
 三悪道では六字のゆはれが聞かされぬゆへ、
 佛光照耀最第一乃至大應供を歸命せよ」三惡
 道の蓋あけて、こゝへござれと人間界へ呼ひ
 出して聞かせて下さる炎王光の御働き、そこ
 で、等覺補處の彌勤菩薩も、從苦入苦從冥入
 冥、我人も高低なしに、平等施一切六字の寶
 を與へて下さるのぢや。

古語 雖ニ溪邊千尺、松ニ如カ嶺上一寸、草ニ
 溪間から生立つた大木の松と、一夜の間に
 嶺の上にはゑた一寸程の草といづれが、高い
 かといへば、千年もかゝつて立ちのびた松よ
 りは、一寸程の草が遙か上に立つてゐるのは

高い山の頂に生へた徳、今日の迷ひの凡夫
 が彌勤菩薩に先がけて此度さとりを開くは
 阿彌陀如來の御慈悲の頂きに育てあげて下さ
 れた御蔭ぢや。

木之部

ホウオン 報恩 【術語】

四恩に報ゆることにして、人生の最も美德なり、

談叢 大智禪師の行持

大智禪師には五百人の御弟子があつて、毎
 日々々其弟子方の爲めに講釋をして居られた
 年はハヤ八十を越へ九十に垂んとする老僧な
 れども、大作務と云ふて、一山中の坊さん達

が残らずより合ふて仕事をするときには、九
 十になん／＼とする老僧も、弟子達にませり
 て仕事をせらるゝ、弟子方は老僧の仕事をせ
 らるゝのを氣の毒に思ひ、ごうかして休ませ
 てあげたいものであると云ふので、或日の大
 掃除に箒を隠しておいた、そこで老僧は仕
 方がないものであるから、不平な顔して自分
 の居間へ引こんだが、そうして居る間にお晝
 の齋の太鼓がなると、五百人の御弟子達がみ
 な出て御飯を頂く、禪宗ではたとひ師たるも
 のでもやはり小僧と一處に御飯をいたいくの
 ですが、其日に限つて和尙はいつまでも出て
 來ない、そこで弟子達が行つて、「なせに御出
 ましなされませぬか」と問ふたれば、老僧の
 云はるゝに「貴様達は今日箒を隠しておれ

に報恩の行持をさせなかつたから「一日不レ
 作。一日不レ食」今日一日は食はぬのであると
 云ふて、どう／＼老僧は一日食はなかつたと
 ある、一日作さざれば一日食はずとは、誠に
 高尚優美なる行持と云はなければなりません

談叢 趙盾一飯の恩

趙盾が以前晋の太夫であつた時、或る日、
 郊外に出遊する途すがら、一人の饑人を見た
 ので、不惑に堪へず、持合した壺飧を與へて
 汝は誰人かと問ふと、「私は齊の國の靈輒とい
 ふ者であります、三年間遊學して、今歸らう
 と思ひますが、何分旅費が盡きて食事を
 することも出来ませぬ」と答へたので、趙盾もま
 す／＼之を憫んで、更に食を與へると、靈輒
 は大に喜び、歸つてから靈公の守門の甲士と

爲つたのである、その後、趙盾は或る事情からして、靈公と諍ひを始め、靈公は非常に立腹して、趙盾を殺そうとしたのであるが、其時靈輒が役を勤めて居たのを幸ひに、趙盾が乗つて居る車を扶けてやつと其難を免れたので、趙盾は大に喜び、深く其恩を感謝すること靈輒が答へて云ふには、「我は以前貴公に助けられた飢人でありませぬ、彼の時貴公から食を恵まれ、此一命を助かつて、斯様に守門の役を勤めて居るのであります、それゆへ本日は聊か其舊恩に報ひたので、別に貴公の感謝を受ける譯はありませぬ」と。

歌

箸鷹のこいゆる足をぬくめ鳥
恩を知らぬは人にこそあれ
奥山にすむ箸鷹の冬の空になると、夕暮に

一羽の子鳥をつかんで歸り、一夜已れが足を温め、さて夜があけると云ふと、其子鳥をにがしてやり、東へにげると云ふと其日一日は東へゆかず、西へ飛べば其日一日は西へ向ふて鳥をどらぬとある、あらけない鳥類でさへ僅か一夜足をぬくめた恩を思ひ其鳥の去つた方面へは飛びゆかぬとあるに、まして人間に生れながら、恩を恩としらぬは淺ましいことではなしかと云ふ歌のこゝろであります。

羅録 扇の解

或道話の中に「扇の解」と云ふが掲げてある、これは報恩と云ふことについて、誠に味ひある手近き教訓であると思ふから、此に載せておかう。

涼しきは風なり、風は扇より生ず、扇は

扇屋より得たり、得たるの道は錢なり、錢は君の俸祿より出てたり、しかれども手と指となくんばいかでか此扇を動かすことを得んや、手と指とはこれ父母に受けたたり、扇をあげて君親の恩を知るべし仰ぐべし我身の上のあつさより
君と親との恩のあつさを

ホウオンコウ

報恩講

【行事】

眞宗に於て宗祖眞大師の徳を報せん爲めに、毎年十一月二十一日より二十八日迄（本願寺派は一月九日より十六日迄）七晝夜の法要を修するを云ふ、

詩

鎌倉付ニ麋鹿ニ室府委ニ灰塵ニ
一姓優婆塞還テ傳フ五百春

これは親鸞聖人五百五十年の御遠忌に際して、僧意戒の需に應じ、頼山陽先生の作られた詩であります、源頼朝の崇寛の身を以て、

一朝天下の大權を掌握し、幕府を鎌倉に開いたことでありたが、僅か二世で亡びてしもうて、鎌倉の跡は草茫茫と麋鹿のあそぶばかりで、誰も崇め尊むものとはありませぬ、又同時に起りた足利氏だとして、其僑奢を極めた室町の跡も、いつか焼拂はれて灰になりてしもうて今は跡方もありませぬ、特に感心せぬ精神でありたから、其代々の木像は維新の際に河原へ引き出されて打首にされた程です、親鸞聖人もこの鎌倉時代に出られた方で、其頃には田舎をまわりておられた、みすばらしき名もなき乞食坊主同様でした、特に肉食妻帯非僧非俗であるから優婆塞と云ふ、その親鸞聖人が、還つて傳ふ五百春で、六百年後の今日に於ては、百萬の門徒をひかへ、日本精

神界の霸王として、今でも其報恩の爲め生命をも惜まぬものがあるは何故でせうか、いふまでもなく南無阿彌陀佛と云ふ信仰がありたからであります。

詩 昨夜落花、雨滿城流水香

春の頃、花の見事に咲たるに、あつたらものを春雨が打落した、夜來風雨、聲花落知多少と作りた通り、昨夜は思ひもよらぬ雨風ゆへ、今日は澤山に花が流れて所々の水に浮ぶほごに溝川が香ひ渡ると云ふ詩の句ぢや、今拜み奉る阿彌陀如來は十劫の昔、正覺御成就あらせられ、正覺大音響流十方と、法界海へ響きわたりにて、丁度花が水に流るゝ如く、此處の水も彼處の河も香ひ渡る様に、京も田舎も御教化の花の薫りわたる今日唯今。

詩 尋常一様窓前月

纔有二三梅花便不同

日に三度の食事にかはりはなれども、佳い肴があるご格別飯がすゝむ、月影のさへて我家の窓をてらすはいつも同じ事なれども、早春梅の開いた折りに、月の光りも一しほ面白ひと云ふ詩の意、御法義を喜ぶに時節のゑらびはない、一年三百六十日、信心相續は同じことなれども、別して報恩講の時節は祖師聖人御遷化の正忌なれば、流れを流む面々は御在世の昔を慕ひ六百五十年前この世に御出現あらせられ、末代凡夫の手を引いて浄土往生とげさせうとて、かすゝの苦御勞ありし事が一層喜ばるゝ。

詩 去國三巴遠、登樓萬里春

儂心江上客是不故郷人

故郷を離れて他國に住居をして居れば、世間は春ぢや賑ふて居ても、花見遊山に誘ふてくれる人もなし、せめて春の景色を見ようと思ふて、高い樓上に上りてみれば、友人つれだちて花見に行く人もあり、夫婦手を引いて出かけられて居る人もあれど、皆顔を見知らぬ人ばかりで、誠に心淋しいと云ふころを詠じたものである、今なぞらへて頂いてみれば、御影向の御開山様、十萬億西の御浄土からわざとこの梵筵に御出まし下だされ、他力信心のゆはれを知らざる、定散自力の同行ばかりでありたなら、如何ばかりか御歎きあそばすことぢやぞや、未安心未領解の人であるなら、眞赤な他人である、御慈悲の

きこねた身の上なら親子も同様ぢや、之を知らざるを以て他門とし、之を知れるを以て眞宗の印とすとはこのことぢや。

歌 立かへりまたも此世にあどたれん

なほ面白き和歌の浦波

玉津島明神は和歌三神の隨一なれば、金銀珠玉をちりばめて、結構な社であるなれど、あやふきの龜末な拜殿に柱も曲りてあるゆへに、御社造營の勅使の立たれば、明神の御詫宣に、社にはれて迹を垂れるではない、和歌の浦の名が面白さに此處に住むゆへに社造營には及ばぬこの玉ふたゆへ、今も見苦しい御殿にござる、今御影向の聖人も、寶池寶樹百寶莊嚴の蓮華の上に安座して、十方來生に圍繞せられ、百味飲食自然盈滿の極樂から、松

や檜でこしらへたこの御堂へ御出なされ、十
 悪五逆の同行と肩ならべて、一具の花束一瓶
 の花、心一杯の御馳走なれど、それに目で、
 御影向ではない、明神はもと和歌が御好きゆ
 へ、和歌の浦の名にめで、跡を垂れたまひ、
 御開山様は信心領解の同行の報謝相續の稱名
 が御好きちやで、報謝の稱名を喜んでの御影
 向ちや程に。

歌 こと問はんあしのまに〜時鳥

都のこを我れにきかせよ
 和泉式部が夫と同道にて和泉國へ下られた
 時、折しも時鳥の鳴く聲をきいて、急に都の
 方がこひしくなり、詠まれたのが只今の一首
 の歌、都のこを我れにきかせよ、都の話
 少しでも聞かしてくれよと云ふころです、

今なぞらへて御話に及ぶと、御影向の御開山
 様は、御本地は極樂浄土の阿彌陀如来、おの
 が使ひにおのが來にけりと、七百年の昔に此
 土へ御出現あらせられ、満九十年のその間、
 いろ〜さまざまの御骨折、殊に御臨終の
 夕には、

やむ子をばあづけてかへる旅の空

こころはこゝに残りこそすれ

と云ふを御名残りとして、浄土へ御かへりな
 されたが、毎年々々の報恩講には、御影向と
 云ふて影を宿らせらるゝとある、心ある人は
 時鳥の聲をきいてさへ都の方を慕ふもの、況
 んや御影向の御影前にひざまづかれた面々は
 一入大切のおもいより御聞き申さねばならぬ
 ことである。

歌 常盤なる松の緑も春くれは

今一入の色まさりけり
 常盤木の松は四季常任青々として、いつに
 かよりはなれども、別して春來れば緑の松
 も榮へ出て、一入おもしろい詠めちやと云ふ
 歌のころ、今なぞらへてみれば御法義を喜
 ぶのに、春も夏も秋も冬も、いつにかはりは
 なれども、別して報恩講の時節は、一信御
 法義の花盛り、よき時節ちやほごに、面々油
 断なく心にかけて聴聞せねばならぬ。

歌 命ありて相見んことの定めなく

おもひし春に逢ひにけるかな
 人間の命と云ふものは、高いも低いも老い
 たるも若きも、當にならぬもろき命を持つた
 身なれば、來年の花見は當にならぬと云ふて

居たに、又不定の命をながらへて、花咲く春
 に出あひ、去年にかわらぬ面白花見をする
 と云ふ歌のころ、蓮如上人の御教化に「來
 年の報恩講をも期し難き身なるあひだ等」と
 仰せられて、御座の我人の命は御互に露の命
 をかへたれば去年の報恩講が御暇乞ひにな
 るまひものでもないに、命は法の寶で、今ま
 で不定の露命をながらへ、またも今年の報恩
 講に出會ふとは、まことに喜びの中の喜びち
 や程に。

歌 秋くれぎ色もかはらぬ常盤山

餘所の紅葉を風ふかしける
 松や杉のはる茂つた山は、秋になつても色
 つかずかわらぬ、氣色であるゆへに、餘所の
 谷の紅葉を風にまかせて吹き送り、青い松や

杉の葉の上へ、赤い紅葉を吹きよせて、秋ちやと云ふことを知らせたと云ふ歌のこゝろぢや、今御座の我れ人の胸の中は、益も正月もいつもかはらぬ地獄の因まき、報恩講の秋來れど、祖師の御恩を思ひ出さず色も相もないゆへに、御勸化の紅葉を御慈悲の風に吹きたてられ、しぶとひ青葉の胸の中へさしよせて下さるゝ。

歌 ながく／＼に雲より上はいざしらす

見ゆるばかりも高き富士の根日本一の富士の山は、いつも峯に雲がかつて、半分程より見へぬゆへ、雲より上は何程あるやら知れぬども、見へておる處だけでも實に高い山である云ふ歌のこゝろ、今なぞらへて頂いてみると、法藏因位の御苦勞、

假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔の御骨折りはなかく、我等のはかりしられぬことなれど、今親鸞聖人とあらはれさせられ、満九十年石枕ら雪梅ねの御化導でさへ、實に不容易なこと、云はねばならぬ。

歌 龍田山麓の里は遠けれど、

嵐のつてに紅葉をぞ見る龍田山は紅葉の名所で麓の村里へは遠くありますれど、嶺より吹き下す嵐の力で高き山の頂にある紅葉を手近く見ると云ふ歌のこゝろ、佛の入滅より三千年の星霜を経たる末の世に生れた我等衆生は龍田山の麓の里人の紅葉を見ざる風情、然るに祖師聖人の御勸化は、嶺の紅葉を吹き下す嵐の如く、遙に遠き如來の御說法を末の世の我等に間近く聽聞さ

せて下さるゝは、偏に祖師聖人の御化導の御蔭

歌 みわたせば麓ばかりに咲き初めて

花も興あるみよしの山一葉落知天下、秋一花開知天下、春さすが名に負ふ吉野山、雲かど疑ふ千本櫻も春の初はまづうら／＼かに、一本か二本か咲き初る、其花を見るときは、今年も命ながらへて、花咲く春に逢ふたことかど、自ら喜びがおこる、段々花が咲き揃つて、萬山錦をさらすが如き満開の時節となれば、老も若きも世の中の憂さを忘れるが花の徳と云ふもの、今なぞらへて頂いてみれば、去年の報恩講には來年の報恩講も期し難くと思ふたが、不思議に命をながらへて、九月頃からばつ／＼と報

恩講がはじまりかける、御正當の前後には、彼地にも御影向此地にも御取越、佛法聽聞の花盛りにあへば、老も若もおしなへて聲をかざりに報謝の稱名を喜ばうぞ。

歌 雪ふれば木毎に花は咲にけり

何れを梅とわけて折らまじ雪ふりの景色を見れば、松も杉も柏も檜も皆花が咲いた様にみゆれども、朝日が出るご云ふと、雪はばら／＼と落ちてしまふが、其中にさいておる梅の花ばかりは馥郁たる香を放ちて、一しほの色香を増す、今御影向の御前にひざまづいて、皆如實の信心の如くみゆれども、御開山様の他心徹鑿の御まなじりより御照なされるご人並名聞の雪が消へて、未安心の化があるはれる、はやく日頃のあやま

れる心中を改悔懺悔して本願の大道へおい出してもらうのが、祖師聖人へ對する何よりの御報謝である。

歌 年経ればよはひは老ひぬしかはあれど花をしみればよの思ひなし

今年、花似去年一好去年人、至今年二老うつりかわる世のありさま、去年の花も今年の花も、花は同じ様にさげども、詠むる人はいつのまにやら老の白髪となり、歎きに沈むが世の習ひちやのに、花を愛する心が深かければこそ、年はよりたれども、花さへみれば物思ひなしと云ふ歌のころ、今御座の同行も、去年よりは今年、寒さもしみくことたへ、耳目手足身體ともにおそろへたれど、報恩講の御座にあへば、佛法繁昌の花ざかりち

やで、老の身の憂ひもつらひも打わすれて、命は法の寶とはほんとの事ちやと、一座々々の御化導も、吉野初瀬の春にあふた、こゝちで大切に聴聞いたされよ。

歌 散るは浮き散らぬは沈む山川の影も高雄の峯の紅葉々々

高雄の山は紅葉の名所でありて龍田山と同じところに人が賞翫するが、其高雄山の紅葉が秋風に誘はれて散りたのは水の面に浮み、未だ散らずに枝にある紅葉は水の底へ影が沈んでみわたる、散りたのが沈み散らぬのが浮みそうなものなれど、事實はそれと反對で、散りたのが浮み技にあるのが沈むと云ふ歌の趣向です、今なぞらへて頂いてみれば、散らずに枝にある紅葉とは阿彌陀如來、散りた紅葉

とは御開山、西方淨土の親様は沈んだ紅葉の如くで我々の肉眼で拜むことはならねども、御影向の御開山は浮いた紅葉の如くちやで、眼前にありくと拜み奉ることが出来るのです。

歌 立わかれ因幡の山の峰におふる

昔、政權が武門に歸する以前は、日本國中の政治は禁裡より取り行はせられたもので、公家衆が任國と云ふて國々へ下り三年を限りとして國民を治められてありたが、其當時に中納言行平公と云ふが因幡守に任せられたが三年の間因幡へ下り、仁政を施し、三年すみて京都へ上らせらるゝ時によませられたが只今の歌ちや、多くの百姓が御仁政を喜び、御

歸京のほどを、深くなげきかなしむゆへに、まつとしきかば今かへりこん、夫程に待つて居てくれるなれば、また歸り來るであろうとの意である、檀上の阿彌陀如來、花の都の淨土から、娑婆の田舎へ御誕生下されて、一生九十年の間、仁慈博愛の御教化、弘長二年霜月二十八日に、稱名もろとも淨土へ御歸りなされたれど、まつとしきかば今かへりこん待つものあらは今の間に立ちかへろうと、御影向下さるが報恩講である。

歌 月々に月みる月は多けれど

月みる月はこの月の月
一年十二ヶ月に満月は十二回ありといへども、明月と云ふは八月の十五夜に限る、其明月を見るのに名所と云ふがあつて、支那でな

らば洞庭湖とか峨眉山とか、又日本でならば須磨とか明石とか石山とかこれが名所ぢや、その名所明月と叫ぶるゝは時節と見所によるもので、月の體には決してかはり目はない、我家くで見ると月が四角で須磨や明石で見ると丸いと云ふでもなく、何國でみても月の體は丸いに違ひはなけれども、只時節と見所で明月と云はれ、名所と云はるゝ、今一念歸命の御安心、いつにかはりはなひ、元朝五更の曉から大晦徐夜の夕まで他方信心の御教導なれども、春は彼岸の満月あり、夏は夏中の満月あり、秋も彼岸の満月あれども、わけて御法義の名所明月と云ふは報恩講の御佛事、栴檀沈木の焼香に菊花を莊嚴して御影向の明月にあひ奉ることは喜びの中の喜びと申すもの。

歌 一つはとわかぬ常盤の山人も
空におごろく月の影かな

おい茂りたる松山の中に住んで居るゆへ、紅葉も知らず落葉も知らねば秋の景色は見へねども、變つたことには月の光が日に増し澄み冴へて来た、何時もの月とは違ふて此頃の月の光りを見れば見る程に冴へわたつて見るものも何となふ哀れに物悲しいやうになつたと、仲秋三五の良夜に驚いて詠んだが只今の歌ぢや、平生は未來のことなどは心にかけて無沙汰して寺へも寄りつかずに居る人は、世の果敢なきことも打忘れ、何時も常盤の思ひをなして佛法の有難さを知らねども、報恩講の時節になれば、「空に驚く月の影かな」で、

いつもの御座より何となく大切に思はれ、ついに浮ばぬ御稱名も、人真似になりとも稱へらるゝやうになる。

歌 幾重ともわかす積れる庭の雪

跡つけてこそ深さをも知れ

夜通し降つた大雪を、ア、なか／＼の大雪ぢやと眺めたばかりでは深さが知れぬが、庭に下りて雪の上を歩いてみれば、コハいかに膝まで埋るゝの、腰まで没するのと、一尺二尺の深さが知れる、此七晝夜の御法會は御開山の報恩講ぢやとて、到るところに勤まるから、御苦勞なされて下されたことは聞いてもおられうか、たい臍氣に存せられては残り多

歌 櫻狩り雨はふり來ぬ同くは

濡とも花の陰にかくれん

これは花を愛するの情を詠じたものである多くの人が花見に出かけても、例の「酒なく何のおのれが櫻かな」の主義で、徒らに飲めよさはげよの亂痴氣で終はり、眞に花を愛する人は少な、それゆへ俄か雨にても出遇ふと云ふと、幕をはづすやら毛布をたゝむやら足はやに後もふりむかすして歸るは實の花見ではない、實に花を賞玩する人なれば、花の盛りは二日か三日、今年みねば來春でなければ見られぬものを……と思ふと、雨がふり出して、其まゝすて、歸らふ様はない、幸ひ木の下陰に雨宿りしてたごひ身體はぬるゝとも、花を見て慰むこそ、實に花を愛する人とも云はるゝ、今この報恩講は一年に一度の

御敬ひ誠に法義に志さば如何なる用件を欠いてなりとも、この時節は御影前へ手足を運び、不請にも出仕をいたす内、雨がふるの風が吹くの用事があるのと、それを云ひ立て、懈怠するは第一不冥加の至り、來年の報恩講とて期し難ければ、濡ることも花の陰にかくれん、祖師聖人の御在世、關東北國の御苦勞も末の世の我等が爲めであつたかと思へば、雨や風は物の數かは、せめて／＼の思ひより、御報謝をつとめねばなりません。

この月にうつむくものは案山子かな

八月十五夜の明月、萬里玲瓏と照り輝く有様をながめて、如何なる人も今宵は明月ちやと云ふて、あおぬいて見ぬ人はあるまいに、其中に「うつむくものは案山子かなで」ふく

べで作つた鳥おどしは、何程さへきつた明月でも、よもやあをぬいて見る心はあるまい、あおぬく氣のない筈ちや、心のない鳥おどしの人形であるものをと云ふ句の意ちや、今もそれと同じことで、この報恩講の御佛事に出遇ひ、朝な夕な御大切な御教化を聴聞し、はやく第十八願の月を拜めよ、他力信心の月を宿せよと仰せらるゝ、御大切な御恩もおもはず、只うか／＼と暮そうなら、それは實に心のない鳥おどしの案山子同様ゆへ、木石にこそならんものか」とまで御異見下さるゝ。

人咸依就之若三葵菴、傾心以テ向フ日ニ也

これは史記にある詞で、堯舜とか文武周公とかの如き、徳を布き仁政を施せば、東西南

北よりなつき來ること、さながら日車の日に向ふ如くちやと御言なされたものである、あの日車と云ふ草は、日の出の時には東に向ひ日の回るに随ふてまわるゆへに日車と云ふ、雨天で日影の見へぬ日でも、この草を見れば時が知れる、日車が心ありて日に向ふか、太陽が心ありて日を招くか、これ造物者の無盡藏と云ふか、偶然の結果と云ふか、太陽も草も二ツながら無心な者なれど、自然天然に日に随ふてまわる、今御影向の御開山、門葉國郡に充滿し末流所々に遍布して幾千萬と云ふことを知らず、報恩講の御座と云ふと緇素老少歩みをはこび、御取越の御縁と云や稻摩竹葦の御繁昌、葵菴の心を傾けて日に向ふが如く、煩惱の雲に眼を障へられ、御影向の太陽

はみねねども、ついてまわるは御座の同行、聖人が招かせらるゝか、同行が思ひついたのか、同氣相求め同聲相應すことも云ふべきであらうか、境關千里の雲を凌ぎ隨道萬程の日をおくり、遺骨を拜して腸を斷つ者よくく不思議の因縁であると喜ばねばなりません。

桃李不言、下自成蹊

李廣か傳の讚の語、春の野に花か咲はいでや花見と人々見物にあつまる、幕を張り毛氈を布き、行厨を開き、酒宴をして歌ひつ舞ひの遊び戯るゝ、秋冬の間は、誰れか其邊へよりつく者もなければ、春になれば花に誘れ

てうかれゆく程に、花のおりからは、路のなひ處に自然と往來の蹊かつく、是が聲なふして人を喚の道理、漢の世に李廣と云人、時の

帝につかへて、天晴の忠臣、殊更弓の名人で在たか、天性慈悲深く、物あはれみければ、萬民悦んで親の如くに歸服した、然るに其みぎり、北匈奴の狄か毎度中國へ敵對するゆへ其れを鎮る爲に、度々大將してゆくに、いかな北狄も此大將には怖れ入て、一人も弓を引くものはなかりた、後六十有餘に及て、又大將して匈奴に趣しに、ごうしたか道をわすれて迷ひ出したほごに、數萬の軍兵が、はなれくになりた、李廣詮方たなく軍を引て中國へ歸りけるか、帝以の外逆鱗まし、無調法の次第を具さに口書せよと仰せ出された、其時李廣が申すには、拙者若年の節より、大將仰せ付けられ、北狄のわびすと、七十餘度の戦ひに及んだれども、つるに一度も、不利

をとらず、而るに年老ひて、六十餘に及び、此度迷ふて道を失ふたは、天命のつき方ら及ばず、刀筆吏に對して口書きするまでもなひとて、腰なる刀をすらりとぬき、自ら頸を刎て命終りた、其時民百姓が笑止がりて、さて「勞しや竟に是まで無調法のなひ人に、今度に限りて道をわすれるとは何事ぞ、年よりの自害あらいたはしやとて見す識すの者まで、泪を流した、其事を漢書に記して、奥に「桃李不言下自爲蹊」と書たは、聲なふして人を喚のこゝろを顯はした、準へて聽聞あらふ、祖師聖人御入滅以後、已に六百五十年御宗風年を追て御繁昌あられ、日本國の御門下と、面々に歩みを運で、御本廟を重んじ奉るは云に及ばず、夏もすぎ秋にもうつれば、

爰にも報恩講彼にも御うやまひと、末々在家の御内佛まで、毎年報恩講の格式をはづさず我もくと御影前へ集るはた、事ではない、聲なふして人を喚びたまふ祖師聖人の御念力よりあらはれたのであります。

古語 世有伯樂然後有三千里馬二千里、

馬ハ常ニ有レ而伯樂ハ不ニ常ニ有

千里の馬と云はい日に千里かける名馬の事千里の馬は澤山にはないものなれども、尋ねさへすれば、得られぬではない、而れども是が千里の馬ちやと賞鑑する者が唯の一人もなひ、「相スルハ馬ヲ失レ瘠タルニ」馬の善悪は肥た瘦たにはよらぬ、至極瘠て見つきのわるい馬でも思ひの外名馬があれども、相者がないに由てこのやうな瘦馬は役に立ぬと云てあつたら名

馬を醉駈にしてつかふ、然るにむかし伯樂と云は、馬の相する事の名人ゆへ、見つきによらず、是は名馬ちやと一目皆むと、其相は失なんだ、千里の馬も仕合よう此伯樂にあへば千兩道具になりて重寶せられた、惜ひ事は目利の上手は後にも前にも唯この伯樂一人、此人が死の後のまふ左様の鑑者がなひゆへ設ひ千里の名馬があても、「驥ハ垂ニテ兩耳ヲ服ニ蓋車ニ可愛さふに名馬とも知す駈馬にするは殘念な事は是に準じて聽聞あらふ、「彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛、」拜み奉る阿彌陀如來は、古往今來相かはらず、第十八願の主、我等が爲の佛なれども、惜ひ哉識鑒の仕手かなかりたゆへ、唯諸佛なみくの佛どうづもれ玉ひて、五劫劫求の御苦勞の甲斐もなかり

た、然るに祖師聖人あらはれ玉ひて、此阿彌陀如來は末代の悪人在家止住の我等か爲の如來にて在すぞと、御目利なされて下されたゆへ、我等もさては私が爲の佛でありがたやと往生に疑ひはるゝ様になつた、しかし我等が爲の如來ちやと云目利者が、廣ひ世界にも又と雙べてあると思ふな、後にも前にも、唯敬ひ奉る御開山ばかりにてある。

古語 蔭其樹者不折其枝

夏の頃に道のあるいて、やれあつや爰で一ト休みと樹蔭に立寄つて憩むときは、この木があつたればこそと恩を思ふて必ず枝を折るなとて誠められたのが、蔭其樹者不折其枝と云ふ語の意ちや、これは韓氏外傳にある語です、今我れは祖師聖人の御流を汲んで

彼方の御門徒とあるからは、差當り御恩を思はねばならぬ、代々浄土真宗の御開山の御門徒と云ふて、其御蔭を蒙り曠劫以來の迷ひを今生限りとして、次の生には浄土へまいらせ下さるゝのであるから、其御恩を思へば粉骨撞身してもあきたりはない。

因縁 佐久間盛政の敗軍

天正十一年四月二十日の夜、即ち賤ヶ岳合戦の起る前夜、柴田勝家は佐久間盛政を膝下に召しよせて一の嚴命を下した、賤ヶ岳にて勝つたならば直に本陣へ還つて来い、寸時も留まることは出来ぬ、秀吉は機敏な男であるから滞留したら必ず秀吉に破らるゝから勝利を得次第直に其足で此柳ヶ瀬の本陣に還つて来いと嚴命を下した、盛政は此訓令をうけて

其夜の中に出發し二十一日の曉には早くも余吾の湖水を環つて賤ヶ岳の麓に出で、まだ眠を覺まさぬ中川清秀の陣を襲ふて其首級を擧げ、此に非常なる勝利を博した、然るに盛政は勝家の命に背き容易に返らぬ、そこで勝家は櫛の齒を引くが如くに使き立て其歸陣を促したけれども、盛政は一時の勝利に慢心がおごりてなかく、勝家の命を奉せぬ、此時美濃岐阜に居た秀吉は賤ヶ岳の敗報を聞いて盛政は賤ヶ岳から已に退却したかせぬかを聞き正した、盛政はまだ退却せぬとの使者の一言をきくや、我れ大勝を得たりと躍り上り直に輕兵を提げて其日の夕方には賤ヶ岳に引き返し、其夜より攻撃にうつりて遂に盛政を擒にし其大軍を撃破した、此敗報を聞いた勝家

は、盛政終に我事を欺る、その一言を殘して空しく越前に引返し、鬼柴田と云はれた蓋世の英雄も終にこゝに自殺して仕まつた。そこで今日に至るまで勝家の識見を賞して盛政の無謀を憐まぬものはない、然るに人情に通せる識者の考は大にこれと異なる所がある、もし勝家がそれ程に盛政の歸陣を望むならば、柳ヶ瀬なる勝家の本陣と賤ヶ嶽とは直路一里に過ぎぬ程であるから、使者を出しても歸らぬならば、勝家自ら馬に乗つて一鞭加へて盛政を迎へに行き、勝家自ら盛政の手をとつて歸つたならば、如何に強盛な盛政も必ず本陣に返つたであらう、然るに謀こゝに出ですして、唯使をつかはした位で其まゝに打ちやつて、終に大軍を覆へしたは、勝

家も亦敗軍の責を免れぬ、勝家自ら手を取つて歸陣を促がしても、尚歸らぬと云ふならば其時こそ盛政は眞の強情者である、無謀者である。

今なぞらへて聴聞に及ぶと、西方浄土の阿彌陀如來は我等凡夫を極樂に引寄せうとて、觀音菩薩は聖德太子と姿をかへ、勢至菩薩は法然聖人と身をやつして、度々使者を立てられたれど、我々は強情にして、娑婆執着の心が強いから、本師法皇の阿彌陀如來が、愚禿親鸞と名乗らせられ、

ことづてにもれなん事の悲しさに

已が使に已が來にけり

我々の手を取つて御浄土の本陣へつれかへらねばおかぬとの思召ぢや。

因縁 稱念寺御繪傳の奇瑞

播州服部村稱念寺と云ふに大切なる御繪傳がある、其由來は其寺は甚だ貧地にして門徒が十二戸、在所が二十戸ばかりの處であるが其寺の住持は代々四幅の御繪傳を求めたいと云ふ望みはあれど、六十兩の金がなければ御迎へ申すことはならぬのであるが、初代目の住持は願心成就せずして空しく死んで仕舞ふた、二代目の住持も其願心ありたれども成就せず、三代目の住持に至りて父の志をついで、爪に火をこもす程に儉約をして十兩ばかりの金を貯へた、或時攝州の灘より嫁を迎へたが、筆司長持澤山なる荷物を持参したから、祝言終るなり住持は花嫁に向ふて云ふには、因縁ありて其許と夫婦の契りを結んだこ

とであるが、早速一つのたのみがある、實は當寺には御開山様の四幅の御繪傳がなるので祖父も一生苦心したれど、御迎へ申すことも叶はず、父も其志をうけついでいろく骨折れたれど同じく目的を達せずして終つた、そこで私も祖父や父の望みをかなへようと思ひ、儉約をして十兩ばかりの金は貯へたれど、あこの五十兩に困りておるで、誠に難題なれど其許の荷物を貸しては下さるまいかしと、手をついてたのめば、花嫁も心よく承知をして、かく夫婦となる上は荷物はおろか一命でも差上げる覺悟でござりますから、然るべく御使ひ下されと云ふた、住持は大に喜び早速質にやりて五十兩の金を借り自分の貯へて居る十兩と、合して六十兩の金をこしら

へ、同行二人と妻とをつれて京都本山へ上りたのちや、海上を船に乗りて行くに大阪へ二里手前と云ふ處で、非常の難風に出遇ひ、折りも悪ふ乗りて居る船が難船したが、住持や妻はどうやら斯うやら助かりたれど、肝心の金を持ちて居る同行が海底の藻屑となりた爲め、苦心してこしらへた六十兩の御金がなくなつた、住持はさめく泣き出した、三代前からの願心をかなへたいばかりに、其許までを丸裸にしてこしらへた六十兩の金、それが又運わるく金を持ちた同行が海中へまるとはよくく御開山様に因縁がないのちやて、已れもこゝで身を投げて死んでしまふと云ひ出した、妻は暫く思案して「マア御待ち下され、死んでは何の所詮もござらぬ、それ

よりは私に三年の日間下され、そうすると六十兩の御金が出来ます」と云ふ、「それは承知せぬでもなるがそうすれば、其方は勤め奉公をする機か」左様でござります、御開山様の満九十年の御苦勞のことを思へば、勤め奉公位はもの、數ではござりませぬ」と云ふて、それより鳥原へ身を賣り込み、首尾能く六十兩の金を調べ、直様本山へ上納いたされたれば、四幅御繪傳御下げになりた、住持は喜び寺へ持ち歸られ、門徒の人々も皆喜んで盛んなる御紐解の法要を営まれたが、不思議なることには、四幅目の一番上なる大谷の御眞影が御厨子ばかりで御姿がぬけてござる、京都で拜んだ時にはありくと拜まれたに、さてもくと不審に思ふて御座りた。

さて鳥原へ身を賣りた妻は、賣られた翌日より薩摩國の兵田と云ふ金持が来て其女を身請し、朝から晩まで御馳走づくめで遊ばして置くが、旦那は身請なされた日より何處へゆかれたか姿が見へぬ、それより三年目に來られて「サア只今から薩摩國へつれて行いて一生安樂にくらさせる程に……」と云ふて、旦那も、もに駕に乗りて薩摩國へ下りたが、其道筋で今の服部村の稱念寺の門前を通るに付て、旦那に「一寸待つて居て下され、私はこの寺に少々用事があるから……」と云ふて、寺へ這入りましたが、住持は驚いて「どうしてこゝへ來たぞ」と云ふにより、委細を逐一に話し、今生の御暇乞に四幅の御繪傳を拜まして下されと云ふゆへ、本堂へ出してか

けてみせられたが、茲に又不思議な事には三年の間、消れて御座りた大谷の御眞影様がありくと御座らせらるゝ、住持は二度叱驚してコリヤ妻よ聞いてくれ、この御眞影様は京都で拜んだ時にはありくと御座りたが寺へ歸りてからは、御姿が消れてみえず、不審に思ふて居たが、今又拜んでみれば明かに拜まれる」と大に喜んだ、妻の云ふ様「旦那が定めて待ち兼てござるでありませうから、これで御別れ致します、今生ではモハヤ御目にかゝることも六ヶ敷けれど、遠からず御浄土の蓮臺で再會を致しますから、御身體を大切になされて下さりませ」と、寺を出で、みれば旦那の姿が見へぬ、「兵田様々々」と呼んだれば、御繪傳四幅目の大谷の御眞影様が片足

をふみ出させられて、「コリヤ女、兵田と姿をかへたはこの親鸞でありたわい」と、本堂の中より呼んで下された、其御開山様が今の今まで御厨子の中より前の方へ片足ふみ出したまゝ、残らせられてある。

編者曰く、此因縁は越中光明寺玄門師の談録より抜萃せしなり、予先年此因縁を聞きて大に感じ、自國の事ゆへ服部村稱念寺と云ふを尋れど見當らず、予が自坊より一里南に八洞村稱念寺と云ふあり、本願寺派の寺院なり、服部村と八洞村と音便相似たるを以て此寺の事にあらずやと思ひ、現住職瀬川教淨氏に就て糺したれど、さる事なしと返答せらるゝ、又同寺の繪傳に奇瑞なしとの事なり、由是

觀之、服部村稱念寺と云ふは、播州にはなき様に思はる、或は國名違ひか、又は無稽の傳説か、暫く疑を存じて識者の考證を待つ、明治四十二年八月十五日、西播矢野村の自院に於て編者識

ホウシヤ 報謝 【衡語】

信心決定の上より稱名相續するを「一」と云ふ、改悔文に「この上の稱名は御恩一と喜び申候」とあり、

歌 残ることも見ぬ青葉の梢より

今もたへく散る櫻かな

「木の間の殘花」と云ふ題にて頼阿法師のよまれた歌、春の三月彌生の頃は、右も左も花見の酒、木のもとには汁も膾もさくらかなの風情でありた、それが四月五月の夏木立、ごこに一ツ花はみねねども、吹き來る風に誘は

れて、ひらくと散る花の分野は、眼には見ねども林の中に残れる花があると云ふ歌の意、今なぞらへて聽聞すれば、各々がこの御座へ集まられたは丁度花見に出て來たも同前目に拜むは報身果滿の阿彌陀如來、三國傳來の高僧方、耳にきくは無上のみのり、右や左はとも同行、見るも聞くも思ふも語るも、すべて御法義の花盛り、こゝを仕舞ふて我家へかへれば、三毒五欲の夏木立、叢林棘刺と御諭へなされてある、繁りし青葉の中より片々と散る花のあるは残りし櫻のある驗し、煩惱妄念の其中から、御報謝の稱名の喜ばるゝは御法義の花見に往たしるし、染香人のその身には香氣あるがごとくなり」とはこのことである。

句 善つくし美をつくしても芥子の花

驕る平氏は二十餘年、明智の天下はわづかに三日、田地畑家藏財産、思ふ通りに貯へても、未來の足しには少しもならぬ、今に散りゆく此身と知られたら、此御座かざりと驚きを立て、粉骨摧身の御報謝をつとめねばならませぬ。

譬諭 危難を救はれたる喜び

或人が用事がありて他行したが、歸り道に日が暮れて途中で追剎に出合ふた、例の通りのおどし文句をならべ、金を出さねば命を取るぞとにらみつけた、どうせうしらぬと思ふて、びく／＼ふるふておる所へ、幸に隣村の角力取が通りかゝり、追剎をおい散らしてくれたから、金も取られず命も取られず、ご

うやらこうやら無難に宅へもどることが出來た、さて其翌日には今の角力取の所へ、酒肴の用意して夫婦の者が禮に行た、御禮のかすくを陳べ、命の親様ぢやと云ふて喜んでござる、又翌日は餅ついて禮に行く、其翌日は壽司をこしらへて行く、酒を買ふて行く、魚を持つて行く、毎日々々、何か持つて禮にゆくと、女房の云ふには「そんなにせずともよいでせう、御禮もよいかげんにしておきなされ」と云ふと、主人「コリヤ女房よおれはあの人に命を助けてもろうたのぢやで、この命あらん限り三年でも五年でも、御禮に行かにやならぬわい」と云ふた、女房は我が助かりたのぢやないから、モウ御禮もよいかげんなされと云ふ、主人は我身が助かりたのぢや

で、此命あらん限り三年でも五年でも御禮に行かにならぬと云つた、御常流も御報謝にのちあらんかぎり云ふもこの味ひぢやぞや。

醫論 紳士の草履買ひ

金満家の旦那が嵐山へ花見にゆくに、細君やら小供やら、番頭丁稚下女などを多く連れ酒や辨當とのへ美服をまごふて出かけたが途中で一軒の茶店へ立ち寄り草履を一足買ふた、この草履は何程ぢや、ハイ壹錢です、それは高い八厘にまけなされ、イヤまかりませぬ、ドウぞ八厘にまけて下されと云ふて八厘錢をならべておいて草履をとりて、にげる様にして向ふへ行いて仕舞ふた、店の唄が云ふには、何としたきたなひ男ぢやとて大にそし

りた、この旦那は非常に立派な着物をきて、金縁眼鏡やら金側時計を持ちて居る紳士ぢやで、きたなひ道理はなけれど、それをきたなひと云ふのは、壹錢のものを八厘にねざりて、無理無體に取りてゆくから、それきたなひと云ふのぢや、今我々も聖道門の修行にくらべてみれば、丸はだかのなり浄土まいりの出来る易行易修の本願にあいなから、御報謝がつとまらぬとか、御給仕が太儀なとか、ねざりこざりをするゆへに、きたなひ信者ぢやと御呵りなされたのぢや、無宿善の乞食ではなし、正定聚の大福長者、浄土まいりの花見にゆく道中ぢやのに、御報謝のねざりこざりをするとは何たるきたなひことであろう美しい信心とは云はれぬのである。

醫論 作り花

他宗他門の御佛前の御花は、金や銀の蓮の花を立てゝある、斯くまで奇麗であるのになせに蝶がごまらぬのであろうかと、とくごみること作り花ぢや、浄土真宗の佛前の御花は曲んだ花もあれば不揃の花もあるが、それに蝶が来てとまるのは何故かと云へば、眞實の花で作り花ぢやなひ證據ぢや、今信不信も其如くで、如來聖人へつかへるのも、世間を多く見渡すに、表面さばかりの名聞人並の御敬ひをする作り花の人が多いもので、實に心底から大事をかけて信心の薫り眞實の花のやうな人が少ないものぢや、まこと如來の御慈悲がきこへ、信心決定の身の上は、起行作業の薫り色にもあらはれ相たにも見ゆるやうにならひ

ではならぬ。

醫論 鑄物師

鑄物師が鐘をいるに善き地金ばかりいるかと思ふと中々そうではない、金じやくしの曲んだのや煙管のつぶしの類ひ、又は曇つた鏡の古いのやを集めてたゝらにかけてふむと赤い湯となる、其時かねてこしらへておいた鑄形の中へ流しこめば直に結構な鐘となつて、撞木を當れば諸行無常の響がする、今が其如く、十方衆生のたのむ機にはいろ／＼あつて在家止住の煙管のつぶしや、出家の鏡の曇つたのもある、五障三從の金じやくしの曲んだもあれば、十惡五逆の古釘もあれば、阿彌陀如來の御鑄物師が、五劫永劫の御細工でこしらへさせられた、第十八願の鑄形の中へ、一

念歸命と流しこんで見れば、たのむ一念の立
處に機法一體の鐘となつて、善知識の御勸化
の撞木をあて、見れば、さても尊とや南無阿
彌陀佛と佛恩報謝の音があらはれる。

仁宗皇帝

唐の仁宗皇帝、或時臣下に仰せらるゝには
朕は左の手の平に少々疵があつて、時々痛む
は如何なる譯ぞと御下問なされた、すると一
人の臣下謹んで申上ぐるやう、「君御誕生の砌
御母君の長孫夫人様、けしからぬ御難産で胎
内が傷ませられ、壽道元と云ふ醫者に伺はせ
し處、宿らせたは太子にたまはせども、左
の御手にて御後の心の臓をにぎらせたまふゆ
へ痛ませられまする、尤もこのまゝにしてお
けば御二方とも御命がましますまぬ、又只今一

本の針を御手の脈處へ打ちますと手を離され
て御後の御命は助かれど御太子の御命がござ
りませぬ、又心の臓へ針を立てますれば心臓
は切れて握りながら太子は御誕生まし〜御
機嫌よくわたらせらるれど、御後の御命がな
くなりませぬ、彼是どひまごらば御二方とも危
ふござる如何致しませうと、御父高宗皇帝へ
伺ひましたら、太子は再び生るべし后を助け
よごの御勅諭ゆへ、醫者は已に御太子の御手
の脈處へ針を立てんとせし處、御母君長孫夫
人様「道元勅諭は如何ましますとも太子を
助けて自らが命をとりたまへ、世にありて甲
斐なき女の身、一天をしらしめす太子を殺し
奉らば自らゆへ天下を治めたまふ政道を忘
れたまふかと世間の笑もないとも限らぬ、太

子を殺し奉り、何の面目あつてか自らながら
へられふぞ、早く自らが心の臓へ針を打てよ
はやく〜と切なき息の中から仰せらるゝ、
御父帝様には物蔭より「然らば太子を助くべ
し」と仰せられたゆへ、道元は早速御母公の
心の臓へ一本の針を打ち奉れば、臟腑ちぎれ
て、君には御誕生まし〜て「ヤレ目出度や
と千秋樂を祝ひ奉りましたが、御母公には芙
蓉の花を焙る如くじみ〜と御命は終らせら
れてござる、其心の臓へ針をうつたとき、針
の先が御手のひらへ少し這入つた疵が只今の
御疵にてましますぞ」と申上たれば、仁宗皇
帝慟然として高御階を立ち四方を拜して、さ
ては其疵であつたよなと御母公の御恩をふか
く感謝せられ、それより疵のいたむ度毎に母

の御恩を思ひ出して喜ばれたとある、今御座
の我れ〜も三毒五慾の煩惱のおこる度ごと
に、この淺間布い煩惱が阿彌陀如來の五劫永
劫の御命とりであつたかとおへば、おこる煩
惱を御縁として、御恩報謝の大行ながわすれ
なく相續せねばなりません。

牡丹餅

家主の嫁が借屋の獨り住居の老婆の處へ、
内證で牡丹餅三ツ紙に包み、「これは内の姑に
かくして持つて来た程に、必ず禮を云ふて下
さるな」と止めておいた、其後この老婆が家
主の宅へ行いたら、姑と嫁が二人並んでおる
のに、嫁の顔みたらば「先日はあの牡丹」と
云ひ出したので、嫁は驚いて「お婆さん、ぼ
たとは何ちや」と云ひますと、老婆の氣がつ

いて、「ハイ坊さん御留主でござりまするか」と云ふた、「坊はこゝに居るに見へぬかへ」と姑が云ひますと「ハイほんに御機嫌よくつて御目出度う」と云ふて、早々にげかへつた、それから四五日たつて又出て来まして、同じく姑と嫁のおる前で「先日はあのぼ……」と云ふて、フト氣が付き「棒一本貸して下され」と云ひ紛らかし入りもせぬ棒を借りてかへつたと云ふ滑稽談がある、禮を云ふてくれるな、云ひますまいと云ふ約束であつても、牡丹餅もらふたがうれしくは、顔を見れば禮を云ふぞや、御慈悲もらふたうれしさにはねてもさめてもへだてなふ、南無阿彌陀佛々々々々どうかぶのが他力催促の大打と申すものである。

ホウジヨウウジマサ

北條氏政

【人名】

左京大夫に任し、相摸守を兼ね、小田原城に居る、天正十八年、七月自殺す、年六十三、

北條氏政の辭世

氏政は氏康の子にして、雄を關八州に張り居られた勇士でありたが、天正十八年秀吉のために攻められ、力弾き軍門に下りて自殺しました、その辭世に、

自他本是一 此死復尤誰誰

五十有三年 彈指愧無爲

吹きと吹く風は恨みぞ花の春

紅葉の残る秋あらばこそ

我身いまきゆると如何に思ふべき

空より來り空にかへれば

あめ雲のおほへる月もむねの霧

はらひにけりな秋の夕風

ホウジヨウトキム子

北條時宗

【人名】

北條六代の執權なり、相摸太郎と稱す、弘安七年卒す年三十四、

北條時宗と佛光國師

元の冠が九州の筑紫を襲ひ來たとき、北條時宗が討手に向はんと軍裝束して出立の際佛光國師を尋ねて「大事到來せり如何用心せん」と問ふたこれは、元の冠がせめて來たのであるから、實に我が日本國が興廢存亡の一大事の時、時宗に取つても一大事である、かゝる一大事の到來したのであるが、どう用心したものであろうかと問ひました、すると佛光國師は嘗てまだ支那に居られた時、明兵の爲めに捕はれて既に斷られんとする折柄

乾坤地の孤節を卑するなし

且喜が人空亦法空

珍重大元三尺の劍

電光影裡春風を斬る

と云ふ一詩を吟せられたによつて、明兵も其威徳に感じて殺されななんだといふ程の高僧であるから、「嘉直に進前せよ」と答へられた、これは自分の生死國家の勝敗と云ふやうな考が胸中にあつた分には、まさかの時に氣後れがして必勝といふことは得られぬから、生死勝敗と云ふやうな側目をふらず、眞一文字に突き進んでゆけど云ふころ、時宗も絶世の英雄だから、威を震ふて一喝した、即ち合點でござる、眞つこの通りに生死勝敗の兩頭を截斷して進まんと云ふ意氣込みであつたから